

---

# レポート

篠森京夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
レポート

【Nコード】  
N2244G

【作者名】  
篠森京夜

【あらすじ】  
『どうして、私は他の人間と関係しなければならないのだろうか?』

目を開くと薄汚れた天井が見えた。

黒ずんだ天井の木目は水墨画に描かれた川のように渦巻いている。木目の流れを目で追いながら、私は昔、天井の木目の節が何かの眼球に見えたことを思い出した。

身体がだるい。寝返りを打つと、シーツが直接素肌に擦れた。昨夜は何も身に纏わずに眠ってしまったらしい。

窓を覆う緑色のカーテンの隙間から、外の光が射し込んでいる。光は揺れるカーテンの端を濃緑から淡緑へと彩り、白いシーツの上に波模様を描いている。飛行機のエンジン音が遙か彼方から響き、窓の外には蝉の声。その規則正しい音に耳を傾けていると、再び睡魔が潮の満ちるように私の周りに溢れてきた。

どのくらいの時をこうしているのだろう。

わずかだが蝉の声と陽射しが強くなったような気がする。部屋の中はまだ涼しいが、夏の陽射しとアスファルトの放射熱で暖められた外の空気は、カーテンを揺らして中の空気と入れ替わり始めている。

起き上がらないと。

私は額を床に押し当てた。シーツ越しに畳の冷たさが伝わってくる。

起き上がらないと。

……起き上がらないと。  
身体が汗ばみ始めている。しかし、私は冷たい床に額を押し当てたままだ。まるで頭の中に水銀でも入っているような気分だ……有害な重金属である水銀は脳内で中毒を引き起こす。

……そうか、中毒か。

起き上がらないと。  
起き上がらないと……。

肘について身を起こす。

流れる水のように髪が肌を滑り落ちる。

頭の中の水銀が逆流する。

私は体を強張らせ、床に爪を立てた。

/

私の下着は部屋の隅に脱ぎ捨てられていた。シーツを身体に巻きつけ、網戸を開けてベランダに降り、たまった洗濯物と一緒に洗濯機に放り込む。ベランダからはアパートの前を横切る未舗装の道と、太陽を浮かべる青空が見えた。夏の陽射しから逃れ、早々に部屋へと戻る。

洗濯が終わるまでの間、私は机に向かうことにした。

この部屋にある物は少ない。蛍光灯やカレンダー、壁の金具にかけられたハンガーなどを除けば、壊れたラジオと小さな筆筒、そして二つの机。一つは私と彼が食事の際に用いる、いわゆるちゃぶ台型のもの。もう一つは私専用の小型の机だ。畳半分くらいの大きさで、脚は椅子の必要ない高さに切り揃えてある。

私は机の前に腰を下ろすと、引き出しからノートと筆記用具を取り出した。適当に開いたページは小さな文字でびっしりと埋め尽くされている。私は新しいページをめくり、今日の日付を書き込んだ。このノートにタイトルはついていない。ただ表紙の書き込みだけが、このノートの目的とナンバーを示している。

『観察日記 No. 13』

観察対象は私と彼……そして二人の関係だ。

私の名前は花村綾菜。

二十五才の女性で、職業は大学院生。専門は人工生命の進化様式の分析……詳しくは後に述べることになるだろうが、生物の進化を数値的にシミュレーションし、調べるのだと思ってくれればいい。今は大学を離れ、とある実験を行っている。

この部屋は実験用のフラスコだ。私はこのフラスコの中に身を横たえ、私の身にどのような変化が起こるのか、自分自身で観察している。そう言えばこの二週間、一度も部屋の外に出ていない。

当実験の命題は、要約すると『生きるとは何か？』だ。

……あまりに抽象的で二流の文学作品のような印象を受けるので訂正する。

『人間は何の為に生き、何を求めるのか？』

これも違うような気がする。

正直なところ、自分でもこの実験にどのような結果を求めているのか、完全に理解しているわけではない。実験の過程がその目的と方向性を定めてゆく……これに期待するしかないだろう。後の人間社会を大きく発展させるきっかけとなった、偉大な発見をもたらした実験の多くがそうであったように。

もっとも、私の実験が後の世に伝えられるほどのものとなるかどうかはわからないが。

突然だが、今、当実験の命題の良い要約例を思いついた。

前述の二つよりは核心に近い気がするので、ここに記しておく。

『どうして、私は他の人間と関係しなければならぬのだろうか？』

私は幼い頃から、愛されることが恐かった。

恋愛や性交渉が恐かったのではない。人間社会全ての関係と行動が恐かったのだ。中でも日常生活における他者との関係、とりわけ『愛情』に関するものは一番の恐怖の対象だった。

何気ない挨拶や、社交辞令、ちょっとした会話で自分が話題に上ることさえ、私にとっては苦痛だった。けなされている時のみならず、褒められている時でさえ……いや、褒められている時の方が辛かったように思う。

私は他人が自分に好意を持っていることが信じられなかった。人の言葉には必ず裏があると考えていたし、実際、私の周囲にはそのような人間が多かった。

自らけなされることを望んでいたわけではない。確かに人は、誰かを褒める時には心の内に複雑な打算を抱えていることが多く、けなす時は純粹に蔑むことしか考えていない。裏を探る必要がないという点では後者のほうが気が楽だ。

……だが苦痛であることに変わりはない。  
ならばどうすればいいのか？

幼き日の私は頭で考えるまでもなく、次第に誰とも関係を持たないように、そのきっかけさえ与えないように振る舞うようになっていった。

私はある時点から、誰かに『伝える』ということをやめた。同級生は勿論のこと、教師や保護者にも何も言わなかった。私は概ね『よくできる子』だったから、やがて保護者も私には干渉しなくなつた。

私は常に一人だった。友人が必要とも思えなかったし、行事や活動にも可能な限り参加しなかった。もっとも、中学生になる頃には、余りに極端に孤立すると逆に他者の介入を招いてしまう（どうして

一人にしておいてくれないだろうか？）ことを経験的に知っていたので、ある程度の繋がりは保持しておいた。

おそらく、私の学校での印象は『物静かな目立たない子』といった所だったのだろう。何処のクラスにも一人はいる、控え目で大人しい生徒……教師の印象も悪くない……。その程度のものだ。しかしその当時、私がどれほどの苦労と細心の注意を払ってその印象を作り上げたかを考えると、未だに目眩を起こしそうになる。

私にとって一切の人間の行動は理解しがたいものだった。どうしても人間は他者に関係を求め、くだらない行為を強制するのだろうか？私の人間に対する疑問は、その頃から始まったように思う。

少し、私の境遇にも触れておいたほうがいいだろう。

つい先程、私は『保護者』という言葉を使った。これは別に両親に対する拒絶や反発から生まれた表現というわけではなく、私が成人するまでの大部分を共に過ごした相手が本当の親ではなかったからだ。

私はとある港町の小さな教会で牧師の娘として生まれた。町外れの小高い丘の上に建てられた古い教会で、ペンキの剥げかった白い壁に蔦が絡まっていたことを覚えている。

母は私を生んですぐに亡くなり、私は幼き日々を父と二人で過ごすことになった。しかし私には、父との生活の記憶はほとんどない。憶えているのは、昼間の教会で何人かの信者に向かって話をする父の姿。そして夜、無数の蠟燭が紅い光を揺らめかせる祭壇の光景くらいだ。

それは何かの儀式だったのだろう。厳かなパイプオルガンの和音が、幾度となく同じ旋律を奏で続けている。私は祭壇へと続く通路に敷かれた紅い絨毯の中央に立ち、足元から響いてくる振動に身体をすくめているのだ。

やがて私は不安になり、父を呼ぶ。

祭壇に立つ父は、紅い外套を身に纏っている。そして振り返り、

何も心配することはないと言う。幼き日の私に微笑みかけることなく、父は再び祭壇に向かう……いや、これはただの夢かもしれない。

人の記憶というものは意外とあやふやなものだ。私がまだ幼かったということを差し引いても、この記憶には不自然な点が多く見受けられる。儀式にしては人が少なすぎることに、オルガン奏者の姿が見当たらないことなど……何よりも、教会で牧師が執り行う儀式の中には紅い外套を纏うものなどないはず。

おそらく、後に見た映画のシーンなどと混同しているのだろう。演説するローマ法王の姿を見て、父親の姿を思い浮かべたことがあるように。

私が六歳になった頃、父もまたこの世を去った。

死因は知らない。父の死に関わると思われる記憶もない。ただ、ある時点から私のそばに父の姿はなく、私は教会から遠く離れた親戚の家に引き取られていた。

私を引き取ったのは母の弟だった。私から見ると叔父にあたる、中規模の会社を経営する人物。妻と娘の三人で暮らしており、その中に私が加わることになった。後の私の観察例から分類すると、そこは非常によくあるパターンの、エゴイストで排他的な人間の集まる家だった。この類の人間における最大の特徴は、何の根拠もなく自分は他人よりも優れているという錯覚を抱きつつも、実際のところ自分には何一つとして優れた点などないのではないかという漠然とした不安を抱えているところだ。

彼らは自分と同レベルの仲間を集め、集団で行動する。自分と異質な存在が現れた場合には、何とかして自分よりも低い位置にそれを置くこととする。いや、本当は仲間内でもそのようにしたいのかもしれない。だがそれは困難だ。何故なら彼らは、本当に同レベルの集まりなのだから。

話を戻そう。



前述したような特徴を持つ人々の家庭に放り込まれた私は、延々と父と母の悪口を聞かされた挙げ句、庭に作られたプレハブ小屋に隔離された。彼らの話には十分すぎるほどの悪意が込められてはいたが、内容的にはバリエーションに乏しく、客観性を欠いていた。彼らの話は概ね次のような形に集約した。

あんな男と結婚したお前の母親は馬鹿で不幸だった。お前はあのもろくでもない男の血を引いているのだ、と。

彼らの話が何処まで本当かは知らない。母は死に、父も既にこの世にない今、父と母の関係がどのようなものだったのかなど知る由もないことだ。

いつの頃からか自分に父の記憶が殆どないことに気づいた私は、その後もことあるごとに両親の悪口を持ち出す叔母（叔父は酒を飲まない限り無口な人間だった）から逆に父のことを聞き出そうと試みたが、それは失敗に終わった。父のことを悪く言う割には、叔母は父のことを何一つとして知らなかったのだ。ただあるとき、ふらりと現れて、母を連れて行ったらしい。叔父の知っていることもそれだけだったし、私が父について知りえたのもそれだけだった。

私は父のことをよく考えた。

記憶の中に幽かに残る、痩せた長身の男の姿。

それは求める程に消えてゆく幻。

遠くからは見えるのに、決して触れることのできない深い霧の海だった。

私が大人しい子供だったことは既に記したと思う。

私は一日の殆どを学校と庭のプレハブ小屋の中で過ごした。親戚の者達は私が粗末な小屋の中で文句一つ言わずに暮らしていることが不思議でならなかったようだ。

確かにそこは狭く、壁も薄かった。冬は辛うじて風が防げる程度だったし、夏の暑さは更に酷かった。しかし他人と顔を合わせる苦痛に比べれば問題にならない程度のものだったし、何より私は肉体的な苦痛には強かった。

私は小さい頃、非常に感覚が鈍かったように思う。もう少し適切な表現を探せば、自分の感覚を、まるで他人のもののように感じるが多かった。

一度、夏の暑い日に小屋の中で脱水症状を起こして倒れたことがある。私は自分の身体から水分が抜け、皮膚の上を流れる汗さえ蒸発してゆく様子を冷静に感じ取っていた。やがて汗も出なくなり、私は畳に身を横たえたまま、容赦なく照りつける太陽を窓硝子越しに眺めていた。私の記憶はそこで途絶えている。

意識を取り戻したとき、叔母は全くお前は鈍い子だ、と言った。間違つて死なれでもしたら世間体が立たないではないか、と。しかし、その言葉も私にとっては遠くから響いてくる音のようにしか聞こえなかった。

私が全てのものを観察するようになったのはいつのことだろうか？ 親戚の家に引き取られると同時に、私は学校に通うようになった。私はそれまで、父以外の人間と生活したことがなかった。父との生活の記憶すら殆どないので実際のところはわからないが、少なくとも人間関係に関する知識はまったくと言っていいほど持っていなかったのは確かだ。

そんな私が、いきなり他人の大勢いる場所に放り込まれたのだ。私はまるで、見知らぬ大陸に流れ着いた漂流者のようだった。理解しがたい行動、何の意味があるのかわからない知識。言葉さえ満足には通じなかった。

私は戸惑った。私以外の者は同じ言葉を喋り、同じことを知っている。私は必死にそれについて行こうとしたが、皆は相変わらず私にはわからない言葉を喋りながら、同じ方向に向かって歩いて行く。彼等が『楽しい』と思うことは、私には『理解できない奇妙なこと』としか思えなかった。私は必死に皆と同じ行動を真似しながら、あらゆるものを観察し、その意味を探らなければならなかった。幸い、私は暫くすると表層的に彼等の習慣のパターンが把握できるようになってきた。しかし深層の部分……何故そのような行動をするのか、その知識に何の意味があるのか……については、どうしても理解できなかった。

しかし、理解が及ばなくとも生活するには十分だ。集めた行動サンプルの中から状況に応じて適当なものを選び出し、実行に移す。その行為は回数を重ねるにつれて精度を増し、もっともらくなる。そして、もう一つ。

私が観察し続けたものがあつた。

人間とは文化的な生物である。そう、かつて読んだ書物に記されていた。

私の知る限り、動物は自分と同じ身体的特徴と習慣を持つ生物と同じ種だと認める。その判別方法は、特徴的な模様や器官、体外に分泌するホルモンの匂いなど様々だ。

生まれたばかりの動物は、自分を育てる動物を親だと認識することもある。

そして人間の場合、その判別方法は更に複雑だ。

人間は例えば相手が人間でも、ある種の習慣の差で自分とはまるで異なる生物のように認識することがある。その場合の習慣の違いは、

例えば異なる民族の間では宗教、生活習慣全般の違いであり、同じ民族の中では貧富の差であったりする。

そしてテレビの番組や、服装のことだったりもする。

私が観察した中で最も興味深かった事例としては、とあるテレビ番組を見ていなかったというだけで、一人の同級生が私を『信じられない人間』だと決めつけたことだ。その番組は、当時かなりの人気を得ていた俳優が主演のドラマで……おそらくクラスメイトの大半は見ていたのではないかと思う。

彼女の意見を採用すると、約四十人いるクラスの人間は二つの人種に分けられた。

一つはその番組を見ている、いわゆる『正常』な人間。そしてもう一つは、その番組を見ていない『異常』な人間だ。

この二つの境界線は様々な形で引かれた。

例えば、ある流行の服を着ている人種、着ていない人種。

運動のできる人種、できない人種。

勉強のできる人種、できない人種。

生活が裕福な人種、不自由な人種……挙げればキリがない。

ある種の限定された集団内における『人間』の地位は、これら無数の境界線の中から拔擢された幾つかに対する立ち位置から総合的に判断されることになる。例えば前述の同級生は『話題の番組を見ている人種』かつ『流行りの服を着ている人種』であり、更に『髪がストレートでない人種』『活動的で目立つ人種』『家に新車のある人種』『週に三回学習塾に行っている人種』だった。察するに、クラスの女子の中ではかなり高い地位の人間だったのだらう。外からの評価は知らないが。

彼女とは逆に、多くの境界線に対して『そうでない人種』の側に含まれるグループがある。私も含めた『見ていない』『持っていない』『できない』『していない』人間だ。

私達は生物学的には『人間』のはずだが、『同じ』とは認識されない。

同じ人間ではないのだ。

たまたま私は『勉強のできる人種』だった。それもかなり。

私が学生生活を過ごした時代において、『勉強ができる』ということは、『服装が他人と違う』ことや『テレビや雑誌のことを全く知らない』ことを補って余りあるだけの価値があったようだ。私は週に三回塾に通っている同級生よりも勉強ができたし、自分から誰かと問題を起こすようなこともなかった。その為、私はクラスの中でも特殊な地位である『少し変わり者だけど、勉強のできる優等生』を得ることができた。

『そうである人種』は『そうである人種』間でも衝突し、更に多くの『そうでない人種』を生み出す。私は常に彼等の生態と文化の観察を続けたが、データの数が増えるばかりで、遂にその意味は理解できなかった。

……いや。

その後、少し理解することができた。

意味などない。

それが唯一の意味なのだと。

ノートを見返していると、いつの間にか正午を回っていることに気がついた。

大学時代、実験で用いるラットの飼育を任されたことがある。私は規則正しく決められた時間に決められた分量の餌を与え、ラットは仲間まで食べそうな勢いで餌を貪り尽くす。

私はラットの群れをよく眺めた。彼等は明日にも実験に使われ、神経に直接電極針を刺し込まれたり、過酷な運動を課せられたり、通常の何倍もの薬品を投与されたりする運命にある。しかし、彼等はそんなことは知らず餌を貪っている。

彼等は何故、飽きることなく食べ続けるのだろうか？

それはおそらく実験の時まで……やがて自らが死に至るその時まで生き続ける為だ。

そして今、私は自身を用いて実験を行っている。

私は食事を探ることにした。昔から食事に対する執着はあまりないが、実験に支障のない程度には健康を維持する必要がある。

実験を始めてから……彼と暮らし始めてから、私の食欲は増加の一途を辿っている。

これは興味深い傾向だ。

と、玄関のドアを叩く音がした。

ドアを開くと彼が立っていた。溢れる陽射しに背を向けて、吹き抜けの通路に立っている。チリチリと焼けつくような陽射しの中、汗に濡れたランニングシャツが筋肉質な褐色の肌に張りついている。私は目を細め、お帰りなさい、と言った。

彼は返事をせず、ただ機械的に頷いた。

彼の名前はケンジという。

本名は知らない。ただ『ケンジ』……それだけだ。  
そして彼こそが、私の実験のもう一人の対象である。

/

「どうしたの？　こんなに早く帰ってくるなんて」

私が訊ねると、ケンジは小さく「監督が怒る」と答えた。

大柄な身体が入ったせいで、アパートの部屋が更に狭くなったように見える。

「どうして？　監督さんと喧嘩したの？」

「違う……」

彼の声は何処か頼りなく、それが彼の発達した肉体とのギャップを生み出す。

「監督と……お客さんが……喧嘩した」

彼は床に座り込んだ。どうやら彼の勤め先である工事現場でトラブルが起き、今日の工事はストップ、ということらしい。

「よくあることよ。お客さんは自分の家のことで苛々しているのね」

私は汗ばんだ彼の身体をタオルで拭いた。日に焼けた彼の身体は何処までも濃い褐色だ。顔を近づけると、焼けた金属のような匂いがした。

「でも、監督は……オレのせいだって言った……お前が頭悪いからいけないんだって」

「そんなことはないわ。ケンジ、貴方は素晴らしい人よ」

私は彼の肌に頬を寄せた。彼の肌は滑らかで、筋肉はよく鍛えられ引き締まっている。こんな理想的な肉体を持つ者に何の不満があるというのだろうか？　私は会ったこともない『監督』への敵意を募らせた。

「アヤナ……」

不意にケンジが私を抱え込んだ。

逆らうこともできず、私は畳の上に押し倒される。

彼の息が首筋にかかり、熱い肉体が私を包み込んだ。

私の名前を呼ぶ時、彼の声は少し高く、いつそう弱々しくなる。まるで何もできない子供が、誰かに救いを求めているように。

「わかったわ。ケンジ……わかった」

私は彼の頭を胸に抱き寄せた。

「してもいいわ。いっぱいして……でも今は駄目よ」

ケンジが私の目を見た。多くの言葉を扱うことには長けていない彼だが、その目は言葉よりも多くのことを伝えることができる。私はこの時、彼の瞳の中に欲望よりも恐怖の感情を見て取った。

「私だって貴方に抱かれたいわ。貴方に愛されたい。でもね、私は朝から何も食べていないの。ケンジだってお腹空いたでしょう？だから、するのは御飯を食べてから……いい？」

ケンジは小さく頷くと私の上から退いた。

「ごめん……アヤナ」

「いいのよ。ケンジ」

私は立ち上がって台所に向かった。

「何が食べたい？」

ケンジは暫く視線を宙に漂わせ、やがてポツリと呟く。

「……オムライス」

予想通りの答えだ。彼は慰めてほしいとき、必ずオムライスを食べたがる。

問題は……私が未だにオムライスを作るのが苦手なことだ。

数十分の食材との格闘の末、私は何とかオムライスを作り上げた。味付けに関しては彼の好みに合うものを作り出せる自信があるのだが（調味料の配合など数十種類の薬品の調合に比べれば楽なものだ）、問題はケチャップを卵で包み込む作業。これがなかなか難しい。



しかし、今回はかなりオムライスに近いものが作り出せたように思う。この料理を見せてアンケートを取れば、おそらく『これはオムライスだ』との回答が過半数を占めるはずだ。

「実験なら有効数値とは言えないけど、選挙なら勝ちね」

料理を運びながら呟くと、ちゃぶ台の前に座ったケンジが不思議そうな顔をした。

「ごめんね。オムライス、いつも上手にできなくて」

「いいよ……オレ、アヤナのオムライス……好きだし」

ケンジはスプーンを逆手に持って答えた。彼は箸を使う事ができない。いつもスプーンで食事をする。それも逆手に持って。だから、彼はすくった物を口に運ぶ前に、その大半をこぼしてしまう。

以前、ケンジは箸を使わないのかと訊いたことがある。すると彼は目線を逸らし、小さな声で呟いた。

「アヤナ……センセイみたいなこと……言っな」

彼は自分の過去について話をしようとしないので、私には『センセイ』が誰なのかはわからない。しかし、彼の過去にそれにまつわる嫌なことがあったのは確かだ。

そして、彼は未だに箸を使えないでいる。

異論があるかもしれないが、私はそれはそれでいいのではないかと考えている。確かに箸は使えないよりは使えた方がいいだろうし、言葉もきちんと話せた方がいいだろう。しかし、どんな人間にもできない事はある。それは例えば水泳だったり、英単語の暗記だったりする。彼の場合はそれがたまたま初歩段階にあっただけだ。

万能の人間はいないし、誰にでも苦手なものはある。私がどうしても人間というものを理解できないように、ケンジは箸が使えない。それだけのことだ。

オムライスの卵はケンジのスプーンによってグシャグシャになってしまった。私の苦勞を考えるともう少し丁寧に食べてほしいものだが、元々上手くできていなかったので却って気が楽でもある。

ケンジは逆手に持ったスプーンで必死にバラバラになったオムライスを掬っていた。卵の中から飛び出したケチャップライスが皿の上に散らばり、それをまた掻き集め、猛スピードで平らげていく。遂には皿を持ち上げて残ったケチャップライスを口に流し込もうとして、ケンジは私に見つめられていることに気がついてらしく、手を止めた。

「……………どうしたの？ アヤナ……………早く食べないと」

どうやら、ケンジが急いで食べているのは空腹の為ではなく、早く私を抱きたいかららしい。私は彼の正直な欲求に苦笑した。

「そうね。早く食べないとね」

私は今、食事をしている。

それは栄養を摂取して生き延びる為だ。

今回の食事で、私は生命活動の維持限界を数時間延ばすことができるだろう。そして彼と交わることができる。彼を喜ばせることができる。

彼は私を欲し、私も彼を欲している。

私は生き延びたい。

生き延びて彼と共に時を過ごしたい。

だから、私は食事をしているのだ。

私は生まれてからずっと食事をし続けてきた。もしかすると、それは私と彼とを交わらせる為だったのかもしれない。

小学生の頃、私は今よりも人間らしくなかったように思う。そして、今よりもずっと人間というものに興味を抱いていた。

私は他人に悪意を抱いたことがほとんどない。私にとつて、他人の行動は全て観察の対象だ。だから誰が何をしようと、それは興味深い事柄でしかない。

観察を続け、データを集めて統計を取れば、いつか人間というものを理解できる。自分も人間になれる。私はそう信じていた。

そう、まるで青い髪の女神に「人間になりたい」と願った、ピノキオのように。

私は何度も『いじめ』と呼ばれる行為の対象となった。

小学四年生の頃、靴箱に入れておいた靴に画鋏と水性糊を大量に入れられたことがある。おそらく犯人は当時のクラスメイトの女子達だろう。

当時の私は今よりもずっと人間に関するデータが不足していた。私が最初に思ったことは、少女漫画によくあるパターンの嫌がらせの仕方だな、ということだ。それから、そう考えると犯人は相当に想像力に乏しい者か、もしくは人間というものは意外と似通った発想をするものだということになる、と考えた。そして靴の中味を取り出して、洗ってから履いて帰った。

どうやら、それを実行犯の者達が見ていたらしい。彼女らは私が表情一つ変えずに帰ったことに驚き、また翌日誰にも何も言わなかったことに戸惑ったようだ。翌朝私が教室に入った途端、何人かの女子が不自然に会話を途切れさせ、その後も奇異なものでも見るような視線が一日中つきまとった。

彼女らの行為は徐々にエスカレートしていった。おそらく彼女らは、私のことを臆病で何もできない人間だとも思っただろう。

それらはしばしば直接身体に危害が及ぶものでもあったが、しかし、当時の私には何の影響も与えはしなかった。

外界は全てぼんやりとしたものに感じられた。全ては水の流れに投げ込まれる石、私は深い水の底に身を横たえ、それらの起こす波紋をただ眺めていた。

彼女らは他の人間を傷つけ、疎外することに長けた者達だった。

私は彼女らが私以外の者に対しても同じような行為に及ぶ様子を何度も見た。彼女らの手口は巧妙で、的確に相手の弱い部分を喰いちぎる。私はあまりに彼女らの手腕が見事なので、このような行動は人間の本能的な部分に由来しているのではないかと考えた。生態系における捕食者と被捕食者のように……勿論本当に食べるわけではないが、人間にも他者を虐げることによって活力を得る機能が備わっているのではないかと。

だから彼女らは常に集団で行動するのだろう。自分の弱さを数で補い、万一遥かに勝る相手に出会ってしまった場合には、他の連中を犠牲にしても自分への被害を少なくする為に。

……話を戻そう。

クラスメイトのいじめ行為はしばらく続いたが、やがて彼女らは私に直接干渉することをやめ、時折、それも遠くから悪意のある言葉を投稿かけるだけになった。

彼女らは間違えたのだ。

確かに彼女らは他の人間に対してはその能力を効果的に発揮する事ができる。しかし私は当時、人間ではなかった。彼女らの捕食対象ですらなかったのだ。

/

橙色の空は灰色がかった群青となり、やがて闇に掻き消された。

夜が訪れると共に蝉の声が消えた。絶えず打ち返されていた小波のような音が消えると、周囲の空間が広く空虚になったような気が

する。

私は光のない部屋の中に視線を漂わせた。  
そこにあるはずの壁は何処にもなく、意識は闇に溶ける。何一つ  
遮るもののない空虚の中で、私の意識は彼方へと流れていった。

……幸せ？

声がした。私の心の傍らで。

いつの頃からか、私は自分の心の中にもう一人の自分を住まわせている。それは世界を眺めるもう一つの目。世界を分析する為に作り出した『二人目』だ。もう一人の『彼女』は『私』とは異なる意見を持ち、二人は時折討論を始める。私は『彼女』と並んで座り、世界を眺めてきた。

『彼女』は独立した人格ではない。それは『私』にコントロールされる存在だ。

……その、はずだった。

あの忌まわしい出来事が起きるまでは。

あれ以来、『彼女』は私に問い続ける。  
幸せ？ と。

「黙りなさい」

私は心の中からもう一人の存在を閉め出した。幸せか？ おそらくは幸せだろう。愛している存在が隣にいてくれる。彼と共にいられるなら私は幸せだ。

……自分に嘘をつき続けている限りは。

私は隣で眠るケンジの体に寄り添い、少し眠った。

いつの頃からか、よく見る夢がある。

夢の中の私は幼く、何処かの建物の中にいる。おそらく教会だろ

う。私は規則正しく並べられた長椅子の一つに横たわっている。

部屋は薄暗く、壁は白い。天井は高く、見上げると天窓の側に小さな十字架が鎖で縛りつけられている。

辺りを満たす空気は凍えるほどに冷たい。

そして。

何かが小さく軋む音がする。振り向く私の視線の先で、部屋の扉が開いてゆく。

夢の始まりは変わらない。この後の展開も同様に。

開け放たれた扉の隙間から一匹の蜘蛛が入ってくる。黒い毛に覆われ、時折覗く腹の赤い模様が血のように生々しい。人のように大きくなったり、銅貨ほどに小さくなったりしながら、ゆっくりと私に近づいてくる。

私は長椅子の上から蜘蛛を見つめ続ける。

やがて足下にまで到達した蜘蛛は、私の体の上に這い上がってくる。蜘蛛の足は氷のように冷たく、いつの間にか私の手足も凍りついて動かない。蜘蛛は私の首元に這い上がり、動きを止める。

天井を見上げると、暗闇の中、一条の光が天窓から射し込んでくる。

それは透明で白い光。

いつもそこで夢は終わる。

私は夢の中で、その凍りつくような冷たさに身を委ねている。

手足は凍りつき、何の感覚もない。そして私は白い光に向かって昇ってゆくのだ。

空間が引き裂かれるようなノイズが頭の中を満たすが、私は素晴らしい開放感と共に白い光の中を進んでいく。

だが。

目が覚めた途端、突き落とされたような絶望と恐怖が私を包み込む。

光など何処にもありはしない。ただあの部屋の冷たさだけが体に

残っているのだ。

最近、あの夢を見ない。

見ることがあっても、今の私は目覚めの恐怖を味わわなくてもいい。

……彼が側にいてくれるから。

私が体重をかけたせいか、眠っていたケンジが目を覚まし、電灯をつけた。

橙色の穏やかな光が彼の顔を浮かび上がらせた。

「どうしたの？」

「ごめんなさい、起こしちゃったみたいね」

「涙が出てる」

「そう？ ……でも何でもないので」

ケンジが私の髪を掻き上げた。大きな瞳がジッと私を見つめている。

「どうしたの？」

今度は私が彼に訊ねた。

「アヤナの眼……きれいだ」

「そんなことないわ。きっと電灯のせいよ」

「……そうじゃないよ」

私は今までずっと、誰かから褒められるのが嫌いだった。しかし彼の言葉は、何の抵抗もなく私の中に入ってくる。

「ありがとう」

彼に出会ってから、何度「ありがとう」という言葉を使っただろう？

ケンジはしばらく私の髪を撫でていたが、不意に起き上がると私の上に覆い被さってきた。彼の体温が私に染み込んでくる。

「ケンジ……」

私は彼の名前を呼んだ。

「何？」

優しい声で彼が訊ねた。少し舌足らずな高い声だ。

「ケンジの瞳も綺麗よ」

彼は照れ臭そうに微笑むと、私の体に顔を埋めた。

天井にはぼんやりとあの木目が見えた。

小さい頃は何かの眼に見えた……その感覚は今も変わらないでいる。

でも、今はあの頃のように怖がったりはしない。

ケンジが共にいてくれるなら何を見られても構わない……そう思っているからだ。



私はずっと何の関係も持たず、誰にも干渉されない立場でいたかった。

中学生の頃の私を知る者ならば、その願いは割と容易に叶えられていたように思うだろう。私は誰とも関わろうとせず、周囲の者も私に関わろうとしない。私は常日頃から『良い子』でいたし、当然問題など起こそうはずもないのだからと。

しかし、実際は当時が最も不安定な時期だった。それまで積み重ねてきた努力と経験の甲斐あって、ようやく辛うじて自分の立ち位置にしがみついていたに過ぎなかった。

その原因は、小学校高学年時代にまで遡る。

私の身体が意思に反して成長を始めたのだ。

私は成長などしたくなかった。派手な化粧をした騒がしい大人の女になどなりたくはなかった。同性だからだろうか？ 私には彼女らのあつかましさや無神経さがいちいち癪に触った。彼女らと同じ目で見られるようになるくらいなら、身体を傷つけてでも成長などしたくはなかった。

しかし、それでも私の成長は止まらなかった。

私はかなり第二次性徴の現れが早かったように思う。精神的な性への目覚めに至っては、当時の女性としては極めて早いものだったに違いない。

小学四年生、冬。

夕食を終えた私は母屋を離れ、一人プレハブ小屋の中で机に向かっていた。

当時は今よりもずっと四季がはっきりしており、最高気温が零度を下回ることも珍しくなく、流石に夜は母屋に寝かせてもらうことが多かった。しかし翌日提出の課題が残っていた私は、小屋で一夜

を明かすことにした。叔母は私の意志を尊重するとかで、わざわざ引き止めようとしなかった。

「やっぱり寒いな……」

吐息が白く霞み、口に当てた指の隙間から漏れる。

「まだ、残ってるしなあ」

私は机の上に広げたノートとプリントを見つめた。

当時の私は調べものが得意な生徒として有名だった。夏休みの自由研究や、国語や社会の研究課題。それらを私は何十時間もの図書館通いで完璧に調べ上げ、綿密な計算の元できちんと規定枚数内にレポートにまとめた。私の作成したレポートは高い評価を得たし、何度かコンクールで賞を取った事もある。しかし、私は別に真面目な意欲でそれらを作成していたわけではない。

私は単に資料をまとめるのが好きなだけだったように思う。膨大な情報に囲まれ、それらを機械的に処理していると、自分が不完全な生物ではなく、一つの機械になったような錯覚を覚える。それは自分が人間だということを忘れられる瞬間だった。

しかし、心が機械化していても身体はそうはいかない。

私は一時的に布団に包まることにした。なかなか暖まらない布団の中で、手足を縮めながら天井の白熱灯を見つめる。

白色の淡い光を放つ、剥き出しの丸い白熱灯。ベッドに横たわり、それを見上げながら考え事をするのが、当時の私の習慣だった。

「生物は外界からの刺激によって、決められた行動が……誘導されます」

私は先程まで見ていた資料の内容を思い返した。それらのほとんどは小学生の学習レベルでは調べる必要のないことだったが、私は他の誰よりも詳しく調べることにこだわっていた。

「夜行性の昆虫などは光に向かって飛ぶ習性があります。これを『向光性』と呼びます」

白熱灯に群がる蛾の姿を想像しながら、私は暗唱し続けた。

「また、水の流れに逆行する習性のものや、地面の下に潜ろうとす

る習性のものなどがあり……」

その時、私は奇妙な感覚にとらわれた。

どう言えがいいのだろうか？ 下半身がむず痒くなる感じ……何だか熱っぽい、しかし、何かが苦しいとも言えない感覚。

「どうしたんだろう？ ……風邪かな？」

私は無口な子だと思われていたが、自分一人だとよく喋った。思うに、心の中で議論する癖はこの頃から始まったようだ。私はことがあることに自分一人で話し合っていた。それは声には出さないことが多かったが、この時は自然と声が出た。

それは自分でも驚くほど子供っぽい声だった。

「変だよな。頭とかは寒いのに……ううん、やっぱり変だ。ボンヤリしてる」

私は自然と右手を下半身に移動させた。指は腹部を通り過ぎ、更に下へと向かう。

そして、私の目は淡く輝く白熱灯に向けられていた。

「……あ、白熱灯のところに小さな蜘蛛がいる……」

瞬間、頭の中で強く白い光が爆発した。

電流が駆け抜けるような感覚に身を擦じらせ、声にならない吐息が洩れる。

しばらくの間、その感覚に身を委ねていた私は、不意に身を起こして呟いた。

「……何、今の……？」

やはり私は早熟だったのだろう。あの中途半端な『性教育』とかいうものが始まる頃には、私は既に誰に勧められるまでもなく自分に合った生理用品を使っていたし、自分の身体がどのような状態にあるのかも把握していた。

そして、他の者がようやく性的な事柄に興味を持ち始める頃、私

は既にそれなりの知識と経験を持っていた。どうすれば自分の体から快樂が引き出せるのかも。

「ねえ、アヤナは『濡れる』ってことがわかる？」

中学二年生の頃、従姉妹のエリカが訊ねてきた。

「『感じる』ってこととか」

彼女の目は意地悪く光り、こちらの反応を覗っている。悪戯を仕掛ける時に愛想が良くなるのが彼女の癖だ。

「何が？……何が濡れるの？」

私は表情を変えることなく訊き返した。特に怒ったようでもなく、本当にわからないという顔をするのがポイントだ。

「アヤナってえ。本当に何も知らないんだね」

やたらと語尾を伸ばすエリカ。顔には満面の笑みが浮かび、鼻孔が膨らむ……これは彼女が勝利感に酔いしれている時の顔だ。そして次に右のおさげをいじりながら、上目使いでこちらを見る。

「何もって……何を？」

「アレよお」

彼女は右のおさげをいじりながら笑った。そして上機嫌に私の肩を叩くと、

「いいのよ、アヤナ。アヤナはこれから純真でいてよ」

「……痛いよ」

「ゴメン、ゴメン。それじゃあね」

薄笑いを浮かべながら小屋を出て行った。

彼女には悪いのだが、私は彼女が父親とお風呂に入っている頃から『感じる』ことについては知っていた。小学生の頃、彼女が私をいじめたグループの一員だったことも……彼女が私の生い立ちや生活についての情報をクラス中に触れ回ったこともだ。彼女自身は、もう忘れたかもしれないが。

中学、高校と同じ学校に進んだ私達の関係は、小学校を卒業してからは決して悪いものではなかった。昔いじめたことがある人間に向かつてニツコリと笑いながら「これから仲良くしようね」など

と言う神経は理解できなかったが。

もともと、その後この世の中には彼女のような人間が大勢いると知り、私は理解できないまでも納得することにした。彼女はそういう人間なのだから、と。

私達の関係は単純だった。彼女が喋り、私が聞く。私は彼女を通じて同年代の女子がどのような事を考えているのかを知った。

しかし、それらはあまり興味深いことではなかった。テレビドラマのこと、好きなアイドルのこと、新しい服のこと、上級生の恰好いい人のこと……などなど。彼女らの会話はそれらの話題の組合せによって無限に生み出され続いていく。だが、内容的にはいつも同じだ。

「アヤナって無口だよな」

ある時、クラスメイトが言った。

「何か喋りたい事ないの？」

残念ながら、私は彼女達のように話すことはできなかった。私は会話とは意思と意見の交換であると考えていた。しかし私が話題に対する意見を整えている間に、彼女達は私の事を忘れて別の話題へと移ってしまうのだ。それも突発的に、何の脈絡もなく。

ここで観察ノートに書き留めておいた同級生の台詞を一つ紹介する。

「昨日ね、駅前のCDショップに行ったの。ほら、いつもインディーズのバンドのビデオが流れてるとこ！……あ、知ってる？ うん、私もよくそこに行くんだ。でね？ 私が店に入ったら知ってるバンドのビデオがかかってたの！ ほら、あのヴォーカルの人がカッコイイバンド！ でね、でね、それもビデオクリップじゃなくてライブの映像だったのね？ 私、それ見たことなかったからすごいビックリしたの！ みんなのメイクもいつもと違ってるのよ！ それがまたカッコよくてさあ！ 衣装も綺麗だし！ でね、ヴォーカルの人もクリップとは違って激しく歌ってるの！ 上半身裸

で飛び跳ねたりするのよ！（ここで周囲の感嘆の声が入る）それでね、私、夢中になって見てて気がついたら手の中に何かたれてるのね。何かな〜と思ったたら、お店に入る前に買ったタイヤキを握り潰してたのよ〜（以下略）」

彼女達がインディーズのヴィジュアルバンドに夢中になっていた中学三年生の夏、私は一人の男と知り合った。

後の人生を大きく揺るがすことになる、あの男と。

その日、私は学校で行われた夏休みの補習から帰るところだった。叔父の家は中心街から離れた農地にあった。最寄りのバス停までは未舗装の砂利道で、途中農業用水路を兼ねた幾つもの小川が道を分断している。叔父の家は、その中でも最も大きな小川にかけられたコンクリートの橋を越えた所にあった。私はバスを降り、いつものように砂利道を歩いていった。

暑い日だった。辺りの雑木林からは嵐のような蝉の音が響き、陽光は空ばかりでなく土や川面にも反射して顔を照らしつける。額の汗をぬぐい、うつむき加減に歩きながら息を切らせ……やがて見覚えのあるコンクリートの橋に辿り着いた私は、幽かな安堵と共に顔を上げた。

……と。

私は一人の少年が欄干にもたれて本を読んでいることに気がついた。

同年くらい少年だ。大きな黒地の傘を欄干に縛りつけて日陰を作り、本を読んでいる。そんなことをしても熱いだろうに、と私は思った。事実、半袖の白いシャツから覗く少年の細腕は傘に納まりきらず影からはみ出し、首筋はじつとりと汗ばんでいる。奇妙な行動をとる男だ。

私はそれ以上気に留めることもなく、家への道を急いだ。

その時。

「ねえ、君が花村綾菜さん？」

不意に少年が私に声をかけてきた。

私は振り返った。どうして私の名前を知っている？ 過去に会った事があつただろうか？ 素早く記憶を検索したが、該当する項目は見当たらない。

すると少年は傘の下から顔を出し、意外そうに言った。

「あれ、当たり？ 当てずっぽうで言っただけだったんだけど」  
立ち上がり、汚れた背中を払う。

「僕は新塚健児。よろしく」  
それが一人目の『ケンジ』との出会いだった。

「どうして私の名前を知ってるの？」

私は自分でもよくわからない苛立ちを抱えながら訊ねた。

「名前？ それなら……ほら、ここに書いてある」

彼は手にした文庫本の表紙の裏をめくってみせた。しかし、私は表紙を見ただけで十分だった。

「それ……私の本よ」

今朝、学校に行く前に読んでいた本だ。それがどうして。

「うん、そうらしいね」

睨みつける私の視線を気にもとめず、彼は平然と答える。

「フィリップ・D・ディックの『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』……凄いの読んでるね」

「どうして貴方が持っているの？」

健児は髪を掻き上げると暑そうに頭を掻いた。

「今日、君の家に親父と一緒に来たんだ。親父は君の叔父さんとまだ話をしてる。それで暇になってさ、何かないかなって思ってたんだけど……あの家は文化レベルが低いね、ろくな本がありやしない。それで探してるうちに君の小屋に辿り着いたんだ」

「中に入ったの？」

「真理への門は万民に開かれるべきだ。それに君の小屋、鍵が掛かってなかったよ？」

「……だからって！」

私は健児を睨みつけた。別に見られてまずいものがあるわけではないが、自分の内面を覗き見られたような嫌な気分だ。

「勝手に中に入ったの？ しかも人の物まで勝手に取って……！」

「ほんの数秒だよ。とても長い気にはなれなかった。君の部



屋は暑すぎる。あれは人間の住むところじゃない」

健児が本当に嫌そうな顔をする。

「……いいのよ。私、人間じゃないから」

呟き、私は本を返すように言った。ついムキになってしまったが、どうにか落ち着きを取り戻すことができた。

「人間じゃない、か……面白いことを言うね」

健児はしげしげと私の顔を眺めると、やがて笑い出した。

「何？ ……何が可笑しいの？」

「いや、面白いこと言うなあって思ったから。ごめん、本は返すよ」  
彼が本を差し出す。

「……うん」

私は本を受け取った。文庫本の表紙は少し熱っぽかった。

「ねえ、後で別の本を貸してくれないかな？」

「別に……いいけど」

私は曖昧に返事をした。できればこれ以上関わりたくはないのだが、初対面でデータ不足の相手に対しては、過剰な干渉を避ける為に当たり障りのないことを口にする癖が身についてしまっている。しかしそれとは別に、何故か彼のことを完全に拒絶する気は起きなかった。彼は欄干に取りつけた傘を苦労して外していた。

「それから、何処か涼しいところを知らないかな？ ここは暑い」

健児は外した傘をくるりと回し、太陽を見て呟いた。

「これはいいアイデアだと思ったんだけどな」

「……そんなことしても無駄よ」

「そうみたいだね」

健児は苦笑した。

強い夏の陽射しの中、黒い傘を広げた彼の姿は奇妙だった。

数分後、私達は叔父の家を通り越し、下流の一級河川へと続く砂利道を歩いていった。

健児は私より年上の高校一年生だった。東京から来たらしい。

私と彼の手の中にはそれぞれ文庫本がある。鞆の中に幾つか入れていたものの中から彼に貸したのは、古いフランスの小説だった。

「SFは好きなの？」

「別に……」

「そうだろうね」

彼は髪を掻き上げて後頭部を掻いた。

「裏表紙に『100円セール』ってシールが貼ってあったから。名前を書く前に値札とかは剥がした方がいい」

「そうかも」

「……あくまでも個人的意見だけど」

彼は一人で頷くと、

「その本は一度読んだことがあるんだ」

少し口調を明るくした。

「だから懐かしくてね、つい手に取ったんだ。……まあ、そんなわけだ」

「気にしてない」

「……それはどうも」

彼は頭を掻きながら黙ってしまった。私の無感情な対応にどうしていいかわからなくなったらしい。

しかし、私も同年代の男性と一対一で話するのは初めてのことだった。何を話せばいいのか見当もつかないし、いつものように観察するには距離が近すぎる。

「その本の中にさ……妙な宗教のことが出てくるだろう？」

どうにかして彼と別れて小屋に帰れないだろうかと思っていた私

は、不意に話しかけられたので驚いて振り向いた。

「ほら、一人のおじいさんが何も無い丘の道を歩いて行く」

「……ああ、あれね」

本の内容を思い出しながら相槌を打つ。

「それを登場人物達はモニタを通じて同体験するわけだけど……」

「それがどうかしたの？」

訊ねると、彼は川へと続く砂利道を指差した。

「ここはあの道みたいだね。そうは思わない？」

彼の指差した先には何の変哲もない砂利道が続いていた。道は緩やかな登り坂で、川沿いの車道へと続いている。

「……何処が？」

「ほら、太陽が丁度道の向こうに輝いているからさ、道全体が光っているように見えるじゃないか。この道の向こうに何かの真理があるかもしれないよ。」

「車道と川があるだけよ」

「味気ないこと言うなあ」

彼は再び苦笑した。

数分後、私達は坂道を越えて車道に出た。そこには真理などなく、ただ、いつものように川が流れていた。車道脇にはガードレールの代わりに並木が植えられ、あまり手入れされていない幅広の土手へと続いている。私が車道を越えて土手に降りると、健児も後をついてきた。

バス停から少し離れた並木の近くに雑木の茂みがあり、内側にちよつとした空間がある。川岸の遊歩道は側の鉄橋によって打ち切れ、車道からも見えないこの場所を、私は氣に入っていた。

「うん。確かにここは涼しくていいね」

健児は草の上に座り、頭上の木を見上げた。植えられた広葉樹は厚い葉を何層にも茂らせ、その隙間から木漏れ日が射し込んでいる。周囲を取り巻く雑木の隙間からは太陽の光を反射する川の流れが見えた。

小学生の頃に見つけて以来、天気の良い日にはサウナ状態になる小屋を離れて、私はよくこの場所に来ていた。  
勿論、いつも一人で。

「案内したから私は帰るわ」

私は草の上に寝転んだ健児に告げた。

「あんな暑い所にかい？ もう少しここにいなよ」

「……帰る」

「ねえ」

「さようなら」

踵を返し、雑木の外に出ようとした私の足を健児がつかんで引き止める。

「待って……頼むからもう少しここにいてくれないか？」

「離して！」

私は彼の手を蹴り飛ばすように振り解いた。

苛立っていた。初対面の男をここに入れるべきではなかったと、自分の判断の甘さに苛立っていた。健児は右手を摩りながら私を見つめていたが、不意に唇の端に小さな笑みを浮かべて謝った。

「……すまない。僕が悪かった。謝るよ」

途端、彼の口元は自嘲的に歪んだ。

今にも泣き出しそうに瞳が揺れる。

「最近、何か不安定でさ……自分でも時々抑えられなくなるんだ。

……こんなこと、初対面の君に言うことじゃないね」

彼はもう一度小さく笑った。やはり楽しそうには見えない。

「それってどういう気持ちなの？」

私は制服のスカートの裾を足で挟んで彼の隣に座った。

「……いてくれるの？」

「貴方のことに興味が湧いたわ」

そう、私は答えた。

今でも何故あの時そのまま帰らなかったのかわからない。興味が湧いたというのは本当だ。彼は私が今までに見た人間の中のどのタイプにも当てはまらなかった。大胆なようでもあり、繊細なようでもある。幾つもの要素が絡まり、それらがまた新たな要素を作っていく……そんな感じだった。

しかし、私は人間の観察者ではあるが、人間と関わるのを恐れていたはずだ。私が人間観察の中で積極性を示したのはこれが初めてのことだった。『第六感』とでも言うものだろうか？ 私は彼を通じて人間を理解する為に必要な『何か』が得られることを感じ取っていたのかもしれない。

それは真理というほどのものではなかっただろうが……今にして思えば、私にとってなくてはならないものだった。

「興味って？ ……どういう風に？」

「私は人間の観察をしているの。貴方は今まで見たことのない、奇妙なタイプの人間だから観察しようと思ったの。それだけよ」

「それだけ？」

「ええ」

「……なるほど」

健児は唇に指を当てて目を閉じると、笑みを浮かべた。

「なるほど！」

彼はもう一度同じ事を呟いた。しかしその声には勢いとリズムがあった。そして再び開いた目には、感情の煌きが浮かんでいた。

「僕は栄えある君の実験対象か。それは光栄だね！」

健児は笑いながら右手を胸に当てた。

「さあ、何から始める？ 胸を開いて解剖かい？ 脳を取り出すか？ 何でも構わないよ？」

「私の観察は見つめるだけよ」

「それは……ちょっと悲しいね」

「そう?」

「そうなんだよ。お互いをよく理解しなければいけないね……見つめるだけじゃなくて」

「……そう?」

「……そうなんだよ」

彼は小さく笑った。

そして、彼の瞳は再び泣き出しそうになった。

「そうなんだよ……厄介なことだね」

彼は小さく笑い、私は笑わなかった。

彼の腕が私の肩をつかみ、唇と唇が触れる。

私は抵抗しなかった。

初めて触れた異性の体は、私に様々なことを教えてくれた。他人の唇の感触や体温、男という存在が自分とは違った匂いをしていること。そしてそれが夏の草の匂いと似ているようで、少し違うこと……そんなことだ。

健児は唇を重ねたまま、私をそつと草の上に横たえ、抱き締めた。やがてゆっくりと唇を離し、私の胸に顔を埋め、静かに泣き始める。私はその間、青い空を見つめていた。

昨夜は低気圧が通過した為、空は綺麗に澄み渡っていた。連なる木々の上に広がるコバルトの空色は上空に向かうにつれて濃度と鮮やかさを増し、深く透き通った紺色へと変わる。上空からは薄い力ーテンのような雲がたなびき、その下に大きな積乱雲が成長していく。

……何処までも……夏の空だった。

「じめん」

彼は起き上がって呟いた。

「別にいい」

いい加減に私は答えた。

「……ありがとう」

「何が、ありがとうなの？」

「何だろうね。自分でもわからないよ」

呟き、彼は私の額にキスをした。彼の目は涙で濡れていた。

しかし表情としては泣いているようには見えなかった。

不思議な男だ。私はそう思った。

「初めて会った君にこんなこととしてすまないと思う」

私が服の乱れを直していると、健児は低く呟いた。

「これからはこんな乱暴なこととはしない……本当だ」

健児は真剣な瞳で私を見つめた。

「僕がやったことは良くないことだとわかってる。初対面の人に……

……しかも君みたいな綺麗な女の子に……こんなことをするなんて、とても許されることじゃないって思ってる。責任を取るよ。それから、信じてくれないかもしれないけど僕は……」

「構わないわ」

私は健児の言葉を遮った。

「私は何も気にしてない」

「……そう……」

健児は少し安心した様子で呟き、

「でも、それはそれで嫌だなあ……」

「はつきりしないのね」

「……そんなものだよ」

困ったように言った。男というものはこんなものなのだろうか？と、私はあることに気がついた。

「さつき、これからはって言ったけど……これから貴方ここにいるの？」

「多分夏の間はここにいると思うよ。親父次第だけどね」

「引っ越してくるの？」

「どうかな」

彼はゴロリと草の上に寝転んだ。それからズボンのポケットからクシャクシャになったタバコの箱と小さなマッチ箱を取り出した。

「タバコ吸うの？」

「これでも苦勞の多い人生を送つてまして。煙が嫌なら吸わないよ」

「構わないわ。観察対象に干渉はしないことにしているから」

「構わない……か、君はそればかりだ。本心が見えない」

「人間じゃないから『本心』なんてないわ」

「……なるほどね」

健児は器用に唇でタバコを取り出すと、マッチを擦つて火をつけた。二、三回煙を吐き出し、その様子をじつと観察していた私の顔を見つめ返す。

「君はとても不思議な目をしている。まるで本当に人間じゃないみたいだ」

「どういう意味？」

「人間を『観察』するって、普通だったら冗談みたいだけど……君が言うത്と真実味がある。君の目は本当に心の中まで見通していいそうだ」

健児は私の瞳を覗き込み、囁いた。

「君は何者だい？ 宇宙人がレプリカントかい？ それともその他の何かか……」

「……………」

私は戸惑っていた。ここまで私の本質に迫った者は初めてだった。一番触れられたくない所に鋭い刃物が突きつけられた気さえた。しかし健児は急に悪戯っぽく笑うと、勢いよく立ち上がった。

「別に構わないよ。君が誰でもね」

健児は髪を掻き上げて後頭部を掻いた。

「そろそろ戻ろう。親父の話も終わってるだろ……『構わない』って悪くない言葉だね。そう思うよ」

それから足元に置いてあった二冊の文庫本に気づき、拾い上げて



苦笑した。

「結局、本は読めなかったね」

私の視線には人間を不快にさせるものがあるらしい。私はただ眺めているだけなのに、大抵の相手は嫌な顔をして「何を見つめているのか」と訊ねてきたものだった。

一度こんなことがあった。

中学生の頃のことだ。私と数人のクラスメイトが、教師から用事を頼まれた。それは次の授業で配るプリントの整理で、作業自体は簡単だったが時間はかかった。すっかり夕方になってしまい、最後に私と二人の女子だけが教室に残った。

その中の一人は志野さんという明るいクラスの人気者だった。背はかなり低く、癖のある髪を短く切り、従姉妹のエリカと同様に話すときに語尾を伸ばす癖があった。もう一人の女子がトイレに行き、教室内に私達二人だけになったときのこと。

「そんなに人のこと見るのが楽しい？」

不意に志野さんが訊ねた。

「……何？」

「人のことをジロジロ見て楽しいかって聞いているのよ」

彼女は黙々と作業を続け、顔をこちらに向けようとはしなかった。短く丸い指がせわしなくプリントをめくり続けている。

「私、知ってるのよ？ 貴女がいつも本を読むふりをしながら皆を見てること」

「深い意味はないわ」

以前はどう説明していいのかわからず「別に……」と言葉を濁していた私だが、この頃になると本当のことを説明する必要もないと考え、こう答えることにしていた。

「ただの癖なの」

「あの目はそんなものじゃない。私達を見下してる目よ」

志野さんはチラリと私を上目使いで見た。

「あの目で見られるとゾツとするわ。私が気づいてないとも思っただの？」

「貴女が神経質な人間だってことは知ってるわ」

志野さんが一瞬硬直し、放たれる敵意がにわかに濃くなる。

「……へえ、貴女って超能力者？」

「私は見つめているだけよ」

「それがムカツクのよ。貴女私のことを馬鹿にしてるんでしょ？」

「馬鹿になんかしてない。見てるだけ」

口調こそ落ち着いていたが、私は内心酷く動揺していた。どうすれば納得してくれるか、これ以上の干渉を避けられるかと考え、やがて私の観察をありのまま話せば良いかもしれないという結論に行き着いた。

「例えば、貴女は今日の昼休みに机の上に乗って踊ってた」

「貴女はそれをずっと見てた」

「貴女は周りの人に囁し立てられてサルみたいな恰好で踊った」

「……そうよ」

「それから机の上で脚を広げて寝そべって……」

「みんながやれって言ったのよ」

志野さんの、皆から「愛敬がある」と言われている目が私を鋭く睨みつける。

「そして貴女は先生が来たので机から降りて座った」

「……そうね」

「椅子に座ってから貴女は下唇を噛んだ」

「……」

「貴女は悔しい時に下唇を噛む癖が」

「あんたに何がわかるって言うのよ！」

志野さんはプリントの束を机に叩きつけた。

「あんたに私の気持ちかわかってたまるものか！　ちょっと美人だからっていい気になりやがって！」

机を蹴り倒し、凄まじい形相で私を睨みつける。そしてプリント

を床にぶちまけると、壊れそうな勢いで扉を閉めて教室の外に出て行った。

「……何？ どうしたの？」

丁度トイレから帰ってきたもう一人が、もう片方の扉から恐る恐る顔を出す。

「さあ……」

私は適当に答え、散らばったプリントを拾い始めた。

その後、志野さんは学校を休みがちになった。

私はきつと、彼女の触れられたくないところに触れてしまったのだろう。

そしてそれは私の視線が原因で起きた。

だから私は、以後人間を観察する時は細心の注意を払うようにしてきた。

しかし、再び私の視線に気づくものが現れた。しかも私の内側を見ただけではなく、侵入してきた。これは生涯始まって以来の危機だと私は考えた。

だが何よりも不可解で深刻な点は、私自身が自分の防壁の崩壊をボンヤリと眺めていること……侵入を許してしまったことをあまり深刻に受け止めていないことだ。

これは本当に深刻な事態かもしれない。

/

「どうかしたの？ 体の具合が悪い？」  
健児が訊ねた。

「……何でもない」

私は言葉を濁してうつむいた。

「赤くなってる」

「嘘？」

「……嘘だよ」

健児は笑って答えると私の手をつかんだ。

「ねえ、アヤナ。僕達は坂の頂上を目指して共に上り、そして今再び下っているわけだ」

「真実なんてなかったわ」

「……それは悲しいな」

「事実よ」

私は健児がつかんだ自分の手を眺めた。何故か振り払う気にならない。

「でも、僕は得るものがあつたよ。できれば君にとってもそうだといい」

午後の陽射しが照りつける中、私達は共に砂利道を歩いていった。

「なんだ、健児……そこにいたのか。その人は？」

ようやく家の前まで戻つてくると、玄関に続く階段の手前に一人の男が立っていた。

年は四十近いだろうか、身なりは上品だが何処か疲れているような印象を受ける。彼が健児の父親だということはすぐにわかった。

顔立ちは勿論、仕種や言葉遣いもよく似ている。何より、彼らの周囲に漂う空気がよく似ていた。

「花村綾菜さん……この家に住んでる」

「ああ、そうか」

健児の父親は静かに頷いた。

「話は？」

「済んだ」

親子は多くの言葉を交わさなかった。健児も話の結果を聞かなかつたし、父親もそれ以上は何も言わなかった。ただ、その話の内容がどのようなものであつたにせよ、うまくいったようには見えなかった。

「帰るの？」

「いや、夕食に呼ばれた。お前は どうする？」

「一緒にいるよ」

「そうか」

父親が踵を返し、階段を上っていく。

健児はじつと父親の背中を見つめていた。その透き通った瞳もまた、父親から受け継いだものなのだろう。

「行こうか、アヤナ」

父親の姿が見えなくなった頃、健児もまた階段を上り始めた。彼の後ろ姿は、やはり父親のそれとよく似ていた。

新村親子との会食の最中、普段無口な叔父はやたらと騒いでいた。まるで、何かを必死に隠そうとしているかのように。

一方、健児の父親は時折相槌を打つ程度で、驚いたことに叔母までもが何も口出しせずに静かに話を聞いていた。

「何？ あの暗い奴！ 話しかけてもろくに返事もしやしない！」

私の隣ではエリカが健児の無愛想に腹を立てていた。

家の中に足を踏み入れたときから、健児は無口で静かだった。初対面の私には気軽に声をかけてきたというのに。不思議な男だ。ふと目が合うと、健児は小さく笑ってウインクをした。

……馬鹿な男。

「そろそろ帰らせていただきます」

食事の終、健児の父親が言った。

「この町にはいつまでいらっしゃるんです？」

叔母が訊ねた。

「夏いっぱいはいようと思っています。色々と廻らねばならない所がありますから」

「そうですか……」

叔母は心配そうに叔父の顔を見たが、叔父は何も言わなかった。

「行こうか。健児」

「ああ」

健児はぶっきらぼうに応えて立ち上がった。叔母が玄関まで見送りに行き、私も手洗いに行くふりをしてついていった。

「本当にすみませんねえ」

玄関で叔母が謝る声が聞こえた。

「いいえ、気にしてませんよ。……あいつの気持ちもわかります」

「……本当に」

叔母がその後何を言おうとしたのかはわからなかった。

「それでは失礼します。本当に美味しい食事でした」

玄関の戸が開く音がした。

私が顔を覗かせると、遠ざかっていく健児の後ろ姿が見えた。

その夜。

私は小屋で『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』を読み返していた。しばらく読み進めると、健児の言っていた『妙な宗教』の部分が出てきた。

舞台である未来の世界にはマーサー教という宗教が存在する。教祖、と言うよりは信仰のすべての象徴であるウィルバー・マーサーという老人は、無限とも思える遠大な坂道を頂上目指して歩き続けている。

ただ、それだけだ。

そして信者（文字通り彼を信じる者）は『共感ボックス』という機器を用いて彼と同化することができる。

マーサーに同化した複数の信者はマーサーと共に坂を登り頂上を目指し、その過程の全てを共感することになる。目的を持って進む高揚感、使命感、妨害者から受ける恐怖と苦痛……そして頂上に到達した瞬間の達成感。それらの感覚を信者は共有し、喜びを分かち合うことになる。

もっとも、頂上に至った途端にマーサーは坂の下に戻され、また頂上を目指すことになるのだが。

更に厳密に言えば、マーサーの坂は健児がイメージしたような燦々と光の降り注ぐ場所ではなく、薄暗い平原だ。

「私達は共に坂を上り、共に下った……」

本を閉じ、私は幽かに笑った。

そして自分が笑っていることに気づき、己の行為に啞然とした。健児にもう一度逢いたい。生まれて初めて抱いた『誰かと関わりたい』という感情が、他の何よりも私を驚かせる。

一体自分はどうなってしまったのだろうか。

答えの出ない自問を繰り返しながら、その日は眠った。



一夜が明けて、私は自分の中に健児に会いたいという感情が残っていることを確認した。

更に驚いたことに、その感情は昨夜よりもずっと強くなっていた。

午前中の補習の間、私は自分の取るべき行動について検討し続けた。

幾つかの案を提示した後、ある結論に達する。

何故彼が私に影響を与えるのかを突き止め、分析すべきだ、と。それは私自身の未発見の要素を確かめる為でもあった。

補習の後、私は小屋に戻らず河原を訪れていた。

冷静に考えれば、彼が再びこの場所に姿を現すと決まっているわけでもない。私は彼が何処にいるのか知らない。本当にこの町に滞在しているのかもわからない。私は馬鹿げたことをしている。雑木の茂みの中に入りながら、私は考えた。

本当に私は馬鹿げたことを……。

「アヤナ」

不意に誰かが後ろから抱き締めた。

少しかさついた唇が首筋に触れる……この感触には覚えがある。

「やめて！ …… やめてよ！」

私は健児の手を振り解いた。

「勝手に触らないで！」

「それは……悪かった」

健児は小型のペットボトルを持った手で首筋を掻いた。

「ずっと君を待ってたんだ。それで嬉しくってね」

それから彼は直接ペットボトルに口をつけ、一口飲んだ。

「……どうして、ここで待ってたの？」

「君にまた会いたかった」

彼は即座に答えた。

「もう一度君と話がしたかった。もう一度君の声が聞きたかったんだ」

「不愉快だわ」

「その怒ったような声が聞きたかったんだ」

「……………」

健児は小さく微笑んだ。

「君も同じ気持ちじゃないの？」

「ここは私の場所よ。私がいつ来ようと私の勝手よ。私は貴方にく  
こから出ていつて欲しいの」

「僕はずっとここにいたい。君と一緒に」

「冗談じゃないわ!」

私は叫んだ。

「貴方なんか顔も見たくない。昨日は昨日よ!」

「アヤナ」

健児は表情を曇らせ、私の手をつかもうとした。

「やめてよ!」

私は健児の手を思いきり叩いた。大きな音がした。

「……………昨日は『構わない』で、今日は『やめて』か……………順序が逆だ  
ね」

健児は手を摩りながら呟いた。

「君は本当に変わってる」

……………自分でもそう思う。

健児は草の上に寝転ぶと、ポケットからタバコの箱を取り出した。  
「座りなよ。別に僕だって君の体が目当てで来たわけじゃない。…

…多分ね」

健児は昨日と同じように唇でタバコを抜き取った。

私も座った。

ただ、彼からどれくらい距離を取ればいいのかわからなかった。

「昨日は嬉しかった」

一つ大きく煙を吐き出して、健児は呟いた。

「何が？」

「君が僕を受け入れてくれたことがさ」

「受け入れたわけじゃないわ」

「そう？ …… それでも僕は嬉しかった。嬉しくって涙が出そうになった。それくらい嬉しかったんだ」

「貴方……泣いてたわよ？」

「……本当？」

それは困った、といった顔で彼は少し考え込んだ。

「昨日……どうして『ありがとう』って言ったの？」

私は昨日からずっと疑問に思っていたことを訊ねてみた。

「キスできたから？ 女の子とキスしたことがそんなに嬉しかったの？」

健児は流石にこの質問には驚いたようだったが、しばらく黙った後に呟いた。

「それはまた直接的な質問だね」

「私は貴方を観察しているの」

「そうだったね」

健児は再び口を閉ざした。風のない茂みの中がタバコの匂いで満たされていく。

「時々、自分が駄目な人間だと思うことがある」

不意に、健児が口を開いた。

「自分が酷く薄っぺらくなった気分だ。自分のやっていることが全く意味のないことに思えてきて……何をやっても無駄なように思えてくるんだ。もっとも、最初からたいしたことをしているわけじゃないんだけどね……そしてすべてにやる気がなくなってくる。ほんの些細なことでもやり始めるのが面倒になる。それでただボンヤリと生きる。何もしない……でも酷く疲れる。本当に疲れる。多分、何もしないって事に疲れてるんだね」

健児は自嘲気味に笑った。

「疲れて、また何もできなくなる……悪循環だ」

私は何も言わなかった。

「何かに自分が追い詰められてる気がする。でも、それが何なのか

わからない。ただ、追い詰められてる気がする。逃げ場もない。何処に逃げ出せばいいのかわからない」

「それって貴方のお父さんの問題が原因？」

「何だ、気づいてたのか……確かに、僕の家はやばいことになっている。詳しくは言わないけどね。でも、これはそれ以前からの問題なんだ。親父のことは怨んでない。自分の問題なんだ」

「その感情はうまく理解できないわ。理論的じゃない」

「そうかもしれない」

健児は酷く虚ろな口調で続けた。

「時々、自分の中に大きな穴が開いているような気がするんだ。自分には何かが足りない気がするんだ。そしてその穴は酷く寒い。こんな夏の日でもね」

健児は体を丸めた。

「……まるで本当に凍えているかのように。」

「こんな気分がずっと続いてた。自分に足りないものをずっと探し続けた……そして君に出会ったんだよ、アヤナ」

「私達はこれ以上関係を続けるべきじゃないわ」

私は反射的に自分の心に防壁を巡らした。

これは私の本意じゃない。私は健児に会いたかったはずなのに。

「君に会った時、凄くドキドキした。君こそ僕が探していた人だと思っただ。そして君が僕を受け入れてくれて本当に嬉しかった。」

「……本当に嬉しかったんだよ」

静かな目で健児は言った。

「僕には君が必要なんだ。君とは昨日会ったばかりだ、でも僕は……」

「……やめて！」

次の瞬間、私は立ち上がり茂みの外へと駆け出していた。

何かはわからない。でも、何かが変わってしまった。

私は家に向かって坂道を駆け下りていた。後ろからは健児が追いかけてくる。

靴が乾いた小石を蹴り飛ばし、巻き上がった砂煙が喉をひりつかせる。

私は走っている。

……でも、どうして？

「待ってくれ、アヤナ！」

家に行く階段を駆け上がりとした途端、追いついてきた健児が私の腕をつかんだ。二人の靴が勢いよく白い砂煙を巻き上げる。

「離して！ 離してよ！」

「アヤナ！」

健児が叫んだ。その声は腕に食い込んだ指のように私の心に食らいついた。

「……どうしてだよ」

呟き、健児は私の身体を抱き寄せた。昨日と同じ汗の匂い。何故か酷く懐かしい気がする。こんなに細いのに、何処までも力強い彼の腕が私を包み込む。

一瞬、自分の身体が壊れそうな気がした。

そして、そうなってしまうばいいのと思った。

……しかし、次の瞬間、私は力の限り健児を拒絶していた。

「離して！」

私は健児の腕を振り解くと、一気に玄関に駆け込んだ。

「……どうしてだよ」

健児は大きく息をつきながら私を睨んでいた。

「どうしてだよ！」

「……わからない」

呟き、私は玄関の戸を閉じた。

今でも、どうして健児を拒絶したのかわからない。私は彼に抱かれるべきだったと思う。後に彼の身に降りかかることになる不幸を考えれば。

彼は私を求めていたし、私も彼を求めていた。しかし私は恐かった。彼と結ばれるのが恐かった。そして私は逃げた。私はどうして逃げた？ 幸せになれるはずの道から。何故逃げた？ 目の前に開かれた可能性から。

健児はそれから二週間、姿を見せなかった。

あれ以来、私はただ淡々と日々を過ごしていた。機械のように起きて勉強して、問題を解いていた。私と同じく受験生のエリカが叔母に遊んでないで勉強をしると叱られていたが、私は勉強に何の価値も見出せなかった。機械に与えられた仕事、それだけだ。

私は自分を機械のようにしておきたかった。

……そうじゃないと壊れてしまいそうな気がした。

健児が小屋を訊ねて来たのは、丁度、私が小屋で勉強している時だった。

「相変わらず、ここは人間の住む所じゃないね」

気がつくと、健児は小屋の中に立っていた。

あの寂しげな微笑みを浮かべて。

「鍵がかかっていないのも相変わらずだ……君が元気そうで何よりだよ」

「……どうして……来たの？」

「ちよつとまづいことが起きてね。親父の仕事関係だ」

健児はしばらく黙っていたが、やがて言った。

「アヤナ。僕と一緒に逃げてくれないか？」

「何処へ？」

「坂の上にさ」

「………」

「………」

「………」

「………」「冗談だよ」

一つ大きく溜息をつき、健児は呟いた。

「最後に君の顔を見ることができて嬉しかった。もう会うこともないだろうしね」



組まれていた健児の指が震え、両手がきつく握り合わされる。

「最後だから言うておくけどさ。初めてこの部屋に入った時、この部屋の持ち主はどんな人だろうって思ったよ。酷く素っ気無くて、置いてある物はバラバラで……自分以外のすべてを拒絶しているような感じだった」

「うん……わかってる」

「……でもね。僕はこの部屋が嫌いじゃない。嫌いじゃないんだ。人を寄せつけなくて冷たい感じがするけれど、この部屋は何故か僕を惹きつける。バラバラで滅茶苦茶で……でも、何かが引っかかる。何かが心の中に伝わってくるんだ。そして、それは僕の何かに響いたんだ。だから僕は思った。ここに住んでるのはどんな子なんだろうって……僕はその子に凄く会ってみたいくなったんだ」

健児は目を伏せると、うん、と呟いた。

「僕はこの部屋に入った時から、君に恋をしていたのかもしれないな」

「……だから私に声をかけたのね」

「そうだよ。だから君を待っていた……会ってみたら本当に可愛い子で吃驚したけどね」

健児は可笑しそうに笑った。

その表情は笑っているようには見えなかった。

「貴方はいつも泣いてばかりね」

「そうかい？ いつも笑ってるって言われるよ」

「でも泣いてるわ」

「そんなことはないよ」

健児は震える指で頬を引っ張り、唇を曲げた。

「ほらね」

「……うん」

私が頷き、彼も頷く。

「君のその瞳が好きだよ……アヤナ……」

そして彼は部屋から出て行った。

私はどれくらいぼんやりとしていたのだろうか？

数分か、数秒か。

気がつくと私は、手に握り締めたシャープペンシルを参考書に突き刺していた。

何度も打ちつけられて先端が折れ曲がり、芯の破片が飛び散る。

行かなければ。

……何処へ？

私は同じ動作を繰り返し続ける腕を止め、強張り、血の滲む指をこじ開けてシャープペンシルの残骸を捨てた。

そして小屋の外に歩き出していた。

あの坂道がこれほど長く感じられたことはなかった。

太陽の照りつける道は延々と続き、砂煙が巻き起こる。

落ち着くんだ、ここはいつも通る道。たいした距離じゃない。

しかし、私の足は思い通りに動こうとせず、何度も地面に転がった。

それでも私は坂道を登り続ける。

行かなければ。

坂の頂上には何も見えない。ただ、平行に伸びた線の上に青い空が広がっているだけだ。

坂の上には何があるんだっけ？ ……彼が話していたはずだ。もっとよく彼の話を聞くべきだった。

『君の順序は滅茶苦茶だ』

確かにその通り、私は普通の方法がわかっていない。  
もっと貴方の話を聞くべきだった。何かがわかったかもしれない。  
のに。

私は坂の頂上を目指し続けた。

そして、小石に足を取られて倒れた瞬間、坂の頂上に誰かが立っているのが見えた。

「……健児！」

私は最後の力を振りしぼって坂を駆け上がった。

しかし、そこには誰もいなかった。

ただ、車道と川のある景色が広がっているだけだった。

蜘蛛の夢を見た。

蜘蛛は私の体に這い上がり、首筋をまさぐる。周囲の気温が凄まじい勢いで下がり、壁が凍りつく。吐息も、喉も凍りつき、息ができなくなる。

天窓から射し込む光だけが、ますます透明に、強くなっていく。頭の中に響くノイズは一千万の狂人が歌う讚美歌へと形を変え、鼓膜をズタズタに切り裂いた。

私はベッドを離れて光の彼方へと向かう。肉体は引き裂かれ、その残骸の中から私の魂だけが鉤爪によって引き摺り出される。地上を離れ、遥かなる天空の高みへと昇ってゆく……それは全てが消えてなくなるほどの歓喜だ。

この汚れた世界から逃れ、光に満ちた世界へ……そこでは全てが許される。

だが次の瞬間、満ち満ちていた光は失われ、私は地の底へと堕ちていった。

目を覚ますと、本当に切り刻まれたかのような痛みが全身を襲った。

自分の手足が遠くにあるように思える。

手足には血が一滴も通わず、神経も切断されたようだ。

酷く……寒い。

「よお、起きたのか？」

隣に寝ていた男に声をかけられ、私は上半身を起こした。

「腹が減ったな。朝食を作ってやるよ」

まだ呆然としている私の隣で、男は筋肉質な上半身にきつめのTシャツを着て立ち上がった。無精ひげの生えた顎を擦りながらキッチンへと向かう。

「朝はパンか？ 目玉焼きはどれくらいの固さがいい？」

「……朝食？」

私はボンヤリとした頭で事態を把握しようとした。

とりあえず、こいつは誰だっけ？

「おいおい、忘れたのか？ 昨日言っただじゃないか。俺の作った朝食が食べたいって」

男が卵を二つ手に持ちながら振り返る。思い出した。この男は昨夜飲みに行った店で知り合ったのだ。何でも世界一の朝食が作れるらしい。

「いいか？ 一日の食事の中で朝食が一番大事なんだ」

昨夜、男は言った。

「朝食は一日の最初のエネルギー源だ。いい朝食さえ食べれば一日はつらつと仕事ができるし、楽しい気分で過ごすことができる。そして朝食はそのままエネルギーになるから夕食のように太ることもない。食べるなら朝食、夕食じゃない。そして、俺は世界一の朝食を作ることができる」

「世界一の朝食って？」

「食べればわかる」

男は自信に満ちた声で答えた。

朝食を美味しく食べるには夜の間にお腹をすかしておくのが一番だ。そして、その為には十分な運動が必要となる。私達は店を出ると、すぐに私の部屋で運動を始めた。

「お前、コーヒーか紅茶、どっちがいい？」

「コーヒー。ブラックで」

私はあくびを噛み締めた。

運動量は十分だが、睡眠時間は不十分かもしれない。

実際のところ世界一の朝食などどうでもいいのだ。そんなものは男と夜を過ごす口実に過ぎない。私の目的は昨夜の時点で達成しているし、男も期待した役割は十分に果たしてくれている。しかし、本当に台所の方からいい匂いが流れてきたので、私は男の料理に少

し興味を抱いた。

それにしても、本当に名前は何だったっけ？

「お前、大学生だろう？ 学校はいいのか？」

男は慎重にコーヒーマーカーをセットしながら訊ねた。

「院生よ。午後からのゼミに出るわ」

「そりゃよかった。時間がないから朝食を食べないのは一番いけないことだからな」

男が真剣な顔で頷く。

「この国の仕事はもう少し遅くに始まるべきだ。それから皆がもっと早起きできるようにでかい目覚まし時計を町内に置くことだな」

「興味深い意見だわ」

私はテーブルの上に並べられた料理の数々を眺めた。

自慢するだけのことはあり、男の料理の腕は確かだった。見事な狐色に焼き上げられたトーストに、寸分の狂いもなく丸い半熟の目玉焼き、ハムサラダ……そして香辛料の効いた肉料理。昨夜何をゴソゴソしているのかと思っていたら、下準備をしていたらしい。

「朝から肉料理？」

「胃腸つてのは起きて十分もすれば動くようになる。腹、空いてないのか？」

「空いてるわ。あれだけ運動したんだから」

私は微笑んで料理に箸をつけた。私は食べ物の味に無頓着だが、確かに男の料理は美味しかった。世界一かどうかはわからないが、少なくとも私の知る限りでは一番だ。

私の評価に、男は少し照れたように笑った。

「さつき酷くうなされてたが、大丈夫か？」

食事の後、男が訊ねた。

「大きな声を出すもんだから目が覚めた。目覚ましがりにはなかったがな」

「夢を見るのよ」

私は男の言葉を遮るように呟いた。

「小さい頃からね」

「尋常じゃねえうなされかただったぞ？ 何処が悪いんじゃねえのか？」

「……そうね、何処が悪いのかもね」

カップを傾け、揺れるコーヒーをぼんやりと見つめる。黒いコーヒーに浮かぶ白いミルクの渦を見つめていると、不意に夢の中の寒気が蘇ってきた。

「……寒いよ」

「夏風邪か？」

「そうじゃない。でも、寒い。時々こんな風に物凄く冷たくなる。まるで世界が凍りついたみたいに」

「今日の最高温度は三十度を越えるって言ってたぜ？」

「そうじゃないのよ」

私は自分の体を抱き締めた。

「何かが寒いよ」

「大丈夫か？」

ぶつきらぼうだが、心配そうな声。

「うん……大丈夫よ」

私は顔を上げ、微笑んだ。

「ねえ、食後の運動をしない？」

「病気の女を抱くような真似はしたくねえな」

「大丈夫だつてば」

私は立ち上がり、薄いパジャマを脱ぎ捨ててベッドに横たわった。「世界一の朝食なんでしょ？ だったら、消化するまでちゃんとつき合つてよ」

男はしばらく考え込むと立ち上がって私の隣に座った。

「どうも食べられてるのは俺のような気がする」

私は男の身を横たえ、ゆっくりと首筋に舌を這わした。

「……おまけに中毒になりそうだ」

男は私を抱き締めた。その逞しい腕力で、バラバラになりかけていた私の体が再び一つに結びつく。

燃え上がる情欲の炎が、凍りついた体を溶かしていく。

この温もりがなければ凍死してしまう。

男に抱かれながら、私は本気でそう思った。

かつきり十一時に男は部屋の外に出ていった。正確には私が追いついたのだが。

「つねえなあ」

男はドアに手をかけて止めた。

「約束は十一時までよ。昨日言ったでしょう？」

「だけどよお」

頭をぼりぼりと掻き、ふと何か思いついたように顔を明るくする。

「世界一の昼食と、世界一の夕食を食べてみたくないか？」

「遠慮する」

私は一気にドアを閉めた。ドアの外で男が苦笑したのが聞こえた。

「随分と冷たい女だ」

「その通りよ」

男は二回軽くドアを叩くと、あばよ、と言い残して立ち去った。

今日の男は聞き分けがよくて助かった。酷い時など丸一日ドアの前に居座られたことがある。

カーテンの隙間から男の姿が見えなくなるのを確認し、私は支度を済ませて部屋を出た。

澄み切った初夏の青空が広がっていた。暑くなると言っていたが、日陰はまだ涼しい。私は小型の鞆を肩にかけ、マンションの階段を降りた。

健児との別れから、九年の月日が流れていた。



中学を卒業した後、私は高校に進学した。大学への進学率が高いと評判の、理系の進学クラス。従姉妹のエリカも同じ高校だったが、彼女は一般のクラスだった。

居候の身でもあることだし、私は高校を出させてもらえれば十分だろうと考えていた。大学に進学するには多くの資金が必要となる。まずは卒業と共に就職して一人暮らしを始めることが、その後の選択肢を広げることになるだろうと。

しかし、事態は思わぬ方向に進むことになる。幸運と言うべきか、母方の親戚の者が私の進学を援助しようと言い出したのだ。元々母方の家には高学歴志望の傾向が強く、医者や教授といった肩書が家系の中に含まれることを望んでいた。しかし如何せんそれを実行できる者がおらず、私に白羽の矢が立ったというわけだ。

私の母もこの家の者にしては突然変異のようによくできた子で、親戚の者はかなりの期待をかけていたらしい。その英才教育ぶりや凄まじかったと、叔父が一度洩らしたことがある。

しかし母は一流私学高校を卒業後、父と共に姿を消した。

おそらく母は、周囲から寄せられる過度の期待に耐え切れなくなったのではないだろうか。私には母に関する記憶はないが、そんな風に考えることがある。その後も何人かが都会の大学に送り込まれたらしいが、大成した者は一人としていないようだ。

高校に進学した時、私は初めて母方の本家へと連れて行かれた。一家の恥晒しである母、その娘の私がこの家に呼ばれることは、それまで一度としてありはしなかった。

私も別に行きたくはなかったのだけれど。

母方の本家は叔父の家よりも更に大きな木造の屋敷で、一見すると古い寺のようだった。線香臭く薄暗い廊下を通され、襖を開け放

した広い部屋に出る。そこには何人かの老年の男と、大きな布団に寝かされた小さな老女の姿があった。皺は多いが透き通るように白く、赤みの差した肌の老女……祖母は起き上がらぬままに顔を向けると、黒真珠のような目で私を見た。

「お前がアヤナか。確かに娘によく似ている」

祖母が手を振り、他の者を下がらせる。広い部屋に二人だけになると、私は布団の傍に両膝をつき、丁寧に頭を下げた。

「花村綾菜です。お婆様」

「……ふん」

私の言葉に、祖母が軽く鼻を鳴らす。

「何かお気に障ることを申し上げましたでしょうか？」

少し気になり、祖母の様子を覗う。もしかすると『花村』の性を名乗ったのがまずかったのかもしれない、そう思った時。

互いの視線が交錯した。

これまで生きてきた中で、これ程までに冷たく貫くような目を見たことはなかった。祖母の視線が鋭い氷の刃となって、私の胸に突き刺さる。

私は幽かに身体を強張らせた。

「……ふん」

祖母はもう一度鼻を鳴らすと、視線を逸らして呟いた。

「お前、自分の母のことは知っているか？」

「いいえ、ほとんど何も知りません。家を出て父と一緒にになったとか」

「だろうな」

祖母の視線から冷たさが消え、此处ではない何処かへと向けられる。

「あれは不憫な子だな。生まれた時に悪い相が出た」

「相？ 占いですか？」

「古い家の習慣だ。人間はよくそんなものに頼る」

祖母が私と同じ『人間は』という言い方をしたので、私は少し可

笑しくなった。

「それで……悪い相と言うのは？」

「下らん話だ。この子はいずれ化け物になると出た。この世に多くの災いをもたらす化け物だそうだ」

「化け物？」

「化け物、物の怪、怪物……そんなものだ。はっきりとした言い方をしないのがまた憎らしい……」

祖母は忌々しげに鼻を鳴らした。

「しかし、一つ解決策があるとも言われた。化け物になるかどうかは、この子の心次第だと……つまり、この子をきちんと育て上げれば化け物にはならぬとな」

「御伽噺のようですね」

「御伽噺だ。しかし、それを真に受ける者も多かった」

祖母は目を伏せ、一息をついた。

「疑問に思っておるのだろう。それならば何故、母は家を出たのか……とな」

「……はい」

「僕は、努力をしたつもりだったのだ。あの子を何処に出しても恥ずかしくない立派な子に育て上げた……つもりだったのだ」

祖母は私に目を向けると、あの子がどう思っていたのかは知らんがな、と付け加えた。

「しかし、あの子は家を出た。そしてお前が帰ってきた……と言うわけだ。アヤナ」

「……ならば、私は化け物の子でしょうか？」

祖母の瞳が幽かに見開かれる。しかし、それはすぐに元に戻った。「確かに、お前のことを厄介に思っておる者が多い。別に化け物の子でなくともな。今度の話も、反対する者は多い」

「どうして私を援助すると？」

その問いには答えず、祖母が近くに来るようにと言う。

「冷たい目をしているな。お前の母を最後に見た時も同じような目

をしていた」

「……………」

「金のことは心配するな。他のボンクラ共に渡すよりは遥かに有用だ。それにお前はいつまでもここにいておくべきではない」

祖母が目を細め、私に向かって手を伸ばす。

だがその冷たい手が私の頬に触れた瞬間、私は反射的に祖母の手を振り払っていた。先程の冷たい視線の感触が甦ったのだ。

「……………」

「申し訳……ありません。身体に触れられるのは、嫌いなんです」  
流石にまずいことをしたと思い、素直に謝る。しかし祖母は怒ったようではなかった。

「構わぬ。アヤナ、もう下がってよい」

「……………はい」

祖母が目を閉じたのを確認し、丁寧に辞儀をして立ち上がる。

そして廊下へと続く襖に手をかけたとき、後ろから祖母が呼んだ。

「アヤナ」

「何でしょうか、お婆様」

振り向くと、祖母は目を開けて天井を見つめていた。布団からはみ出した片手は、まるで枯れ枝のように節くれ立っている。

「見てくれ、儂の手を。この年になっても子供のあやし方も知らぬ手だ」

「……………」

「お前の母は儂が抱こうとすると、いつも怖がって逃げたものだ。すまない、アヤナ。あの子をあんな風にしたのは儂の責任だ」

祖母は再び目を閉じた。

「お前にも迷惑をかけた。アヤナ、怨むならば儂を怨め……老い先短いこの命なら、いつでもくれてやる」

閉じられた瞼の奥から、一筋の涙が流れ落ちる。

「お婆様。私は自分の境遇を怨んだことは一度もありません」  
私は答えた。

そう、私は一度も誰も怨んだことはない。そもそも怨むという感情さえ、最初は理解できなかった。全ては観察の対象なのだから。「それに私、お婆様のことは嫌いじゃありません。この家の人間の中では一番……興味深いです」

私の言葉がどのように伝わったのかはわからない。祖母は数回頷いて私に背を向けた。

私はしばらくの間、どうしていいのかわからず立ち尽くしていたが、祖母が黙ったままなので軽く言葉をかけてから部屋を出た。

数週間後、祖母が亡くなったことが知らされた。祖母の遺言には、遺産の中から私が望むように金を使ってよいと書かれていたので、葬式の席では私は叔父を含めて親戚中の者から矢のような視線を浴びることになった。どうやら年配の者の中には、私が本当に家に災いをもたらす化け物だと信じている者もいるらしかった。

私は親戚一同の前で、最初の約束通り、大学進学の援助だけでよいと言った。遺産を相続するつもりはないが大学には行きたいので、せめてその分だけでも援助して欲しい、と。

私に遺産を好きにされなくなかった叔父は、文句なしにこの話に飛びついた。この時の彼の顔はなかなか興味深いものがあつた。私はそれまで、これ程話していることと顔に浮かぶ表情が食い違っている様を見たことがなかったからだ。

私は祭壇の写真を見ながら手を合わせ、一度しか会わなかった祖母のことを考えた。

彼女は私のそれまでの生涯で初めて出会った、自分に近いタイプの人間だったのかもしれない。そういった意味で、祖母は本当に興味深い存在だった。もう少し話をしてみれば良かったかもしれない。そんなことを思ったのは始めてだった。

祖母との出会いで私が得たことは三つ。

私はこの家を離れるべきであるという確信と、祖母が開いてくれた新たな道。そして残りの一つは、自分が化け物だという概念だ。

私はこの考えを気に入り、後々まで心の支えにしてきた。  
自分は化け物なのだから、と。  
それはなかなか愉快的な想像だった。

高校に入ってから、私は良い成績を保ち続けた。勉学に特別な興味を抱いていたわけではないが、嫌いでもなかった。それに良い成績を維持している限り、家においても学校においても、私は一定の立場を維持することができる。

この国は学校の成績が良い者を優遇する。

不思議な国だ。

私は人間ではなく、化け物だと言うのに。

エリカは中学、高校と進むにつれて叔母ともめることが多くなった。幼い頃の無邪気な残酷さは徐々に失われ、常に周囲に気を使うヒステリックな小心者へと変わっていった。本人達は気づいていないのだろうが、その様子は実に叔母に似ていたと私は思う。

彼女の中学校生活における上級生やクラブの先輩への気の使い方にはなかなか素晴らしいものがあつた。上履きの色がどうか、ソックスの曲げ方がどうか、スカートの丈がどうか、化粧の仕方がどうか……彼女はいちいち気を配り、私にまで注意を促した。

一度など、私の上級生への態度が間違っているとかで、放課後に長々と注意をされたことがある。しかし上級生にからまれたり怒られたりするのとは私ではなく、決まって彼女だというのは妙な話だった。

その後、彼女はいわゆる『不良』と呼ばれる者達に気に入られ、仲間に引き込まれていくことになる。彼女は元々そのようなアウトロー的なものに憧れる傾向があつたし、それにしても上下関係と仲間意識を重んじる集団行動向きな人間だった。そして、この古風な上下関係と美しい慣習は、彼女が上級生になったときに今度は彼女が上に立つ役となつて、次代へと受け継がれていくこととなる。

高校に進学すると同時に、エリカは髪の毛を紅く染めた。これは

彼女が何よりも仲間の意見を尊重したからであり、また彼女自身が本気でそれを似合っていると思っていたからだ。私の意見は……述べずにおくが、少なくとも叔父と叔母にとつては、とても信じがたく、認めがたいことだったようだ。元々あまり良い方ではなかったエリカの成績は高校に入ってから下降の一途を辿り、やがて彼女が身分違い（と叔父夫婦は思っていたようだ）な男と付き合い始めたとき、二人の怒りは頂点に達した。彼等は毎晩のように喧嘩を繰り返し、その怒声は私の勉強の伴奏となった。

私としては、彼女の集団に属する者としての忠誠と協調性は尊敬にすら値すると考えていたので、彼女が髪を染め、咳き込みながら煙草を吸い、家庭用のスクーターで畦道を走り回っていることくらいはどうということもないと思っていた。エリカは私とは違い、集団における規律やしきたりを順守する、実に社会的で立派な人間だ。彼女のような人間こそが組織の一部となり、歯車となつて、秩序の取れた社会の構成員となる。それが何故わからないのだろうか？ 彼女はいわゆる『悪い子』ではなかった。ただ少し道を迷っていただけ、それともたいした距離の道じゃない。

彼女に比べれば、むしろ私の方が『悪い子』だったように思う。エリカが仲間の男と稚拙な付き合いを始めた頃、私は処女を捨てた。

/

健児との出会いと別れは、私に何の影響も与えなかったように思えた。彼は私を求め、私は彼を拒絶した。彼は何かを私に伝えようとしていた。しかし私はそれを理解することはなかった。

あの坂の上に立ち、もう健児はいないのだと知ったとき。

私は結局一人なのだと思った。私は人間じゃない、だから人間と関わる必要もない。それは後に祖母との出会いを経て得た概念と融



合し、一つの結論となって私の心に根づいた。

私は人とは違う。私には人間の温もりなどいらぬ。何故なら私は、化け物なのだから。

だが。

月日が流れ、健児と過ごした時間が遠く離れば離れるほどに。私は彼のことを忘れるどころか、いつそう思い出すようになっていた。

彼の温もり、私を抱き締めた細い腕、首筋に触れた唇。それらの記憶は突然沸き上がるように私を襲い、私自身にもいつ起きるのかわからなかった。

例えば、英語の授業中。広げた教科書の上にスツと窓から射し込んだ光が当たった時。白いカーテンがはためき青空が見えた時。

心の奥底で静かな爆発が起こり、幽かに彼の体温が感じられた。背後に彼が立っている。細い腕が私を抱き締め、首筋に唇が触れる。しかし、私は振り返らない。何故なら、それが幻だとわかっているからだ。私自身の感覚が作り出した幻。振り返っても、そこには変わらぬいつもの教室が広がっているだけ。

……それだけだ。

そんな時、私は締めつけられるような胸の痛みと共に、幽かな安堵を覚える。彼の感覚は私を慰め、私は彼の体温に救いを求める。しかし私が求め、一步でも踏み出せば、彼の幻はたちまちのうちに消え失せる。私を受け止めてはくれない。

私にはそれがわかつている……いや、わかつてしまった。

それが私の作り出した幻でしかないということ。私は彼の幻に救いを求めているということ。

私が健児を求めているということ。

でも、健児はもういない。

……いないのだ。

「私が彼を拒絶した。だから、彼はもういない」

英語の授業中に呟いた。隣席の男が不思議そうに私を見る。

「……私はいつも気づくのが遅すぎる」

次の瞬間、私は机を叩きながら大声で泣き出していた。

ここまで感情を表に出したのは初めてだった。出すだけの感情があるとは思ってもみなかった。しかし私は泣いた。声を上げて泣いていた。教師に付き添われて保健室に行ってから泣き続けた。

まるで、これまでの生涯で泣けなかった分を、まとめて吐き出すとするかのように。

夏休みが終わり、季節はもう秋になっていた。暖かな陽射しの中、風は冷たい水のように私の体を掠め、流れていく。高く鮮やかな空の端に、白い雲がたなびいている。

秋の空は何処か心を締めつける。手をかざして空を見上げ、私は目を細めた。

気がつくと、私は駅の前に立っていた。

高校は叔父の家から駅を挟んで正反対の場所にあり、徒歩で通学するにはかなりの時間がかかる。通学には町の外周を走る循環系のバスを利用していた為、普段の生活で中心街の駅に来る必要は全くない。

しかし、私は時折駅を訪れていた。

駅前の広場、木陰のベンチに腰掛けて、私は改札口を眺め続ける。今の電車で着いた者の中に、痩せて髪の長い……いつも不思議な輝きを湛えた瞳で笑う少年がいないだろうか？

身勝手な考えだということはわかってる。私が彼を拒絶したのだ。今になって会いたいと願ったところで、そんな想いが聞き届けられるはずはない。

それに。

……それに。

もしも仮に、もう一度彼に会うことができたとしても。

私は自分の気持ちを伝えることができるだろうか？ 私には貴方が必要なのだと、傍にいて欲しいと言えるだろうか？ ……いや、できないだろう。きっとまた同じ事を繰り返し、彼を拒絶してしまうに違いない。

それでも、私はもう一度彼に会いたかった。会ってもう一度抱き締めて欲しかった。

私の順序は滅茶苦茶だ。

私は何故に人間が社会を作るのかを理解した。人間はあまりに弱く、一人では生きられない。だから他の人間を求めるのだ。

人間はあまりに弱い。

そして私も、その弱い人間と同じ。

人間は一人では生きられない。

私も一人では生きられないのだ。

私は電車を待つのをやめ、駅を後にした。

/

「なあ君、いい天気だよな」

男が声をかけてきた。

私は町の中心を抜けて河原に出ていた。上流に向かい、三本目の橋を渡った所に叔父の家はある。私はこのまま帰るつもりだった。

「何か御用でしょうか？」

振り向くとサラリーマン風の男が立っていた。背が高く、身なりはいい。年は二十代後半といったところか。

男は暫く私の顔を見つめると、啞えていた煙草を指に挟み首を傾げた。

「ん？ いや、いい天気じゃないかと思ってね」

「……そうですね」

私はちらりと空を見上げ、そのまま立ち去ろうとした。

男が少し駆け足で私の隣に並ぶ。

「ねえ、君、学校は？」

「体調を崩したので早退しました」

「何か嫌なことがあったの？」

「どうしてそう思うんです？」

男は少し目を細めると、煙草の煙を吐き出した。

「何となく……ね」

「そんなことはありません」

私は早足に男から離れようとした。しかし、男は依然として私に追いついてくる。

「僕は昔からこういうことには勘が鋭くてね。何となく追い詰められてる人間がわかるんだよ。口調とか、体の緊張具合でね」

男は蛇のような視線を私の身体に絡ませた。

「君は何かに追い詰められている。ところが、それが何かかわからない。そうだろう?」

「違います!」

私が振り払うように投げ出した手をつかみ、男は笑った。

「人生を楽しむ方法を知りたくないかい? 今よりももっと楽しく、そして楽に生きられる方法だ」

男の真意を測りかね、そのとぼけたような表情を凝視する。

……と。

男は唐突に表情と口調を改め、言った。

「君を買いたい。金なら幾らでも出す。君にはそれだけの価値がある」

「ありません。そんなもの」

「だったらどうなってもいいだろう?」

男が小さく笑う。私は空いている左手で男の頬をひっぱたいた。

「……悪いことを言ったね」

男は苦笑混じりに溜息をつく、私の手を離して頬を撫で、手を振って元来た道を戻り始めた。

冷たい風が髪を乱した。

足元から、言い知れない冷たさが這い上がってくる。  
壊れてしまう。

このままじゃ壊れてしまう。

男につかまれていた手首が、少し暖かい。

「……………ねえ」

「何だい？」

男が振り返る。

「教えてくれる？」

「……………勿論」

男は嬉しそうに笑うと、煙草を川の中に投げ入れた。

そのときの男の表情がとても子供っぽくて、私はつい微笑んでしまった。

「私って悪い子だ」

私は呟いた。

「どうして？」

男が私の上に覆い被さりながら訊ねる。

「いつもだったら数学の授業を受けているのに」

「次の時間は？」

「歴史の授業。定年近くのおじいさんが、ずっと小さな声で喋っているの」

「それならこっちの方が有意義だ」

男は私の胸にキスをした。

「でも、私は悪い子なの」

「そうかな？」

「……………そうなのよ」

私はホテルの天井を見つめながら、静かに快感の海に沈んでいった。

男に抱かれて私が理解したこと。

人間の体にはスイッチのような部分があること。

それらを一定の手順で操作すれば、一定の快感が引き出せるということ。

私の身体にも同じ機能は備わっていて、そうして引き出された快感に溺れていれば、自分が壊れてしまいそうな不安を忘れることができるということ。

私がそれを望んだこと。

自分でも驚く程に、快感を求めたこと。

つまり、私は悪い子だということだ。

「……貴方なんか嫌い」

私は毛布を抱き締め、小さく呟いた。

「だろうね」

男はだらしない格好でベッド脇の椅子に腰掛け、煙草の煙を吐き出した。照明の光に彩られた紫煙が、広めの部屋を満たしていく。

私は、この匂いが少し好きだ。

「どうして私を抱いたの？」

「どうして僕と寝た？」

男は意地悪く微笑むと、すまない、と謝った。

「お互い訊かない方がいいこともあるさ」

「そうかもしれない」

「いい答えだ」

男は微笑んだ。

「貴方の名前は？ 何の仕事をしているの？」

「浅木恭介。職業はしがないサラリーマンさ」

「お金。いっぱい持つてるのね」

テーブルの上に無造作に置かれた、不自然に膨れ上がったアサギの財布を見る。

「儲かってるサラリーマンだからね」

アサギはおどけた口調で言った。

「世の中には潰れる会社だってあるのに……」

「今は好景気だ。この国全体が沸き立ってきているんだ」

子供の内緒話のように、小さく楽しそうな声でアサギは囁く。

「水が沸騰するみたいに、そこら中から訳のわからない儲けが出てくる。本当にすっかりとした会社は取り残されて、軽くていい加減な会社がどんどん舞い上がっていく……いつまでも儲かり続けると思ってたね」

「酷い話ね」

「心配することはない。そのうち好景気は終わる。沸騰し尽くして後には何も残らない。そうすれば地に足のついていない軽い会社はみんな地面に叩きつけられることになる。もう自分で立つ力だって残ってないさ」

「貴方は軽い会社の人ね」

アサギは暫く黙った後、言った。

「そうだよ。軽い会社の人間さ」

「どうするの？」

「何が？」

「軽い会社のことよ」

「ああ」

アサギは両腕を組んで考え込むような素振りを見せたが、すぐにニヤリと笑って、どうしようかな？　と言った。

「本当に……どうしようか？」

「どうしてそんなに楽しそうなの？」

「どうしようもないからさ」

アサギは立ち上がってベッドの脇に座った。

「君はどうして僕が君を買ったのかって言っただよね？」



「うん」

「理由を教えてあげよう。それが君の迷いを解決することになるかもしれないからね」

「どういう……こと？」

アサギは妙な笑みを浮かべると、質問した。

「君は何歳だい？」

「十五歳。高校一年生」

「へえ、もう少し年上かと思ってたよ」

意外そうに目を丸くする。

「何か悪いことでもあるの？」

「いや、却っていいくらいだ。ああ、年上に見えるっていうのは大人びてるって意味だ、気にしないでね」

「だから、理由は何なの？」

少し苛立ち、語気を強める。アサギは少し困ったように微笑み、暫く目を伏せていたが、不意に小さな声で言った。

「僕はね。君くらいの……十代の子じゃないと駄目なんだよ。セックスの対象としてね」

「どうして？」

「それは難しい問いだ。僕自身知らないうちに、いつの間にかこうなっていた。本当に何故だろうね？」

「……………」

アサギは少し笑った。

「言い訳するつもりじゃないが、これは仕方のないことなんだよ。そりゃあ僕だって、これがいけないことだってことはわかってる。僕くらいの年の男が君みたいな年の女の子に手を出しちやいけないってことは……ましてやセックスの相手として買うなんてことはねでも、これは仕方のないことなんだ」

アサギは私の右足を握ると、指の間にキスを繰り返した。

「僕は今年で二十九になる。妻もいる。年に数回だって愛し合わなわけだね。ご存知のように仕事もしてるし、実はそれなりに高い役

職についている。信じられないことにね」

アサギは次第に舌を高い位置に這わせつつ、話し続けた。

「社会的な責任ってやつが問われる頃だ。おまけに僕は社会的に成功してるってことになってる」

アサギは唇を離すと、ベッドの上に寝転んだ。

「……でも、僕は駄目だ」

「何が駄目なの？」

アサギは胸に手を当てて呟いた。

「僕には何かが足りない。立派な大人ってやつになるには何かが足りないんだ。そしてそれが何なのかは僕にもわからない。でも、『ないものがある』ってことは感じられる……それは君も同じじゃないのかい？」

「何が？」

「自分には何かが足りないってことだよ」

「……うん」

私は暫く黙ってから肯いた。

「そうね。私には何かが足りない。でも、どうすればいいの？」

私は寝転んだアサギの上に手を這わせた。

「どうすれば私は人間になれるの？」

「人間になれる……か。まるでピノキオだね」

アサギは微笑むと私の手を取った。

「僕も昔はよく迷ったよ。どうすればまともな人間になれるのかってね。でも、最近になってわかったことがある」

突然起き上がり、私を押し倒す。

「それはね。結局、何も悩むことはないってことなんだよ。この国にまともな大人なんて一人もいない。君や昔の僕が考えていた『普通の人間』なんてやつは、実は一人もいやしないんだ」

「……まさか」

「いいや、そうなんだよ。君はまだ知らないだけだ。この世の中は穴だらけなのさ。みんなスラスラで、本当に重要なことなんて何も

「ありはしないんだ」

アサギは楽しそうに笑うと、恐ろしいほどの正確さで私の快感のスイッチを探り出し、それを的確に操作し始めた。

「だ、だったら……」

襲いくる快感に必死に抵抗しながら、悲鳴のような声で訊ねる。

「どうすればいいの？ 私は……何をすればいいの？」

「楽しめばいいんだよ。この世界を不完全な体のまま楽しめばいい。傷が痛んでも、息が苦しくなっても……そんなことは忘れてしまえばいい。この世界を楽しむんだ。いつか綻びが大きくなって、完全に壊れてしまうまでね」

アサギは私の耳に舌を這わせ、囁いた。

「この世界を楽しめばいい。全てが終わるまで」

私はいつしか、自分の体がアサギを求め始めていることに気づいていた。いや、体だけではない。私全体が彼を求めているのだ。

……もう、いいじゃないか。

心の中で誰かが呟いた。

私の足元には、いつだって大きな黒い穴がぽっかりと空いている。そして、私はその上を漂っている。

これ以上、訳のわからない不安に怯え苦しむことはない。怖がることはない。何も気にしなくていいんだ。そのほうが楽だろう？

「……うん」

私は答えた。

私は昏い奈落の底へと落ちていく。

ふと、気づいた。

この暗闇……健児の温もりに似ている。

「前に一人、男の人がいたの」

私は健児のことを口にしていた。

「たいしたことじゃないと思ってた。でも、いなくなったら……いなくなったら、凄く寂しくなったわ」

「ああ、寂しいっていうのは嫌な感じだ」

アサギは隣に寝転んだまま呟いた。

「だから、さつきは彼に抱かれているつもりだったわ」

一瞬の沈黙の後、アサギが引き攣ったような小さな笑い声を上げる。

「僕も君を抱いていたわけじゃない。君のイメージを抱いていたんだ。君の若くて美しいイメージをね」

アサギは勢いよく起き上がった。

「お互いに満たされないものを持つてる。そして淋しいのは嫌いだ。だから、求め合う」

「本当のことが何もなくても？」

「楽しむしかないだろう？」

「全てが終わってしまうまでね」

「いい答えだ」

私が服を着て部屋を出ようとした時、後ろからアサギが声をかけた。

「また会えるかな？」

私は答えずに部屋を出た。

結局、アサギと私の関係は続いた。アサギはその肩書の割には暇な男で、私達は平均すると週に一度の割合で会うことになった。

最初に会った時に私が金を受け取らなかったのが彼の興味を引いたらしく、アサギは私と会う時は贅沢な金の使い方をした。私が知

り合いにアサギといるところを見られたり知られたりするのを嫌うことを知ると、彼は私を遠くの街に連れて行き、そこで金の使い方を教え込んだ。

服の選び方や見分け方、化粧の仕方に、会話の流れの読み方までそれまで閉鎖された世界の中で生きてきた私は、アサギを通じて急速に人間の社会の仕組みを観察し、分析していった。

私は人間の社会というものが、電気信号のやり取りで動く機械のようなものだということを知った。一人一人の人間は機械の部品で、他の部品と信号のやり取りを行いながら全体を動かしていく。何処に向かつて動いているのかを知る部品は少ないようだった。制御する為の部品もあるらしいが、機能はしていないようだ。

「まるで水の中に沈んで水面を眺めているみたい」

呟くと、向かいの席でアサギが不思議そうな顔をした。

私達は高層ビルの最上階にあるレストランにいた。窓の外には深い闇が広がり、集積装置にも似た高層ビルが立ち並んでいる。目に見えない情報に乗せて張り巡らされた回路を行き交う車のライトは、深海を泳ぐ魚の群れのように列を成している。

「どうしたんだい？」

「すべての感覚が曖昧なのよ。まるで私という存在が別にあって、それを眺めているみたい」

「君は眺めるのが得意じゃないか。いつもとても客観的だ」

「そうじゃない。これまでは自分の感覚器官を使ってるんだって、はつきりと感じられたわ。でも今は違う。何かすべてに膜がかかって、酷くボンヤリしてる。まるで……」

何も知らず、何も感じずにいた、あの頃に戻ったかのように。

「それで何か悪いことが起きたかい？」

アサギはメニューを見ながら訊ねた。

「……そうね。前より傷つかなかったわ。何が起きても他人のことのように思えるの」

「それはいいことだ。とてもね」

「本当に？」

「ああ、本当だ」

アサギは笑いながら言った。

「ところで、叔父さん達は旅行だったね」

「ええ、あと二日帰ってこないわ」

「なるほど……それじゃあ、時間はたつぷりだ」

確かに私は何も感じなくなってきた。アサギの欲望に満ちた眼差しも、これまで自分を支配し続けてきた空虚な感覚すらも、遥か彼方のもののように思える。

私は目を閉じた。

世界を流れている電気信号が、私の体の中を通っていくような気がした。

今になって考えればわかる。

私は実社会の住人であるアサギとの関係を経て、思春期から抜け出したのだ。

幼い頃から続けてきた私の人間観察と模倣の技術は、ここに来て大きな進展を見せることになる。

目を開けた時、私は十八歳になっていた。

/

私達はホテルの一室にいた。

あの日、河原で出会って以来、何度も使い続けてきたホテル。私はアサギに買い与えられた衣服と装飾品で身を飾り、目の前には当のアサギがベッドに座り込んでいる。

アサギは、この二年半で急激に老けたように見えた。

「……頼むから……」

アサギは絞り出すような声で呟いた。

「頼むから、僕と別れるなんて言わないでくれ」

「アサギさん」

私は穏やかな口調で諭すように言った。

「私はもう十八歳よ？ 貴方の趣味からすればおばさんだわ。それに……」

アサギに近づき、優しく髪を撫でる。

「それに、別に私を抱いているわけじゃなかったんでしょ？」

「そのつもり……だったんだ」

アサギは引き攣った声で呟くと、私の下半身にしがみついた。

「……そのつもりだったんだよ」

アサギが震える手で下半身をまさぐっているのを他人事のように感じながら、ふと部屋を見回す。初めて見た時には瀟洒で綺麗な部屋だと思ったものだが、今では所々に汚れが目につき、内装も少し時代遅れになってしまっている。時の流れは恐いものだ。

「駄目よアサギさん。もうお別れしましょう。私は春から遠くの大学に行くんですから」

私はスカートの中に入ろうとしたアサギの手を止めた。

「こ、この二年半で君はとても綺麗になったよ」

アサギは私を見上げ、声を震わせた。

「とても綺麗だ。信じられないくらいに」

「貴方のおかげだわ。アサギさん」

「僕が君を育てた……」

「そうね。貴方のお金がね」

「君は僕に感謝すべきだ」

「感謝してるわ」

私はアサギの頬を撫で、もう片方の頬に優しく口づけた。

「でもお別れよ。アサギさん」

私は彼から離れてドアに向かった。

「ま……待ってくれ！ アヤナ！」

アサギが慌てて立ち上がり、後ろから私を抱き締める。首筋を這う唇と舌の感覚に辟易しながら、私は言葉を選んだ。

「アサギさん……私は貴方の奥様と約束したんですよ」

「あの女は勝手だ！」

アサギは強引に私を振り向かせると両肩をつかんだ。

「僕のこともなんて少しも愛してはいなくせに、自分だって他に男を作ってるくせに！ 教えてやろうか？ あの女の酷い趣味を！」

どっちもどっちだ。

「貴方はあの人には逆らえない。でしょう？」

「君とのことは本気だ。だから、ずっと大切にしてきた」

「だから、奥様の気に障った」

「君のことは本気だ」

「貴方に家は捨てられない」

「……捨ててみせるさ」

私は小さく溜息をつくとき、これ以上ないほどに優しく微笑み、アサギの顎に指を這わせ、ゆっくりと唇を近づけた。

アサギの表情が歓喜に歪む。

二人の唇が触れるか否かの距離で、私は囁いた。

「アサギさん。もう、全ては終わってしまったんですよ」

私は部屋を出た。

ドアを閉める瞬間、彼が呆然とした顔で立ち尽くしているのが見えた。

私がドアを閉めた途端、中から何かを引き裂くような悲鳴と、壊れそうなほどにドアを叩く音が十数秒間響いた。

それから、何かが呻く声が聞こえた。

まるでそれは、檻に閉じ込められた……そして逃げ出す術を失った獣の啼き声のようだった。



その後、アサギの予言通り好景気は終わりを迎え、彼の会社はある外資系企業に買収されて事実上その存在を失った。

アサギと別れた頃、私は都心の私立大学の生物学科へと進学することが決まっていた。

歴史こそ浅いものの、最新鋭の研究設備とキャンパス、呆れるほどに高い授業料と偏差値を誇る大学。もともと、親戚の者達にとつては私が自由にできるはずの財産に比べれば大学の授業料など安いものだったらしく、大学の四年生になる頃には、いつそのままだまで卒業して研究職にでも就いたらどうだと提案されたほどだった。彼らはよっぽど私に故郷に帰ってこられるのが嫌だったらしく、私にとつてもそれは好都合だった。私は故郷からの仕送りとアサギの妻から渡された金で、何一つ不自由のない生活を送ることができた。彼女にとつても、やはり私は帰ってきて欲しくない存在だったようだ。

私が故郷を離れる時、こんなことがあった。

「アヤナちゃんも、もう大学生なのね」

居間のテーブルにつき、下宿先の案内を眺めている私の正面に座り、叔母が愛想良く話しかけてきた。家でつけるにはきつい香水の匂いが漂ってくる。

私が幼い頃からその傾向はあったが、往年の叔母はいかにも専業主婦らしい小太りの体に、ボリュームのある髪、大型の草食動物のような目と、週に一度ほど爆発させるヒステリーを持ち合わせていた。彼女のヒステリーは大きな問題が起こった時よりも些細な問題が積み重なった時に引き起こされ、その矛先は一番近くにいた者に向けられる。私もよく直撃を食らったものだ。

最近では彼女のヒステリーの誘発源はもっぱら娘のエリカであり、その平均爆発数も増加の一途を辿っている。

「本当に羨ましいわ。うちのエリカなんて……ねえ？」

私は彼女の高学歴嗜好を知ってるので適当にお茶を濁すことにした。実際、この人の前では大学に受かったことを嬉しそうに話さない方が懸命だ。

「昨日もね、エリカに言ったのよ。貴女もアヤナちゃんを見習って、浪人してもいいから後一年くらい頑張りなさいって。だって、学歴が高校止まりだなんつてみつともないでしょう？」

「そうでもないと思いますよ。それにエリカさんは確か、専門学校になら行ってもいいって言うてたじゃないですか？」

叔母は笑いながら大袈裟に手を振った。

「服飾の学校に行つてデザイナーになるって？ そんなの無理よ。あの子にそんな才能あるわけないじゃない。あの子は大学に行つて普通の仕事に就いた方がいいわ」

「……それはそうかもしれませんが」

彼女の学歴志向は好きじゃない。

人間には様々なタイプがある。絶対的な価値基準など存在しないし、一つの基準に執着することなど無意味だ。

勉強ができるということに、どれほどの意味があるというのだろうか？

まともに相手をして無駄だとわかっていながらも、私はついつい言葉を重ねた。

「折角本人に行きたいという意志があるんですから、行かせてあげてもいいのではないですか？ 才能のあるなしは、やってみてから判断すればいいことですし……」

「服飾なんてあやふやな仕事には就かせないわ」

叔母はきつぱりと言い切った。少しきつい目で私に微笑みかける。「あの子にはもっと堅実な人生を歩んで欲しいの」

「堅実な人生……ですか」

私はこれ以上何を言っても無駄だと思い、口を閉ざした。

叔母は私の手元にある住宅案内を見ながら呟いた。

「本当にアヤナちゃんは優秀よね。エリカと違って手もかからなか

つたし、人一倍勉強もできたし……それに昔から一人暮らしのようなものだったから、一人で遠くに行っても大丈夫ね」

叔母は本当に羨ましそうに言った。

「私ね、最近思っただけ。子供ってエリカみたいに叱ったり甘やかしたりして育てるより、アヤナちゃんみたいに何でも自分でさせた方がいいのかしらね？　どう思う？　アヤナちゃん」

不快感が体の奥底から込み上げてきた。

目を閉じて心を落ち着け、何とか抑えつけ、努めて冷静に返答する。

「そうですね。確かに、あまり干渉されないほうが子供は楽だと思います」

「そうよね。アヤナちゃんはいいいこと言うわ。うちのエリカとは大違い」

叔母が心底納得したように肯く。

……世の中には、嫌味を解せない人間がいる。

「叔母さん」

「何？　アヤナちゃん」

私はパンフレットをまとめて立ち上がった。

「放任主義と無関心は違うんですよ」

そして私はきょんとしている叔母を残して部屋を出た。

私が故郷を離れてから暫くして、エリカが男と家出したと伝えられてきた。相手の男はエリカが付き合っていた暴走族仲間で、私はこの高校中退の男の生き方を非常に高く評価している。

それから一年が過ぎ、私が大学二年生の時、エリカが結婚したという報せが届いた。どうやら二人の間に子供ができた為、認めざるを得なかったらしい。結局、彼女はデザイナーにはなれなかったが、現在は叔母が望んだ以上に堅実な主婦となっている。

アサギという男は精神的にはかなり貧弱で、才能も実力もない人間だったが、こと異性関係においては奇妙なほどの勘の良さを発揮した。彼にとって異性関係はゲームのようなものだ。ゲーム中での架空の経験値とパラメータ。それは異なる状況下では何の役にも立たないという点でゲームそのものだった。

私と出会った頃、彼はゲームをやり尽くした者が抱く特有の感情、あまりに卓抜し過ぎてしまった自らの技術に対する虚しさを覚えていたようだ。そこに、私という今までにない新たな攻略対象が現れた。

私と彼との関係は、恋愛と言うよりも、やはり知的なゲームに近かったように思う。アサギはあらゆる手段を用いて私の精神を探り、陥落させようとする。人間との関係を恐れる私がアサギとの関係を続けたのは、それらが全て『嘘』だとわかっていたからだ。

わかりきっている嘘は真実よりも心を傷つけない。アサギが私をゲームの攻略対象として見ていたように、私は常に一定の距離を保つことのできる相手として彼を認めた。私はアサギを観察しながらその手法を分析し、時折襲ってくるあの不安感を効率的に解消する手段としてアサギを必要とした。

私達が共に過ごした二年半、私の傍らには常にアサギがいたが、私の心の中にアサギが侵入することはただの一度としてなかった。私達はそんな関係だった。

……少なくとも、私にとっては。

アサギは私にとって非常に興味深い対象であり、数多の知識と技術を授かった師であり、また手強い敵でもあった。

彼から盗んだ技術を用いて彼自身の精神を探り、把握し、じわじわと陥落させてゆく。実に二年近くの歳月を費やしたその作業は困

難を極め、私の技術を更なる高みへと導いた。後に初めてアサギ以外の人間に対して使用した時は、余りに呆気なく事が運んだので拍子抜けしたものだ。

私の人間観察は次第に当初の目的を離れ、趣味の領域へと移行していった。研究者が抱くように、人間の生態に対する学術的な愛情さえ持ち始めた。

私は大学時代、アルバイト先を含めて百人以上の人間と関係を持った。おおよそのタイプを判断し、話題や立ち振る舞いを相手に合わせれば、関係を持つことはそれほど困難ではない。私は生物学者のフィールドワークのように、日常的に多くのサンプルを集め、分類していった。

もつとも、このような作業は手間と時間がかかる割に得るものは少ない。サンプルの収集を始めてから一年も経たないうちに、私はおおよそ一般の男というものが似通った思考・行動原理を有していることを理解し、量よりも質へと切り替えることにした。

多数の標本を持て余した昆虫学者の心境といったところだろうか。

「今朝の朝食男はなかなか面白かったわね……もう少し観察を続けるべきだったかな」

私はメモ帳に走り書きをしながら呟いた。

いつもなら専用のノートに系統立てて分類するところだが、あいにく今は時間がない。今日は早めに教授の所に顔を出さなければ。

……と。

メモ帳を閉じ、顔を上げた視線の先に男が一人、無然とした表情で立ち尽くしているのが見えた。この暑い時期にきちんと背広を着込んだ眼鏡の男だ。

「あら、教授。おはようございます」

「おはよう。花村くん」

私は当の教授に挨拶した。

男の名前はカジワラという。私が通う大学では最年少の教授で、

まだ三十代初めのはず。歴史の浅い大学だからこその就任ではあるが、その知名度は高い。

一度は科学雑誌に『未来を代表する若き科学者』などと書かれていた。

なかなか笑える。

「アヤナ。さっきの男は誰だ？」

カジワラは左の頬を摩りながら近づき、私の耳に口を近づけると口調を変えた。

「昨日知り合ったの。泊めただけよ」

「嘘だ」

「ええ、嘘よ」

私はカジワラの耳に囁き返した。

「本当は朝御飯をご馳走になったの」

「朝食を？……食べたのか？」

変な質問。

「ええ。美味しかったわ」

「まったく」

カジワラは顔を離すと、小さな声で何事か呟いた。よく見てみれば、摩っている左の頬が赤黒く腫れ上がっている。

「近所の人達が噂してるぞ」

「何をですか？」

「毎朝十一時になると君の部屋から男が追い出されるってね」

「まあ」

「もう少し周りのことにも気を使いたまえ。君は大学の名前に傷をつけるつもりか？」

「すみません、低血圧なもので早くに起きられないんです。これからはもう少し早くに追い出すようにします」

「そういう問題じゃない」

カジワラは右のこめかみを痙攣させながら大きく息を吸い込み、長々と吐き出した。

「まったく、毎日朝になるのが憂鬱だよ。今日も君の部屋から見知らぬ男が出てくるんじゃないかと思うと……」

「毎日来るからですよ。私だって毎日男を連れ込んでるわけじゃないんですから」

カジワラは凄まじい目つきで私を睨みつけた。

口を開くか否かのタイミングで、こちらから打って出る。

「教授のお怒りももつともです。私も非常に反省しております」

「……………」

カジワラが言葉に詰まる。彼の弱点は神経質な割に何事も理性的に解決したがるところだ。だから自分が感情的になっても、相手の言葉は一応聞いてしまう。

「ですから、私共の関係も終わりに致しましょう」

「花村君？」

「私は大学を辞めさせていただきます。御貸しいただいたマンションも引き払って……」

「……………」

勢いのない口調でカジワラが訊ねる。彼も私の次の台詞は予想がついているのだ。

「田舎に帰って、石鹼のセールスレディでも致します」

カジワラはもううんざりだと言わんばかりに手を振った。

「わかった。この話はこれで終わりだ」

『石鹼のセールスレディ』は私が反省をしたふりをする時に必ず使う言葉だ。特に意味はない。そして、私達はこの応答を数えきれないほど繰り返している。

「まったく、君は優秀な生徒だよ」

「お誉めいただきありがとうございます教授」

私は素直に微笑んだ。

「ところで、あの男は本当に朝食を作ったのか？」

「ええ、とっても上手だったわ」

「そんなタイプには見えなかったがな」



薄々感づきながらも、私はカジワラの頬が腫れている理由を訊ねた。

「さっき、あの男にビシッと一言文句を言ってやったんだよ。俺のアヤナに手を出すなってね。かつこいいだろ？ そしたらアイツ、問答無用で殴りやがった」

また何事かぶつぶつと呟いているカジワラを横目に見ながら、実際は相当しつこく文句を言ったのではないかと私は想像した。

「ああいう筋肉だけで生きてる奴は軽蔑するね。まるで知性の欠片もない」

「どうでしょうね」

素っ気無く答えると、カジワラは急にニヤついて訊ねてきた。

「でも、ああいうタイプはベッドの中では凄いだろっかね？」

「……………」

「ゼミまでまだ時間がある。一緒に食事をしようか」

車道に停めてあった車を指し、乗って行くかと訊ねる。

私は拒否したところで無駄だとわかっていたので乗ることにした。そう言えばカジワラに研究の経過を報告しなければならぬのだが、彼は運転席で延々と自分の知っている店の話を独り言のように続けている。

「世界一の昼食も頼むべきだったかしら」

私は車外に目をやりながら呟いた。

カジワラは私が所属している研究室の教授であり、私の研究の協力者である。

私は大学院生の一人ではないが、ポジシヨ的にはカジワラの助手のように思われているはずだ。何故なら、彼の研究室で行われている実験計画の実質的な指揮を私がとっているからだ。

高校を卒業して大学の生物学科へと進んだ私は、当時助教授に就任したばかりだったカジワラの目に留まり、公私共に実力を認められてパートナーとなることになった。

つまりは助手、兼、愛人だ。

カジワラは研究者としては野心が強く、俗物的な人間だ。地道な研究を続けるよりも、いかに名声を得るかということに全ての情熱を傾けている。自分では明晰な頭脳の持ち主であるつもりだが、本当の意味で頭がいいとは言えない。確かに知識だけは異常なほどに頭の中に詰まっているが、その運用の仕方はありきたりなものではない。何処かで聞いたような論理や、使い古された手法、彼はそれに少しの修飾と御大層な言葉を付け加え、さも斬新なものであるかのように見せかけている。

確かに、その巧みさと器用さには眼を見張るものがある。しかし、私はそんな彼を持って囃す者達が理解できない。何だったら、彼の講釈から偉そうな言葉や専門用語を抜き出し、わかりやすく簡単な言葉に置き換えてみるといい。そこに何か非凡なものが残っていると、は到底思えない。

それならば何故、私がカジワラとの関係が続いているかと言うと……それは彼が非常に『利用しやすい馬鹿』だからだ。

「不況のせいだな。いいレストランが減ってきてる」

カジワラは長々と最近のレストラン事情について語った。

私はカジワラと共に大学から少し離れたレストランで昼食を摂っ

ていた。

「別に私は味にこだわったりはしません。それに、そんな風に目の前で愚痴をこぼされては、美味しい料理だって不味くなります。やめてください」

「しかしねえ……」

「文句があるなら最初から入らなければいいでしょう?」

私は手を止めて口元を拭いた。

カジワラと共にいるとまともな思考さえ困難になってくる。話題は本質を離れ細分化し、取るに足りない違いがさも重要なことのように語られる。しかも分析を加えたからといって、何か有意義なことを見出すわけでもない。細部は細部のまま続き、本質との距離は開くばかりだ。

カジワラの話は延々と続き、私は自分が食べているのは料理ではなく、皿の模様や材料の産地名のような気がしてきた。

「食事は文化だよ。多くの文化がそうであるように、生物のように進化を続け、成熟を迎える。多くの豊かな価値がそこには集まってくるんだ」

カジワラは言った。

「つまり、進化の果ての袋小路ですね」

私は答えた。

「歪んだ進化を続けると生物としての本質を離れ、無意味で虚弱的な物が生み出されます。人間のように」

「君の言うことは少しきつすぎる」

カジワラは顔をしかめた。

「君だって人間の文化を否定するわけじゃないだろう?」

「……どうでしょうね」

私は食べ終わると席を立った。さっぱり食べた気がしない。いくら私が味に無関心と言っても、これなら駅前のファーストフードでテイクアウトした方が遥かにまだ。

「実験が気になりますので。失礼します」

「待てよ。花村くん」

駐車場でカジワラが追いついてきた。

無理矢理私を車の中に連れ込むと、猫撫で声で訊ねてくる。

「今夜、何処かに行かないか？ 二人でゆつくりとさあ」

「実験があります」

「他の奴に任せればいい。それに今朝のこともある」

カジワラは突然口調を変えた。

「君は最近調子に乗りすぎている。大学での立場も考えた方がいい。僕との関係もだ」

「私と教授の関係は研究のパートナー。それ以上でもそれ以下でもありません。私は研究を続け、貴方はそれを発表する。それでいいじゃないませんか」

「君はとんだ売女だよ。だ、だらしく男をくわえこんで……今日だつてそうだ」

冷静に努めきれず、その口調が僅かにどもる。

「今日の男とはどんな風にやった？ ほら、言ってみろよ」

「御自分で想像してください。……お好きでしょう？」

「……アヤナっ！」

カジワラは激昂して車のハンドルを殴りつけた。

私が調べた所によると、カジワラは今でこそ二枚目気取りの優男だが、彼がそのような人間になったのは教授になって名声を手に入れたからだ。

それまでの彼は、まるで女性というものに縁のない人間だったらしい。小さい頃からの詰め込み教育、幼稚園から大学まで受験のみを目的とした生活の中、彼が母親以外の女性と口を聞いた回数はどれだけあったのだろうか？ 彼にとって女性は手に入らない存在であり、遠くを通り過ぎて行くものでしかなかった。そんな彼が女性に対して暴走した欲望と純粋な幻想、そして根深い憎しみを抱くようになってからも不思議なことではないだろう。

……しかし、私が彼に対して慈善活動をする義務はない。

「教授。私、とても反省しています」

カジワラが今更何を言っていると言わんばかりの目で私を睨む。  
「本当です。……信じて貰えないかもしれませんね」

疑いの眼差しが躊躇へと変わる。私は更にしおらしい声を作り、  
上目遣いにカジワラを見つめた。

「でも、本当なんです」

慌てて私から目を逸らし、カジワラが焦点の合わない目で何事か  
考え始める。

さて、カジワラの精神構造から察するに、彼の次の行動は……。

「さ、最初からそう言えばいいんだよ……君は強情で困る」

私の肩をつかみ、精一杯威厳を保とうとしながら、カジワラは幻想と妄想にまみれた頭で私の言動の査定を続けている。興奮の為か  
指が震え、鼻息が荒い。私の指がズボンの上からカジワラの股間を  
撫でる。

「アヤナ君。これからは……」

私は丁度いい場所を探り当てると、彼の股間をつかんで思いつき  
り捻り上げた。カジワラが大きく目を見開き、手足を小さく痙攣さ  
せて声にならない呻きを洩らす。

「ア、アヤナ……君？」

カジワラは目の前でお菓子を取り上げられた子供のような目で私  
を見た。

「もううんざりなんですよ。確かに私は教授から色々と援助をして  
いただきました。しかし、それはあの計画の成功で充分にお返しし  
たと思っています」

「だ、だがね。アヤナ君？ 私達のこれまでの関係は……」

「関係が何だと言っんです？」

私はカジワラをつかむ指に力を込めた。カジワラの目が更に大き  
く開かれる。

「教授？」

私はカジワラの顎に指をそえて顔を上げさせた。

「私だつてこの大学を離れたくはありません。あの研究はまだ途中ですからね。教授だつて今さら計画をストップさせたくはないでしょう?」

カジワラは小刻みに頭を上下させた。

「私と貴方は研究のパートナー……それでいいじゃありませんか。違いますか?」

「そ、そうだね。アヤナ君。わ、私もそう思うよ」

「関係を綺麗にする為に、頂いたものはお返し致します」

「い、いや、それには及ばないよ」

「いいえ、結構です」

手に思いきり力を込め、カジワラが小さく呻いて痙攣する。

「……では、私は研究の方を進めさせていただきます」

私は手を離すと二、三回振った。そして助手席のドアを開けて外に出た。

カジワラは暫く運転席に座り込んだままぼんやりとしていたが、糸の切れた操り人形のように顔を上げると、私を見て引き吊った笑みを浮かべた。

「ねえ、今のをもう一回やってくれないか? 何でも好きなものをあげるからさ」

私はドアを叩きつけるように閉めて立ち去った。

私の研究室は、生物学の研究室という言葉から一般的に連想されるイメージ……薬品の列や薄汚れた機具の山、そこかしこで蠢いている実験用の小動物……といったものとはかけ離れた空間だ。

研究室の扉を開けると、私は幽かに鳴り響くコンピューターの作動音と冷房の効いた清潔な空気に全身を浸した。塵一つ落ちていない床の上で靴がたてる小さな音が、私の意識を徐々に高揚させていく。

私は整然と並べられたコンピューターを愛しい想いで眺めた。

この箱の中で、私の研究は随時進められているのだ。

「どう？ 『ホムンクルス』の様子は」

声をかけると、部屋の隅でモニタと向かい合っていた男が振り向いた。縁の細い眼鏡をかけた、少し太った男だ。この研究の協力者で、名をタヤマという。

「おはようございます、花村さん。今のところ大きな変化はありませんね。『6』が相変わらず増加、『イジドア』は減少。でも安定してきました」

「昨日からのデータは誰が？」

「小島君が一人でやってくれましたよ。よくやってくれています。あ、今はデータの分析をしていますから」

「そう」

私は軽く相槌を打つとモニタを覗き込んだ。

『ホムンクルス』とは私達が進めている研究計画の名称だ。内容を一言で表せば『人工生命』だろうか。もっとも、生命と言ってもコンピューターの中の数値でしかない。何層にも連結させたコンピューターの中に一定のパターンを持った数値の『生物』……ホムンクルスを放す。ホムンクルスにプログラムされた目的は唯一つ、自己の情報をいかに長く保持するかということだ。

ホムンクルスには一定の長さの寿命が設定しており、その為自己増殖して自らの情報を増やさなければならぬ。加えてホムンクルスの情報は、複製する毎に低確率でランダムな変化を起こすようになっている。その為、世代を重ねれば重ねるほどにホムンクルスはその性質を変化させ、コンピューター内の環境に応じて生存数も変動するのだ。

そう、まるで本物の生物と同じように。

名前の由来はゲーテの『ファウスト』に出てくる人工の妖精の名前だ。研究室の扉にはこの作品から引用した文章が掲げられている。実際は原文で書かれているのだが、簡単に訳すところなる。

『生物がそこから出てきた微妙な点

内部から押し出でる妙なる力

受け与え

自分の姿を創り出し

最初は身近なものを

次に遠いものを我がものにするというあの力』

ちなみに全くと言っていいほど文学的な知識とセンスに欠けている力ジワラは、意味のわからないことを書かないでほしいものだと時折愚痴をこぼしている。

と、研究室の扉を開けて一人の女の子が入ってきた。

短く切り揃えた黒髪の、華奢な身体を白いカッターシャツとベージュのパンツで包んだ小柄な女の子だ。大きめの瞳が私を見つけて更に大きく見開かれる。

「あ……おはようございます。花村先輩」

「おはよう、サオリちゃん。昨日は頑張ってくれたんだってね」

小島佐織は今年から研究室に配属になった大学の三年生だ。少し融通が利かないところはあるが、素直ないい子だ。余程大事に育てられたのだろうと一目でわかる性格と容姿をしている。



私は隣のタヤマの肩を叩き、昼食はまだだろうから行ってきたら？　と言った。

「花村さんはどうするんです？　それにゼミは？」

「今日は休みよ」

「それじゃあ、お先に行かせてもらいます」

タヤマが足早に学食に向かう。優秀で真面目で、一つのことに集中すると他のことは目に入らなくなる典型的な研究者タイプ。彼は生物学科の人間ではなく、隣接する工学部の情報システム学科の人間だ。私も含めて生物学科の人間では、コンピューターを扱うことはできてもシステムの構築と制御までは手が及ばない。そこでかねてから交流のあった彼に頼み込み、無理を言って来て貰っているのだ。もつとも、このシステムの開発が彼の修士論文のテーマなので、関係は持ちつ持たれつなのだが。

「さてと。私の可愛い小人達はどうなっているかしら」

モニタの前に腰を下ろして検索し始めると、隣にサオリが座ってレポートを差し出した。記された数値変動を予め想定された結果と比較し、大まかな流れをつかむ。

「やっぱり『6』が増加してるわね。このぶんだと次の変動も乗り越えそうね」

『6』は現在最も勢力のあるホムンクルスだ。全てが同じ特性を持ち、分裂によって増殖する無性の生命。均整の取れた正四面体構造に近いデータを持ち、名前の由来である6つの結合部で他の仲間と連結する。その構造はダイヤモンドのように強固なもので、これまでのどのような環境の変化にも耐え、増殖を続けている。

『6』は完全なまでに自分以外の要素を排除した存在であり、他者を排除することで自分達の勢力を伸ばしている。つまり、彼等の目は全て自分自身に向き、自分自身を愛し、守っているのだ。そしてその強力な同胞への……いや、自分への愛が結果として自分達の勢力を拡大させることになる。

これと対照的なのが『イジドア』だ。『6』と祖先を同じにしな

がら、全く異なる増殖パターンを手に入れたホムンクルス。フレキシブルな構造と結合部を持ち、そのデータは増殖時に限らず微妙に変化し続ける。また、複数の個体が融合して新しい個体へと分離する性質がある。

『イジドア』は環境が変化する度にその数を大幅に減少させ、わずかに生き残った新しい環境に耐えられるものが再び増殖して存続し続けてきた。しかし今では『6』の勢力に押され、その数は減少の一途を辿っている。

「花村先輩……」

気がつくと、サオリが私の顔を覗き込んでいた。どうしたの、と訊き返す間もなく、小柄な身体が胸の中に飛び込んでくる。

「先輩」

「サオリちゃん？」

私はサオリの頭を撫でて少し引き離れた。彼女の目には大粒の涙が浮かんでいる。

「先輩……昨日はまた教授の所ですか？」

サオリは少し上擦った声で私に訊ねた。私が否定すると、彼女は涙を拭い、責めるような目で私を見据えた。

「嘘です。男の匂いがあります」

私の表情から確信を深めたのだろう。きつく下唇を噛む。

「相変わらず鋭いわね。……否定はしないわ」

「やっぱり……！」

大粒の涙を浮かべ、サオリが踵を返して走り去ろうとする。

「待ちなさい。いい子だから！」

私はサオリの手をつかんで引き寄せた。逃れようと目がく華奢な肢体を包み込むように抱き締めて、耳に、うなじに、首筋に優しく口づけ、小ぶりな胸にそっと手を被せる。

「貴女に黙って男と寝たのは悪かったわ。でも、別に貴女を裏切っているわけじゃないのよ」

「嘘です。……信じません」

「信じて。私は貴女のこと大好きよ。でも、貴女だけと寝るわけじゃない」

サオリは急に力が抜けたように泣き崩れた。床に突っ伏し、何度も首を横に振る。

「サオリちゃん。私はね、セックスは誰かを理解する為の素晴らし

い行為だと思ってる。愛し合うことで別々の人間がより深くお互いを理解し合えるの……それはサオリちゃんもわかってくれたでしょう？」

私は慎重に言葉を選びながら、彼女の身体を愛撫し続けた。

「私はサオリちゃんのこと大好きよ。でも、他にフィーリングが合う人間がいて、お互いにもっと知り合いたいと思ったら、セックスをするのは構わないと思ってる。貴女だってそれには賛成してくれただじゃない？」

「でも……それでも私……！」

サオリが涙に濡れた顔を上げた。

「もっと自由に考えるのよ。つまらない道德とか、規則なんて無視するの」

私はサオリの頬を拭い、軽くキスをした。

「私達のもっと自由に理解し合うべきなのよ。そうでしょう？ サオリちゃん」

「……自由に……」

「そうよ」

私はもう一度サオリを抱き締めた。強張っていた彼女の身体から力が抜けていくのがわかる。

「私達は自由に理解し合うことができる。それは人間に与えられた特権なのよ。いつまでも昔ながらの慣習に囚われ続けるべきではないわ。そんなのは古臭い人間の考えること……貴女を家に閉じ込めようとしたご両親のような考え方……そうでしょう？」

精密機械の調節をする技師のように、サオリの体に耳を当てて反応を探る。興奮は鎮まり、落ち着いてきている。

「そう……ですね。先輩」

さおりが涙を拭きながら呟く。もう一押しだ。私は優しく丹念に彼女の身体のスイッチを操作し、調節を加えていった。

「サオリちゃん。昨日のことは悪かったわ。私も反省してる」

「いいえ、私こそ取り乱して……」

彼女のようなタイプは一度でも自分に否を認めると、それまでと一転して強情に否を主張したがる。周囲から優しくされればされるほどだ。私は優しく……しかし曖昧な言葉で彼女を慰める。話が終わる頃には、彼女は酷く落ち込んだ状態になる。どう考えても悪いのは私の方なのだけだ。

私は小さな子を慰めるように、柔らかに彼女を抱き締め、頭を撫でた。

「少し不安定になってるみたいね。きつと寝不足なのよ、ゆっくりと眠った方がいいわ。今夜の当番は代わりましょうか？」

「いいえ、私がやります」

サオリは慌てたように異を唱えた。

本当に、強情で素直な……可愛い子だ。

私は彼女を抱き締めたまま、耳元で囁いた。

「それじゃあ、二人でやらない？ 二人きりで……」

言葉の意味を理解して、サオリの体が緊張する。悪くない反応だ。今夜は面白いデータが取れそうだ。

私がサオリの説得に用いた話……まるで六十年代のヒッピーのような理屈だが、真剣な表情で口に出してみれば意外と効果がある。あまり深い関係を求めない、好奇心と楽しみだけで動く者は肉体関係を厭わない私の態度に喜んで乗ってくるし、サオリのように純真無垢な少女は呆気ないほど簡単に信じ込む。世間に対する免疫のなさ、封建的な家庭や社会への反発が効果を生むのだろ。しかし、私自身がそれを信じているかと言うと、はつきり言っただけ全く信じてはいない。

セックスだけでお互いを理解できるわけがないことは、私が身をもって実証済みだ。私がこの理屈を振りかざす理由、それは全く逆の考え方……複数の関係を肯定し保持することで、その誰とも一定の距離を置きたいからだ。

私の内側には大きな空洞がある。いつできたのかはわからないが、

成長するほどに私の中で育ち、大きくなってきた。そして、時折そこを風が吹き抜ける。まるで全身が凍りつくかのような、冷たい風だ。

私は自分を暖めてくれる存在を求める。

束の間でも、自分の冷たさを忘れさせてくれるものを。

そうして得た温もりを、私は……拒絶するのだ。

どうしてこうなってしまったのだろう。

夜が明けても陽は巡り、再び夜が訪れるように。

一度はあれほど強く求めた者を、拒絶してしまうのだ。

そして再び、私は冷たさから逃れる為に別の存在を求める。その繰り返し……繰り返しだ。

私の中で育った空洞は、今では私の皮膚一枚下まで削り取ってしまっている。

もし空洞がこれ以上育ったら、私はどうなってしまうのだろうか。

空洞に全てが削り取られてしまうのだろうか？ 私が消えた後には何が残っているのだろうか。それは目に見えない空洞なのだろうか？

いや、壁のない空洞など存在しない。すべての外側を削り取った空洞は空洞ですらない。

ただの無……それだけだ。

「先輩……どうしたんですか？」

我に返ると、サオリが不思議そうな目で私を見つめていた。

「何でもない。少し考え事をしていただけ」

私は空白の時間を埋めるべく、止めていた愛撫の手を動かし始めた。サオリがにわかに反応し、甘い吐息を洩らし始める。私の脳裏を、先程の考えが横切った。

そう遠くない未来、私はこの子を拒絶するのだろうか。あの自分でも制御できない感情に押し流されて。私は自分がサオリに冷静に別れ話を持ち出している姿を想像した。またいい加減な理屈を使い、

さもサオリの方に責任があるかのように言い包めているのだろう。私はその様子がはつきりと想像できた。

彼女の涙と、最後に抱き締める身体の温もりさえも。

「サオリの体は温かいわね」

私は自らの考えを振り払うように、彼女の全てを感じ取ろうとした。

サオリがか細い声で否定する。

「ううん……とても温かいわ」

彼女の温もりに指を浸すと、サオリは大きく喘ぎ、私にしがみついていた。涙に濡れた頬が胸に押し当てられ、温かな液体が私の皮膚にまで染み込んだ。

数週間後、私は男とベッドにいた。

男の体は汗に濡れ、しなやかな感触が心地良い。

人間の体には寄せ合ってピッタリと来る場所がある。緊張も不快感もなく、互いの身体を寄せ合っても違和感のない部分。

セックスにおいてフィーリングが合うというのは、行為が終わった後にどれだけ心地良く体を寄せ合い眠ることができるかだと私は思う。行為自体はある程度の経験を積みめばスポーツのように楽しむことができる。しかし、行為を終えた後の無意識の動きは、経験や知識の及ばない領域だ。

お互いが絶頂に到達し、緊張が解け、熱く火照った体を寄せ合う瞬間が好きだ。頭の中が真っ白になり、全身で相手の存在を受け止める。男の手が私の髪を梳く。大きく上下する胸。やがてお互いの手が合わされる。

私はこの時、自分の曲線と相手の曲線が完全に一致していると思う。

行為自体は巧いが、終わった途端に余所余所しくなってしまう男がいた。別の男は、技術は稚拙ながらも心地良い眠りへと誘ってくれた。そして今日の男は、行為自体も、終わってから感覚も悪くなかった。いわゆる上玉というやつだ。

私は男の脇腹の辺りにピッタリとくる場所を見つけ出し、体を寄せた。そして自分が何かと結びついている感覚を味わいながら眠りにつこうとした。

しかしその時、男が起き上がって声をかけてきた。

……ずっと黙って動かずにいてくれれば良かったのに。

私は不機嫌な声で返事をした。

私と人間の曲線は、再び離れようとしているらしい。



男の名はタカハラという。科学系雑誌の記者を務める、まだ若い男だ。

カジワラの論文が世に出て以来、ホムンクルスの研究は頻繁に取材を受けることとなった。人工生命という言葉が関心を引くのか、取材の申込みは一般の新聞・雑誌からも相次ぎ、生物学やコンピューターに関する知識を全く持ち合わせていない記者を相手に一から研究内容を説明しなければならなかった。

タカハラが研究室を訪れたのは、取材騒ぎが落ち着いてきた頃のことだ。

最初のうちは張り切っていたカジワラも連日連夜理解のない連中を相手に同じことを説明するのには飽きたらしく、その頃になると記者の応対は私の役目になっていた。

「では連結したコンピューターの中に……数値的な『生命』が存在しているのですね？」

「その通りです」

タカハラは雑誌記者というよりも音楽関係者に見えた。物腰は穩やかで、知性的な話し方をするが、この雰囲気は生まれ持ったものなだろう。タカハラは鉛筆を唇に当てながら私に訊ねた。

「しかし、数値のみの存在を生命と呼んでもいいのでしょうか？」

生命というのは……」

「生命とは物質的に存在するものだ、そうお考えなのですね？」

「ええ、仰る通りです」

私は言葉を選びながら説明を進めた。

「実在する生命……貴方や私も含めて……この地球上のどのような存在も、情報の集合体と考えることができます。DNAやRNA、それらの情報によって生物は構成され、例えば肉体は失われようと、情報は生殖や分裂で次の世代へと受け継がれていきます。生物の本質は情報であり、その存在目的は、自らの情報をできる限り保持することにあります」

「利己的遺伝子というやつですね」

「よくご存知です」

私は少し頭を整理すると、再び話し始めた。

「確かにホムンクルスは、私達が知るところの従来の生命とはかけ離れた存在です。しかしその本質の部分……自己を構成する情報を守り、存続させようとする点では同じなのです。原子で肉体を構成する生物から本質の情報部分を抜き出し、数値としてモデル化したもの、ということになるでしょうか。ホムンクルスは地球環境ではなく、コンピューターの環境の中で生まれ、育ち、滅びてゆく生命……ここに並ぶコンピューターは一つの地球、箱庭なんです」

タカハラは肯くと次の質問に移った。

「では、この実験は科学に対してどのような貢献をすると思われるですか？」

「研究に実用的な意義を求めるのは一般の方の悪い癖です」

私は営業用の微笑みを浮かべて即答した。記者はこういった質問をするものだ。

「アインシュタインが相対性理論を導き出したのは原子爆弾を作る為ではありません。メンデルは遺伝子組み換え食品の為に教会の豆を観察したのでしょうか？ ただの純粋な科学的興味……ではないけないものなのでしょうか？」

「それを言われると弱いですね。こちら仕事なものでして……お気を悪くさせてしまったのなら謝ります。申し訳ありません」

タカハラが素直に謝罪する。立場上やむを得ない質問、ということなのだろう。私はもう少しこの男と話を続ける気になった。

「今はまだホムンクルスは幼稚な段階でしかありませんし、実際の生命が有する情報量とは比べものになりません。しかし、この研究の最終目標は生物進化のシミュレートだと私は考えています」

「シミュレート？」

「そうです。今までの進化の研究は現存する生物の形態や化石などの物的証拠からその道筋を予想するものでした。しかし、それで進化というものの本質がつかめたとは思いません。おそらく、これか

らもそうでしょう。進化の道筋を追い、生物が海から陸に進出した事実を突き止めても、それが何故、どのようにして起こったのかは謎のままです。その時、いかに生物の情報は組み変わったのか……それは、どの程度の割合で、どのようなものが生き残ったのか……どのような環境要因が働いたのか？」

「それをホムンクルスが解明できると？」

タカハラの声に熱がこもる。

「当初、ホムンクルスには単純な数値の『モノ』という生命……こちらの世界で言えば単細胞生物のようなものしかいませんでした。しかし数万世代を経た現在、ホムンクルスは大幅な成長を遂げています。現段階で最大勢力の『6』は当初の『モノ』を基準にすると六倍の正四面体構造を有しています。おわかりいただけますか？ここでは現実に進化が起きているのです」

タカハラが短く感嘆の声を上げる。やはり話のわかる人間と話した方が面白い。

「勿論、進化の全てを解明することは不可能でしょう。私の研究もまだ初期段階です。しかし、現在のホムンクルスのシステムを利用した次世代、更に高度な世代となれば、その精度は限りなく実在の生物に近づいていくと私は考えています。実際の生物のDNAデータを組み込むことができれば、その進化の過程を一本のフィルムを見るように再現できるかもしれません」

タカハラは大きく肯いた。

「更に、先程仰った『実用的な効果』ですが」

私は畳みかけるように話を続けた。

「現在数社の企業と協力して、ホムンクルスのランダムなシステムを利用したシミュレーションソフトを開発しています。経済や気象予測などの分野でもかなりの成果が期待できそうです。他にも様々な局面への柔軟な対応が不可欠となるセキュリティプログラムや人工知能など、今後の活用が期待される分野は多岐に渡ります」

「なるほど……素晴らしい研究です。まるでSFみたいです」

タカハラが熱心にメモを取る。

「花村君。そろそろ時間ではないのかね。それに記念パーティーだつてある」

それまで無言で隣に座っていたカジワラが退屈そうな声を上げる。よほど話し疲れたらしい。最初の頃は記者の都合さえ無視して延々話し続けていたくせに。

「いやあ、失礼しました。あまりにこちらの方……花村さんでしたっけ？　のお話が面白かったので」

微笑むタカハラは視線が、タイトスカートから伸びた私の脚に向けられる。

「それに、知的な美人と話ができるなんて私の仕事では滅多にないものですから。科学者と言ったらほとんどが偏屈なおっさんですね」

「まあ、ありがとうございます」

言うまでもなく私とカジワラの年齢が若い事に対する世辞だが、単純なカジワラはあっさり機嫌を直したようだ。自分はパーティーに行くから、君はこの人を研究室に案内してあげたらどうだと言い残し、上機嫌で部屋を出て行った。

私達は部屋に二人きりになった。タカハラは暫く部屋の様子を眺めていたが、ふと思いついたように話しかけてきた。

「えっと、君はパーティーには行かなくていいのかい？」

「教授はお祭り騒ぎが好きですからね」

私は軽く肩をすくめた。

「実はここに来る前に一つ聞いたことがあります。この研究に関してね」

唐突にタカハラは切り出した。

「どんなことですか？」

「この研究の指揮は教授のカジワラが行っているのではなく、実際には研究室の一人の学生が進めていると……」

ペンをこめかみに当て、何気ない口調を装って呟く。私の反応を

探っている。意外と油断のならない男だ。

「まあ。何処からそのようなお話を？」

私は少し驚いたような表情で訊き返した。

「それは仕事上の秘密ってやつです」

「記者の皆さんは楽な商売をしてらっしゃいますね。私達なら資料の確実性を示さなければ相手にもされませんのに」

タカハラは私の答えに苦笑した。

「では、もう一つ確実性のない話を」

タカハラは私から視線を動かす事なく話し続けた。

「しかもその学生というのは、これがまた凄い美人で、教授の愛人だとか」

「話がワイドショー的になってきましたね。科学雑誌の記者というのは、そのようなことまで取材しなければならいんですか？」

「いいえ、あくまで個人的な興味ですよ。仮に事実でも記事にはしません」

私はタカハラの視線を正面から見据えた。

「それで……私がその学生だと？」

タカハラは大袈裟に手を振り、とんでもないと答えた。

「ですが、少なくとも『物凄い美人』でしょう？」

「……お上手ですね」

私は少し馬鹿らしくなって答えた。

「貴方はそのような馬鹿げた話をなさる方ではないと思っていましたのに」

「確かに、馬鹿げた話ですね。決して表舞台には立たない天才……しかも美人の学生なんて。私も正直、ここに来るまでは嘘だと思っていましたよ。しかし、貴女にお会いして考えを改めました」

「何か根拠でも？」

「先程の話の中で『私の研究』と仰いましたよ？ えらく自信たっぷりだね。あとは記者の勘です」

即座に記憶を検索し、思い当たる部分を探る。

……見つけた。

確かに話が弾んだ時に、口を滑らせたような気がする。

まったく油断のならない男だ。私は苦笑した。

「貴方は記者よりも探偵に向いていそうですね」

タカハラは満足気に微笑んだ。

「小説家にはなろうと思ってますがね」

私達は場所を変えてインタビューの続きをする事にした。

私の部屋で……だ。

本人の話によると、大学時代は軽音楽サークルに所属してバンドを組んでいたらしい。多趣味なことに小説も書いていて、この仕事を続けながら面白い話を集めて小説にするのが夢だと言っていた。最近は一エターテイメント小説にも専門的な知識が要求される為、この仕事はうってつけなのだそうだ。

それから、今度の小説のヒロインは私をモデルにして書きたいとも。

これが彼の口説き文句らしい。

「本当にパーティーに出なくていいのかい？ その……君は教授の……」

「もう関係のない話よ。それに教授だって今日は私が邪魔なはずだわ。今頃取り巻きの女の子達相手に舞い上がってるだろうから」

「理性的な人だ」

タカハラはブランデーのグラスを傾けながら呟いた。

「そうでもないのよ」

私はタカハラ首に腕を回し、膝の上にまたがった。

「お酒くれる？」

タカハラはグラスを差し出した。無理な姿勢で口をつけ、唇の端からブランデーが零れる。タカハラはそれを唇で受け止めると、そのまま首筋にキスを続けた。

「しかし、もったいない話だ」

「何が？」

「君の研究だよ。せっかくの業績を他人に盗られていいのかい？」

「別に盗られたわけじゃないわ。私は表に出て目立つのが嫌いなだけ。カジワラは科学者としては何の実力もないけど、スポンサー集

めや宣伝は上手いわ。だから役割を分担してるのよ」

「だけど」

私はタカハラの唇にキスをした。

「私は今の状態が気に入ってる。騒ぎを起こして目立っても何もいいことはないわ。私はこのまま研究を続けられればいいの。それに有名になったら楽しみないでしょう？」

ブランデーを口に含み、タカハラの口の中に流し込む。

「……ね？」

タカハラは暫く唇を舐めて黙っていたが、やがて小さく笑い、その通りだと答えた。

それから暫く、私達は互いを愛撫することに耽った。

「そうだ、一つ聞きたい事があつたんだ」

悪くない男だが、少し話し過ぎる。

「後で聞くわ」

「昔から物忘れが激しいんだ。もうすぐしたら忘れるかも」

「……何なの？」

苛立ちを抑えて話を促す。

タカハラは妙なことを言った。

「知性って、何だと思う？」

「知性？」

「ほら、人間は唯一知性を持った動物だつて言うだろう？ あの知性って何なのかな？ 人間が芸術作品を作ったり、それに感動したりするのは動物的な本能とは違う。そういうのって何なのかな？」

「学習の一種ね。人間の脳は他の動物より余分な領域が多いから、生活に不必要な事でも覚えたりすることができるよう」

「じゃあ、人間の感情もプログラムされているのかな？」

「プログラムと言うより記憶の集積ね。人間は生まれた時から様々な自分以外の存在の行動パターンを大量に収集していくのよ。そしてそのパターンを分析したり、その中から有用な情報を抜き出したりして自分のものにしていくのよ。人間に育てられた者は人間の表



情をするけど、オオカミに育てられたならオオカミに近い表情をするはずよ」

「なるほど。知性っていうのは、情報の集積されたものか」

「そう、それを意識しないのは、それがあまりに自然に起こって複雑でランダムだから。歩く時に足の動きを意識しないようにね……満足した？」

ぼんやりとした頭で適当な理屈を並べていた私は、もうこれで話さなくていいだろうと再びタカハラに身体を預けた。今の私がしたいのは知的な会話ではなく、身体を使った会話なのだ。

しかし、タカハラは話を続けた。

「今日、ホムンクルスを見た時にこんなことを考えたんだ」

「……どんなことを？」

「あの中に存在している人工生命が進化の過程で学習機能を会得して、学習を続けていけば、人間のように誰かを愛する感情が芽生えるんだろうかってね」

「今のメモリーじゃ無理ね」

「もしもの話だよ。十分なメモリーがあつて、ホムンクルスが君の言う感情の学習過程を経ていけば……どうだろう？ 理論的には可能だろ？」

私は暖まった体の中が急速に冷めていくのを感じた。

「無理よ。人間じゃないものは愛することなんか覚えたりしない。そんな事は不可能よ」

「でも、さっきの君の理論だったら……」

「理論よりも常識よ。そんな事は絶対に起きないわ」

「そういう考え方は科学者としては良くないんじゃないか？」

私はタカハラを睨みつけた。

「そんなことは決して起きない。コンピューターが、人を愛そうとでも思わない限り」

「……大丈夫か？」

震えが止まらない。タカハラが異常に気づき、慌てて私の体を摩

る。

「大丈夫。でも体が冷えちゃったわ」

私は微笑んだ。

「もう一回、今度はちゃんと暖めてよ」

タカハラは真剣な表情で肯くと、私をベッドまで運んでくれた。こういう時、男は無口な方がいい。

私は不必要なことを考えず、満足して何度も絶頂へと達した。

楽しめばいいんだよ。この世界を不完全な体のまま楽しめばいい。傷が痛んでも、息が苦しくなっても……そんなことは忘れてしまえばいい。

この世界を楽しむんだ。いつか綻びが大きくなって、完全に壊れてしまふまでね。

アサギの言葉を思い出す。

あの頃に見えた水面は、更に遠くなっている気がする。

/

「なあ。今度、また会えないか？」

ベッドから起き上がり、タカハラは言った。

「研究で忙しい」

決まりきった断り文句。

「明後日、仲間内でパーティーがあるんだ。昔馴染みのろくでもない奴等さ」

「興味ないわ。それに眠い」

「そう言っなよ。ここの近くなんだ」

タカハラが教えたのは、私も行ったことがある大きな目のバーだった。偶然にも、あの朝食男と出会った場所だ。

「貴方のお喋りな口を塞いでくれるなら考えてもいいわ」

私はタカハラの腰に手を回しながら答えた。

「そうかい？ 本当に気の置けない奴等なんだよ」

私は何故タカハラが自分の仲間に私を会わせただがるのかと考えてみたが、単純に彼には子供っぽいところがあって、友情を重んじるからだろうという結論に達した。

実際これは正解で、タカハラは本当に仲間の事を信用していて、私を紹介したかっただけだった。

翌々日、私は意外な人物に紹介される事になる。

「先輩……私、こういう所は初めてです」

サオリが心細げに呟いた。

「大丈夫よ、私がいるでしょ？」

私達はタカハラが招待したパーティーに参加する為、会場となる建物の前に来ていた。薄暗いコンクリートの階段が地下へと続き、分厚そうな扉の奥から演奏中のバンドの音楽が響いてくる。

「貴女に昔のディスコ全盛期を見せてあげたいわ。こんなもの、あれに比べれば火葬場みたいなかさよ」

「へえ、その頃はいくつだい？」

同行していたタカハラが訊ねた。

「高校生くらい。でも、大人っぽくしてたからわからなかったかもね」

まだ若かったアサギに連れられて、遠く離れた街に遊びに行っていた時代のことを思い出す。タカハラはそれは見たかったなあ、と呟いた。

「でも……私、こういう所は怖くって」

サオリはまるで地獄の底にでも連れて行かれるかのような顔で言った。

「怖くないよ。みんな大学時代のバンド仲間だ。気のいい奴等だよ？」

「サオリちゃん、何事も経験よ。最初は怖くても体験してみればうまくできるものよ。さっきだって最初はあんなに嫌がってたのに途中からは楽しんでたじゃない？」

私の言葉に先程の行為を思い出したらしく、サオリが頬を赤らめる。私と彼女、タカハラの三人はパーティーまでに時間があつたので、部屋で少し楽しんでたのだ。正確には私とタカハラの二人でサオリを玩具にしていたのだけれど。

サオリに対する私の『教育』はかなりの成果を上げていた。元々家庭や社会から押しつけられた価値観しか持っていなかった彼女は、それを壊されたときに置き換わるはずの自分自身の価値観を持っていなかった。だから彼女は、再び私という他人に自分の価値観を与えてもらうことを選択してしまったのだ。私は今まで彼女が属していた社会のルールがいかにも欺瞞に満ちたものだったかを教え込み、その後に好き勝手な……私の都合のいいように……倫理をプログラムした。

おそらく彼女は、生まれて初めて家庭という鳥籠から逃れ、自由に羽ばたく強さと知恵を得たと思っっているだろう。だが実際には、彼女は私という鳥籠へと飛び込んだだけだ。

サオリが恥ずかしそうに目を逸らし、私の腕にしがみつく。

「貴女はいい子だわ」

私の言葉に、サオリはおずおずと顔を上げ、先生に誉められた小さな子供のように微笑んだ。

「君はいい後輩を持つてるね」

タカハラが耳元で囁く。

「いいでしょう？ 今度、貸してあげるわ」

「遠慮しとくよ。後が怖い」

「賢明ね」

私は微笑み、バーの扉を開けた。

パーティー会場となるバー『ヨナ・ホエール』は大学の近くというところもあり、飲み会で私も何度か足を運んだことがある。中には半円形に広がったホールと、テーブルが並ぶラウンジがある。ホールには小形のステージがあり、ジャズバンドが演奏しているのがこの店の特徴だ。

天井には荒れ狂う大海原の描かれたステンドグラスが一面に埋め込まれている。波間に揉まれる転覆寸前の船と、その上空に十字に輝く星。つまり、ここは海の底というわけだ。色硝子を通して青く染まった光が、店内を幻想的に彩っている。

席を探して歩いていると、後ろから私の肩を叩く者があった。振り返ると、いつかの朝食男が立っていた。相変わらずのＴシャツ姿だ。

「また会うとは奇遇だな」

「この前はごめんなさいね。今度、夕食でもご馳走してくれない？」

「ああ、一晩中でもいいぜ」

朝食男は無精ひげを撫でながら答えた。

「今日は貸切りのはずよ。貴方も呼ばれたの？」

「俺のとこのバンドが演奏するんだよ。もうすぐしたら始めるから聴いてくれよ？」

朝食男は軽く手を挙げると近くにいたタカハラと二・三言葉を交わし、店の奥に消えていった。

「なんだ。あいつと知り合いだったのか？」

タカハラが意外そうな顔を向ける。

「貴方こそ知ってるの？」

「友人のバンドのドラマーだよ。……で、君との関係は？」

「貴方達は兄弟なのよ」

私は笑いを堪えながら答えた。タカハラは暫くキョトンとしていたが、意味を解すとウンザリした顔をした。

「世界中の人達と兄弟になれそうだ」

「いいことじゃない」

「今は俺だけだろうね？」

「私は私、誰のものでもないのよ」

私は軽く笑って受け流し、賑わい始めたバーの中を見渡した。

「先輩は……沢山の人と知り合いでいいですね」

サオリが呟いた。

「私なんか……先輩とかタヤマさん以外には大学で話せる人も少ないし……」

「それは貴女がまだ人との交流に慣れていないだけよ。貴女に必要な

なのは考えることよりも体験すること」

「そう……でしょうか？」

「そうなのよ。貴女だって、そのうち unnecessary 感覚を捨てることができるわ」

私はサオリの肩を抱いてゆっくりと言い聞かせた。

「いい？ 夜は長い。楽しむのよ、この嘘だらけの世界をね」

バー専属のジャズバンドの演奏が終わると、店内はにわかにざわつき始めた。

ステージの照明が落ち、薄暗い中、朝食男のバンドがステージの上に姿を現す。朝食男はシンプルなシャツ姿だが、ヴォーカルの痩せた男は黒革の衣装で全身を固め、脱色した長い髪をたなびかせている。まるで海に沈んだ宝を漁りに来た海賊船長だ。

メンバー全員が所定の位置につく。と、金色のスポットライトがステージ上を明るく照らし出し、店内は拍手と喝采に包まれた。

このバンドはタカハラの大学で結成されたバンドであり、今はインディーズで活動しているらしい。バーの雰囲気にとぐわなない恰好のバンドであるにも関わらず、友好的な拍手で迎えられたのはその為だ。ヴォーカルの男は崩れきった表情で観客に手を振り、気取った口調で喋っていたが、朝食男がドラムを数回叩くと思いい出したように腰に下げたギターを構え、メンバーに向けて手を振った。

しんと静まり返ったステージ上に、ドラムのスティックがたてる小さな音だけが響く。

次の瞬間。

ギターから流れ出た凄まじい音の濁流がバー全体を包み込み、地響きのようなドラムの轟音が爆発した。その凄まじい衝撃に、カウンターを磨いていたウェイターが転倒し、棚の硝子に亀裂が走る。

天井のステンドグラスがビリビリと震えたのが聞こえた気がした。引き吊ったようなギターの音色が奇妙なほどリズムカルに響き、悲鳴にも似た奇声でヴォーカルが絶叫する。ドラムは機械のような正確さでリズムのループを作り、テーブルの上ではグラスがダンスを踊った。

「……うるさい」

私は一言で評価を下した。隣ではサオリが大きく目を見開いたま



ま凍りついている。いささかサオリには刺激が強すぎたかもしれない。

……と。

サオリの口が次の形に動いた。

「カ、カッコイイ……」

「だろう？ このバンド、結構評価が高いんだぜ？」

声は聞こえなかっただろうが、私と同様に意を解したタカハラが得意げに言う。

「ギターにブルースが入っててカッコイイですね！ ジミー・ヘンドリックスみたいです！ それに凄いドラム！」

サオリが瞳を輝かせる。忘れていたが、サオリはロックファンだ。女子高時代からレコードを集め、一人で聞いていたらしい。

私は音楽には疎いので、このことに関して話をすることはなかったが。

「特にあのヴォーカルの人、カッコイイですね！」

「ああ、オカダかい？ あいつとドラムの奴がああのバンドを動かしているんだ。ただ、ちよつと神経質で気が弱いところがあるからなあ」

でもいい奴なんだよ？ とタカハラは付け加えた。

私は完全に二人の話から取り残されたので、仕方なくサオリがいというバンドの演奏を見つめた。先程までの落ち着いた雰囲気は跡形もなく消し飛び、ステージの前にいる者は総立ちで拳を突き上げている。

と、人込みの中、私の瞳に鮮やかな青が飛び込んできた。

少女だ。

活発そうな印象の少女が揺らす、サファイアのように青く透き通った髪。演奏に合わせて高く飛び跳ねるたび、青い光が周囲に舞い散る。

岩礁の隙間を泳ぐ魚のように少女の髪は煌めき、そして人込みの中に消えていった。

バンドの演奏は一時間ほど続いた。

……ノンストップで。

ヴォーカルのオカダは最後に持っていたギターをそこら中に叩きつけて壊し、絶叫と共にステージ上に倒れて担架で運ばれていった。その後、先程のジャズバンドが戻ってきて、滅茶苦茶に荒らされたステージの上で立ち尽くしているのが見えた。

しばらくの後。

「よお、いい演奏だったぜ？」

タカハラが声をかけると、朝食男に肩を借りて歩いていたオカダが振り返った。

「よくねえよ……」

先程までの威勢の良さは何処に行ったのか、沈痛な面持ちで答える。倒れた時に切ったのか、それとも何度か客席に飛び込んだ時の傷か、額に張られた大きな絆創膏が痛々しい。

「俺さあ……これ以上バンドをやっていく自信ねえよ。もう解散しようかって思ってるんだ」

「あんなに受けてたじゃないか」

「理解してくれるのはお前達だけだよ。他じゃ見向きもされない」

「そりやお前がそう思ってるだけだよ」

朝食男が優しく声をかけ、

「こいつ、ライブが終わるところなんだよ」

タカハラが私に小さく耳打ちする。

「これからは、バンドじゃなくてクラブだよ。この店みたいに洒落た店を開くんだよ」

オカダがしょぼくれた声で言った。

「俺が経営して、お前がDJになって皿を回すんだよ」

「わかったわかった」

朝食男はオカダの背中を叩くと、進むように促した。

「じゃあな、俺、もう少しこいつを休ませてくるわ」

「ああ、気を落とすなよ」

私に一瞬ウインクをして、朝食男がオカダを連れて歩き出す。途端、サオリがいきなり立ち上がり、テーブルに思いっきり両手を叩きつけた。

「やめないでください！ バンド、やめるなんて言わないでください！」

テーブルの上からグラスが落ち、派手な金属音を立てて床を転がる。

私は驚いた。彼女の今迄の行動パターンからは到底考えられない行動に。

オカダはサオリの声に振り返った。そして、暫くサオリを眺めていたが、小さく微笑んでまた歩き始めた。

「待つてください！」

サオリは強引にテーブルの上を乗り越え、通路に出てオカダの後を追いかけていった。

「……意外なことがあるもんだな」

タカハラが呟いた。

「ほんの小さな数値が全体の結果を大きく変えることはよくあることよ」

サオリの行動を予想できなかったことは、私にとって少しショックだった。些細なことだと思っていた要因が、ある時突然表面に現れて大きな波紋を起こす。そんなこともあるのだと改めて認識した。「どうやら、世界は僕達が思っているよりも複雑でドラマチックらしいね」

タカハラは落ちたグラスを拾い上げ、乾杯でもするように私に向けて揺らしてみせた。

ステージの掃除が終わり、ジャズバンドが落ち着いたダンスナンバーを演奏し始めた。タカハラが私をホールへと誘う。

私が立ち上がりかけた時、サオリが情けない顔で戻ってきた。

「先輩……さつきはすいませんでした。もしかしてグラスが倒れて濡れちゃったりとか、怪我したりしてないですか？」

「別に」

少し不愛想かもしれない。そう思って、私は表情を改めた。いつも通りに振る舞い、奇妙な行動をした彼女に関するデータを収集すべきだ。

サオリは今までの様子に戻っていた。先程見せた激しい感情は消え失せ、恥ずかしそうに指を絡めている。サオリは上目遣いに私を見ると、小さな声で訊ねた。

「私、先輩の言う通り、もっと男の人……でも、別に誰でもって訳じゃないんですけど……あ、でも、さつきのヴォーカルの人って訳でもないんですよ！ そうじゃなくって」

「何が言いたいのか？」

サオリは急に顔を上げた。

「男の人と仲良くなるにはどんなふうに喋ればいいんでしょうか？ いつになく真剣な眼差しが、動揺する私の心を貫く。」

……これが、本当にあのサオリだろうか？

「そうね、まずは挨拶ね。こんにちはどうも、こんばんわでも何でもいいわ」

適当な言葉が口をついて出た。

「それから、相手が興味を持っていることを探るの。自分も知っていること、興味のあることなら更にいいわ」

サオリが真剣に頷く。

「大切なのは、自分と相手の間にコミュニケーションの回路を作ること。相手に話して楽しい相手だと思わせることが大事なの。人間は臆病で不安に満ちているからね」

「でも。もし、それが上手くいかなかったら？」

サオリの表情が見る間に泣きそうな子供のようになる。私は不快感を押し殺し、適当な言葉に換えて吐き出した。

「それなら、強引にでも相手の懐に飛び込むことね。そうね……キ

スでもしたら？」

「キス……ですか？」

「男だったら嫌な顔はしないわよ」

引き攣った顔のサオリを残し、私はタカハラの手を取ってその場を離れた。自分でも無茶苦茶な答えだと思う。

「可愛い後輩が取られたから怒ってるね？」

タカハラがニヤニヤしながら話しかけてきた。

「違うわよ」

「君は意外と感情が表に出る」

平手でタカハラの頬を叩いた。タカハラはあまり驚いたようではなかった。

「悪い。機嫌直してくれ」

「……気分が悪い。帰るわ」

「そう言わずにさあ」

私の機嫌を直そうとしていたタカハラは、ふと何かに気づいて顔を動かし……途端に表情を和らげて声を上げた。

「なんだ、健児。お前も来たのか！」

物悲しいピアノの旋律が鳴り響き、音楽が始まった。

空気の波が頬を掠め、振動が身体の内側を通り抜けて闇の中へと消えていく。私は自分の身体が音の粒子に貫かれることに透明になり、消えていくような気がした。

「健児」

遙かな奥底で生まれた言葉は、長い時間をかけて水面へと浮かび上がり、音となった。

「……アヤナ」

私の発した音を聴いて、そこに立った男……健児も音を発した。昔と変わらない、少し寂しそうな声。

彼の印象は九年前とはかなり異なっていた。

背は高くなり、肩幅も随分としっかりしている。前髪は短く切り揃えられ、その奥には唯一昔と変わらず鋭くて……寂しそうな目が輝いていた。

どうして私は彼が健児だとわかったのだろうか？ その理由を明確に述べることはできない。ただ、私にはそこに健児がいることがわかった。タカハラが彼の名前を呼ぶ前から、彼の存在を確信すらしていた。

夢の中の異常な光景を見慣れたもののように感じ、次に起きる事態を予測してみせるように。私には『健児がいる』ことがわかったのだ。

健児がいる。

……あの健児が。

健児は私に近づき、右手を差し伸べた。

「やめて……触らないで」

私の髪に触れようとした手が止まる。健児は少し躊躇った後、小さく笑った。

「君は変わっていないね」

声を聞くだけで胸が痛い。何故、こんなに痛いのだろうか？

「少し座らないか？ 話したいことが沢山あるんだ」

「おい、健児。彼女と知り合いか？」

私達の隣で呆気に取りられていたタカハラが、ようやく話を切り込む隙間を見つける。

「ああ……ちよつとね」

「色々ありそうな『ちよつと』だな」

タカハラは暫く考え込んでいたが、彼なりに事態の深刻さを量つたらしい。

「後で訳を教えるよ？」

「わかつてる」

健児は短い言葉に敬意と感謝の気持ちを込めて答えた。

「行こうか？ アヤナ」

ここから逃げ出したい。

恐怖とも不安ともつかない感情が這い上がってきた。

一つ、また一つ。

歩みを進めるごとに、私の中から何かが抜け落ちていく。私を支えていた何かが抜け落ちていく。私の中の時間が……巻き戻っていく。

死刑囚のような足取りで進んでいる自分の姿を、私は客観的に眺めることができた。

そして。

健児と席についた時、私は九年前に戻っていた。大人へと成長した健児の前に座ったのは、世界とのずれに怯え震えている……ただの子供だった。

「昔のことについて謝るよ。アヤナ。あの時は随分と君に酷いことをしたと思ってる」

健児はテーブルの上で両手を組み、話しかけてきた。

「君の事情も考えずに、無理矢理自分の感情を押しつけた。大人気ない行為だったと思ってる。ただ、これだけはわかってほしい。あの時、僕は君のことが好きだった。それは本当だし、決して傷つける気はなかった」

違う。傷つけたのは私の方だ。

私はそう伝えたかった。しかし、言葉は出なかった。あらゆる感情と言葉のコントロールは失われ、身につけたはずの技術は一つとして思い出せなかった。こんな時は何を言えばいいんだろう。必要な言葉は？ 作るべき表情は？

「怒っているのかい？」

健児が悲しそうな瞳で私を見た。反射的に首を横に振る。まるで痙攣したロボットのようにな。

何か言わなければ。

こんな時の為に、私は今まで人間の真似をしようとしてきたんじゃないのか？

私の傍らに誰かが立ち、頭の中に声が響いてきた。

勝ち誇ったような女の声。

『まずは挨拶でしょう？ アヤナちゃん』

……そう、挨拶だ。

「こ、こんばんわ」

健児は戸惑ったようだったが、再び優しい目をした。

「そうだね。何年も会っていないのに馴れ馴れしく触れようとして悪かったよ」

健児は照れたように笑うと、一息ついて言った。

「こんばんわ、アヤナ。君とまた会えて嬉しいよ」



第一印象はともかく、健児の雰囲気は昔とあまり変わっていないかった。目の輝きも、よく変わる表情も。それらはその純度を奇跡的に保ちながら、かつて垣間見えた脆さを消していた。

彼は九年前と変わらず繊細で……強くなっていた。

ここから逃げ出してしまいたい。

だが、声が私を束縛する。

『ほらほら、アヤナちゃん？ 次は何をするんだっけ？』

「君と別れてから色々あったよ」

健児はテーブルの上の一点を見つめながら呟いた。

おそらくは、こことは違う時間の点を。

「君は知らないだろうけど、あの後すぐに親父の会社が潰れてね。すっかり無一文になってしまったんだ。親父は死んだよ。保険金を残してね……馬鹿な人だ」

健児は複雑な笑みを浮かべた。それはとても奇妙な笑みで、たった一つの表情の中に多くの相反する感情が込められているように見えた。

「それで僕はお役御免になって世の中に放り出されたってわけさ。でも何とか生きていくことはできた。多くの人と知り合えたし、助けてくれる人もいた。生きていく技術を教えてくれる人もいたし、共に夢を見る仲間もできた。生活は辛かったけど、得られるものの価値を知ることができたよ。みんな、それまで知らずにいたことばかりだった」

健児は照れたように微笑んだ。

「実は僕は今、駆け出しのカメラマンなんだ。仕事は少ないけど、評価してくれる人もいる。タカハラみたいに雑誌の仕事を回してくれる奴もいる。ありがたいことだよ」

「多くのものを、得たのね」

私は健児の見つめているものを探したかったが、それは私には見

つけられなかった。

そして私は、改めてあれから九年の歳月が流れたのだと自覚した。  
「全てを失ったからね」

「私は失ってばかりだわ」

私は呟いた。

「あれから九年たったのね……まるで昨日のことのように思えるわ」  
「それは僕も同じだよ」

「私のこの九年間は何だったのかしら」

「立派な九年間じゃないか。タカハラから名前を聞いて、すぐに君だとわかったよ。君はもう立派な科学者だ。駆け出しのカメラマンとは訳が違う」

「……………」

「実は今日もタカハラから話を聞いて迷ったんだ。今更君に会っても、もう僕のことなんか覚えていないんじゃないかってね」

健児は言った。

「でも、一目君に会いたかった。伝えたい言葉もあった。君の成功を心から嬉しく思う。この九年間、君のことを忘れたことはなかった」

「私も貴方のことは忘れていないわ。……いいえ、忘れられなかったの」

「ありがとう」

健児は微笑んだ。しかし、私の言葉の真意には気づかなかった。

「踊らないか？」

健児はホールの方を見ながら言った。

「あまり上手くないんだけどね」

「構わないわ。私も踊れないし……」

健児が席を立ち、私に手を差し伸べる。

ホールに向かいながら、私の全ての感覚は彼が握った手に集中していた。健児が今ここにいて、私の手を握っている。その事実が改めて私の中で構成され、意味を成した。

……整理が必要だ。

意味を整理し、対策を見つけたさなくてはいけない。この事態を把握し、私自身の感情を制御する必要がある。

私が何を望んでいるのかを、見つけ出す為に。

『そんなこともわからないの?』

わからない、わからない……わからないことばかりだ。

私がぼんやりとしていたんだろう。

不意に健児が私を抱き寄せ、フロアの中央に進み出た。視界が回転し、目の前に健児の肉体が迫る。こんな温もりだっただろうか？ 匂いも少し違うような気がする。私は健児の体にしがみつき、私の記憶にある温もりと匂いを探そうとした。

「運命を信じるかい？ アヤナ」

「信じないわ」

「僕は世界には不思議な力が働いているように思う。僕達は九年前に出会った……普通だったそれだけの、お互いに忘れてしまうようなことだ。でも、僕らはお互いにお互いを忘れることなく再び巡り会うことができた」

「……そうね」

私は健児との距離を……胸が張り裂けそうなほどに遥かな九年という距離を少しでも縮めようと、きつく健児の服を握り締めた。

「この九年間の行動のどれを抜いても、こうして君と再会することはできなかっただろう。今の仕事を始めて、タカハラと知り合って、そして彼から君の話を聞くことができた。本当に吃驚するくらいの偶然だよ。きっと、この九年間の行動の全てがこの瞬間に向かつて流れていたんだ。そう思わないかい？ もしもあの時あの電車に乗りそこねていたら、君と会えなかったかもしれない。あの空を眺めていたのが、君と出会う為の重要な要素だったのかもしれない」

彼は楽しそうに言った。

「これは、まるでフィリップ・D・ディック並のSFだよ」

健児のあまりに真剣な物言いに、私は少し吹き出した。胸の奥が暖かくなり、全身の緊張が解ける。

「相変わらず馬鹿なことばかり考えてるのね」

「こればかりは九年くらいじゃ変わらないよ」

健児は微笑んだ。

「……馬鹿」

私は彼の体にもたれこんだ。少し遅くなった体は私を受入れ、私達の表面はパズルのピースのように合わさった。息を吸い込むと若草の匂いがした。

……なんだ、ちつとも変わっていないじゃないか。

顔を上げると涙で滲んだ水面の向こうに健児の顔が見えた。

「貴方に会いたかったわ」

「僕もだ」

「貴方には謝らなければならないことがあるから」

「あの時は……」

健児の口調が微かに淀む。

「なんて言えはいいんだろう。初めて会った時から君とは何か繋がりを感じていた。僕の心の中にある何かを君を求めていたんだ。それが何なのか言葉にすることはできないけど……確かにそれは感じる事ができたんだ。でも、昔の僕は、ちゃんと君にそれを伝える事ができなかった。だから僕は、僕のほうこそ君に謝らなければならない」

違う。拒絶したのは私の方だ。

「健児……私達、もう一度やりなおせないかしら？」

いささかありふれた言葉を私は選び出した。言葉のアクセント、響き、緩急、そのすべてに感情を込めて、ゆっくりと。

人間らしく、人間らしく……想いを伝えるのだ。

「完全に昔には戻れないよ」

何処か寂しげな瞳が私を見つめた。それは彼の方が冷静に過去との隔たりを自覚していたからであり、私の真意を知らなかったからだ。

だが、私は逆上した。

私は彼との関係を修復したかった。でも、お互いに相手のことを必要とする強さに違いが生じていることに気づいていなかった。

『話すの？』

声が訊ねる。

そうしなければ……何も変わらない。

「貴方との関係をなくしてしまったことをとても後悔しているわ」  
私は話し始めた。

「私は貴方との関係をもう一度形成して、構築して、維持して、管理して、将来的に続けていきたいと思っているの。私は貴方との関係を重要なことだと思っているの。私の言っていることわかる？言葉は通じてる？」

「ああ……ちゃんと、わかるよ」  
健児が大きく頷く。

私は彼を離すまいと、必死にしがみつकिながら言葉を選んだ。

「私は誰とも関係を持ちたくなかったわ。だって、それは私にとってマイナスの影響が多いから、経済的で有益なものとはならなかったからよ。わかる？ 私は誰かと一緒にいるだけで嫌な気分がするの、誰かが側にいるだけで私は滅茶苦茶になっちゃうのよ。マイナスが多すぎるの！ だから私は誰とも関係を持ちたくなかったの。当たり前の話よね？ 理論的な行動だわ……だって、誰も彼もが私を傷つける！ そうでしょう？ ……ねえ、私の言っていることわかる？ 私の言葉は理解できる？」

いつしか私の言葉は切り刻まれた破片のように、少しも組み合わせることなくバラバラになって零れ始めていた。

健児の穏やかな表情が、徐々に戸惑いの色に染まっていく。

「でも……でも！ 貴方は違ったの、違ったのよ！ 貴方だけは違うの！ 貴方だけがマイナスをプラスに変えるの！ ……やっつと、そのことに気がついたのよ。九年も経ってやっとわかったの。笑っちゃう話だわ。そう思わない？」

私は声を上げて笑った。自分でもどうして笑っているのかわから

ない。途中からは笑っているのか泣いているのかさえわからなくなった。

想いを伝えなければ。

……だけど、伝えるってどうすればいいんだろう？

「アヤナ……大丈夫かい？」

「健児！ 私には貴方が必要なのよ。必要で必要で必要で……どうしようもなく必要なの。貴方との関係が私には必要なのよ。わかる？ 私、とっても恐いのよ。誰かと関係を持つだなんて考えただけでゾツとする話だわ。誰かが自分の心の中に入ってくるなんて考えただけでゾツとする。でも、健児、貴方とだったら大丈夫。私は痛みに耐えられる、痛みを克服できるわ。わかる？ 健児……貴方だから痛みに耐えられるの」

「アヤナ？」

「健児。貴方にだったら私は何をされても構わないわ」

私は思い知った。

今まで私は、誰かに何かを伝える為に話したことなんてなかったんだ。

「貴方にだったら殺されたって構わないの」

「ごめん、アヤナ。君の言っていることがよくわからない。もう少し落ち着いて、ゆっくり話してくれないかな？ 僕の頭が悪いだけなのかもしれないけれど、君が僕に何を言いたいのがよくわからないんだ」

「私にだって自分が何を伝えたいのかわからないわ。でも、でも貴方に伝えたいことがあるのはわかってるの。私は……私は……私は健児に抱きついた。彼の存在だけが、私の混乱した感覚の中で唯一確かなものだった。」

「離れないで健児……貴方がいなくなったら私は滅茶苦茶になってしまう」

「大丈夫だよ、アヤナ。僕はここにいるから」

健児の声は、酷く遠くから響いてくるようだった。



「健児？」

振り向くと、鮮やかな青い髪をした綺麗な少女が立っていた。

……あの少女だ。

私は先程見かけた青い髪は彼女のものだと確信した。

少女は臍の部分が丸見えなＴシャツと太ももの付け根で切られた短いジーンズを身につけ、だぶついた革の上着を羽織っていた。顔立ちのあどけなさとは対照的に豊かな身体の線が、無造作な服装によって強調されている。

しかし、彼女から受ける印象は生々しい女のそれではなく、非常に精巧な人形……人工的に作られた妖精のようだった。水晶のような瞳が軽くカールしている髪の間隙から私を覗き込む。そこには唯一、人工的でない生身の感情が浮かんでいた。

「その人、誰？」

外見に似合わず乱暴な口調で少女が訊ねる。

「ああ、この人は花村アヤナさん。昔の……友人だよ」

「ふうん……」

少女が中途半端な言葉を返す。

健児は彼女の言わんとすることを察し、少し困ったように微笑んだ。

私は悟った。不満と嫉妬を隠そうともしない素直で純真な少女、それに向けられた健児の表情……誰よりも優しく、深みのある眼差し。

信頼と、理解を。

健児は私の身体を離すと、少女の手を取って私に向き直った。

「彼女は真珠。僕の婚約者だよ。アヤナ」

タカハラが一人の女と奇妙なステップで踊りながら近づいてきた。

親しい間柄なのだろう、ふざけた様子のタカハラに苦笑しながら踊りにつき合っている。

タカハラは健児の側に少女……真珠の姿を見つけると、驚いた様子で話しかけた。

「なんだ、真珠ちゃんも来てたのかい？ この前の写真集見たぜ、あれは良かった。色っぽかったし。健児もああいうのもっと撮ればいいのになあ。こう、そそるやつをさ？」

「ありがと、タカハラさん」

真珠は私から視線を逸らすことなく呟いた。タカハラも彼女の視線を追って私を見た。

「なんか、厄介なことになってないかい？」

「婚約……者？」

馬鹿げた質問だ。頭は健児に紹介される前から二人の関係を正しく理解し、その後の展開すら予測してしまっている。しかし私の心と体はそれについていくことができず、為す術もなく予測されたレールの上を滑り始めていた。

それはまるで、結末のわかっている事故フィルムをスローモーションで眺めているようだった。

「僕らは来年、結婚する予定なんだ。彼女は僕がお世話になった人の娘さんで……」

「婚約者？」

私はもう一度繰り返した。

「そうだよ」

「……婚約者……」

「？」

健児は小さく首を傾げた。

「ああ、まだ早いかなとは思ってたんだけどね。僕も生活は安定してないし……でも、やっぱり、けじめはつけないとね」

健児は穏やかに微笑んだ。

「だから、君に会えて良かった。君とのことはずっと気にしてたから不安だったんだよ。でも、勇気を出して良かった。君に謝ることができたし……勝手な言い方かもしれないけどね」

「……私は、今の貴方にとって……どんな存在なの？」

「君は……真珠を別にすれば、僕が今までに出会った中で最も素晴らしい女性だ」

健児は暫く口を噤んでから問いに答えた。彼が丹念に言葉を選んだことがわかった。

「君と出会ったのは、僕が一番迷っていた時期だった。あの時、僕が道を踏み違えたり、人生を捨てたりしなかったのは君がいてくれたからだと思う。正直、あまり上手くいった関係だったとは思わないけど……今でもあの時の行動を恥ずかしく思うし、君には申し訳ないことをしたけれど、だけど僕は君に感謝してる。本当に感謝してるんだ。そして僕は君のことを尊敬している。君は素晴らしい人だと思う」

健児は真摯な眼差しで私を見つめた。

「君とはもう一度、関係を築き直したいと思う。僕が言えることじゃないかもしれないけれど、僕は君という人ともう一度、関係をやり直したいんだ。あの時のように感情に任せた関係じゃなくて、きちんとした関係をね」

「健児。何があったかは知らないけど、女を口説く時の台詞じゃないな」

タカハラが踊りながら口を挟んだ。

「俺ならもっとロマンチックな言葉を使うぜ？」

「貴方の頭の中はいやらしいことで一杯ね。新塚君はもっと理性的な男女の関係の話をしているのよ」

タカハラと共にいる女が言った。

「男女の間の友情。いいじゃない？」

「理性的ねえ。俺は人間は理性的なものじゃないと思うぜ？ 男なんて下半身で動くもの……あ、真珠ちゃん！ 健児だけは別！ こ

いつはかなりの変わり者だからね」

「友情だなんてとんでもないよ」

タカハラの冗談めかしたフオーローに苦笑いを返し、健児は続けた。  
「僕には友人にもらうだけの資格もないよ。でも、そうしてもらえるなら本当に嬉しい。ねえアヤナ、僕らはもう一度、初めから関係をやり直せないだろうか？」

「勿論、九年前に戻るはずはないけどね」

何を言えばいい？

何を伝えればいい？

何をすればいいというのだろうか？

いや、答えはわかっている。私は『営業用』の笑顔を浮かべ、右手を差し出しながらこう言えばいい。

心配しないで、貴方のことを恨んでなんていないわ。いつまでも過去にこだわらず新しくやり直しましょう。私も貴方が成功していることを嬉しく思う。それに素敵な婚約者ね、とても可愛らしくてお似合いだわ。結婚式には必ず招待してね。

私の体はそれを実行することを拒絶した。神経は寸断され、精神と体は切り離された。私はただ、糸の切れた操り人形のように立っていることしかできなかった。

『ほらほら、アヤナちゃん。ぼんやりしてちゃダメでしょう？』  
声がした。

『何も言わないと変だと思われるわよ？ ほらほら、早く人間の振りをしなくちゃいけないわ。そうしないと人間じゃないって皆にばれちゃうわよ？ ばれちゃうわよ？ ばれちゃうわよ？ ばれちゃうわよ？ ……ほら、早く何かしないと』

わかってる。

でも、何をすればいいんだろう？

『……キスでもしたら？』

声はけたたましい笑い声と共に周囲に響き渡った。

青い風が煌めく。

気がついたとき、真珠が健児に抱きついて頬にキスをしていた。

「こら、何するんだよ真珠」

健児が慌てて抱き止める。真珠は健児の言葉には耳を貸さず、彼の体に両腕を回したまま私を睨みつけた。

「ねえ、健児は私のこと好きよね？」

「いきなりどうしたんだ？」

「ちゃんと答えて」

「勿論、愛してるよ」

健児は照れ臭そうに私を一瞥すると、軽く彼女の背を叩いてこれでいいかと訊ねた。

「うん。それでいい」

真珠が健児に抱きつき、わずかに顔を動かして私を見る。

そこには恐ろしいほどに冷たく、美しい笑みが浮かべられていた。

『あらあら。彼女はみーんなお見通しのようね？』  
声。

「黙れ！」

声が出てしまったらしい。その場にいた全員の視線が私に集中した。

「どうしたの？」

「……何でもない」

私は一刻も早くこの場から立ち去ることを決意した。健児から離れるのだ。今の私には考える時間が必要だ。

「健児。今日は貴方と会えて嬉しかったわ。でも、悪いんだけど今日は私、用事があることを思い出したの。だから私、帰らなくちゃいけない」

「そうなのか。残念だな。また会えるかな？」

「連絡先はタカハラに聞けばわかるわ。でも私、急に出張が入るかもしれない……から」

私は少しずつあとずさった。

「また会いたい。君の話も聞きたいし」

「……来ないで」

近づいてきた健児から目を逸らし、私は叫んだ。

「私に近寄らないで。私に触れないで……私にこれ以上、関わらないで！」

次の瞬間、私はフロアの出口に向かって走り出していた。

色々な人間にぶつかった。大勢の人間が私には理解できない言葉で話をしていた。私は蜘蛛の巣のように張り巡らされた人間の『関係』の中を走った。誰かの傍らを走り抜ける度、破れた針金のように『関係』が私を傷つける。

どうして、こんなに人間がいるんだろう？ 一体何を話しているんだろう？ 走りながら考えた。しかし、私には彼等の言葉はわからなかった。

誰かが私の腕をつかんだ。

「先輩！」

我に返るとサオリが目の前にいた。彼女は頬を上気させ、目を輝かせていた。

「先輩、こんな所にいたんですか。探したんですよ？」

「……あ……うん」

彼女は私のたどたどしい返事には気づかず、楽し気に話し始めた。

「私、先輩にお礼を言わなくちゃ。本当に先輩の言う通りです」

「……何が？」

「勇気を持って自分から飛び込んでいけば人は答えてくれるんですね。私、今までなんて臆病だったんだろ！」

「話が……よくわからないわ」

サオリがはにかみ、誰かに向かって手を振る。顔を向けると、少し離れた席で、あのオカダとかいう男が締まりのない表情で手を振

り返していた。隣の席では朝食男が苦笑いを浮かべている。

「彼に……何を？」

「先輩に言われた通りのことです」

サオリは頬を赤らめた。

「私、これからはもつと人と接して生きていきたいと思います。私はこれまで結局、自分一人の中に閉じこもっていたんですね。でも、そんなのはもう嫌です。これからのもつといういろいろな人と接したい、もつと広い世界を見たいです。私、あの人と一緒ならそれができるような気がします」

「……………」

サオリは嬉しそうに瞳を輝かせて言った。

「ありがとうございます、先輩。先輩は本当に素敵な人です。私も先輩のように生きていきたいです」

「……私はそんな人間じゃない」

「え？」

私はサオリの肩に手をやって呟いた。

「私はそんな人間じゃないの」

そして私はサオリを押しやって歩き出した。

「先輩？」

後ろからサオリの声がした。

「先輩、何処に行くんですか？」

「わからないわ」

「え、あの……先輩？」

私は振り向いた。

「サオリちゃん。貴女と会えて良かったわ」

もしかしたら私は微笑んでいたのかもしれない。

サオリは少し戸惑っていたようだが、やがて幼女のようにあどけない笑みを浮かべると、私もです、と答えた。

「明日……研究室で会いましょう。ホムンクルスが待ってるわ」

「はい！」



サオリは幸せそうに手を振り、彼女を待っている者の方へと走って行った。

そうだ。私には研究がある。

明日からはもっと研究に没頭しよう。

それでいいじゃないか。

地上に出ると、夏の夜空が出迎えてくれた。火照った肌に夜の風が心地よい。

私は幾分落ち着きを取り戻すことができた。

そうだ、明日になればもっと落ち着けるだろう。自分の心を整理して、対処法を見つけることができるだろう。

今までそうしてきたのだし……これからもそうするだろう。

……本当に？

私は地面にうずくまった。

胸の辺りが苦しい。

これまで築き上げてきたものが、全て剥ぎ取られてしまったかのように。

酷く頼りない。

歩くことも、立ち上がることもさえできない。

顔を上げ、周囲を見回す。

しかし、私の周りにはただのコンクリートと鉄筋の塊だった。

「アヤナ！」

健児の声がした。

扉が開き、階段を駆け上がる音が近づいてきた。

厚く垂れ込めていた雲の隙間から、淡く輝く月が覗く。

アスファルトは月の光を浴びて銀色に輝き、街を淡い光が流れる水辺に変える。

暗闇の中、その光は彼の暖かな表情を映し出した。

「健児」

私は健児を見つめた。

「私…… どうしたらいいんだろう？」

「それは僕にもわからないよ。でも、僕は君の力になりたい。さあ、一緒に帰ろう」

「何処へ？」

私は呟いた。

「君の家へ」

「……私の家？」

「そう、君の家だ」

健児は私の手を取って立ち上がらせた。不思議なことに、私の身体は彼の手にだけは拒絶反応を示さなかった。

彼の手が私を傷つけることはない。

私は健児の手の感触を確かめながら呟いた。

「私の家って何処のこと？」

「君が今住んでいる所だよ」

「あそこは別の人のものよ。私のものじゃない」

「……それじゃあ、故郷のあの家は？」

「あんな所、家じゃない」

健児が当惑した表情で訊ねる。

「それじゃあ、君は何処に帰るんだい？」

「……私は何処に帰るのだろう……？」

「健児、その女から離れて」

顔を上げると、真珠が私を睨んでいた。彼女は足早に近づくと、私の体突き飛ばした。

「真珠。どうしたんだ？」

「離れて、この女から離れてよ」

車道に投げ出された私は、その場に座り込んだまま立ち上がることもできず、二人が言い争っている様子を呆然と見つめた。

私のせいだ。

健児は真摯な態度で過ちを省み、過去と向き合おうとしたのに。

私は過去に甘え、思い出にすがり……私がはつきりとした態度をとらなかったからだ。

今は九年前じゃない。

そう思うと、悲しくて涙が零れた。

「大丈夫かい？」

健児が駆け寄ってきた。彼のすぐ後ろには真珠がいて、殺意すら漂う眼差しで私を睨んでいる。それでも、健児は穏やかな表情で私に手を差し伸べてくれた。

「不安定な気分の時は誰にでもあるよ。でも……何て言うのかな？  
大丈夫だよ、何とかなるよ。僕にできることがあれば何でもするし、君は少し休んだほうがいい。ずっと研究に根を詰めてたんだろう？ 休めばきっと気分も良くなる。そうすれば大抵のことはうまくいくよ」

私は手を伸ばし、健児の手を握った。

彼の手は大きく、暖かった。

震える私の手が優しく包み込まれる。嬉しいのか、それとも悲しいのか……よくわからない感情が胸の奥から湧き上がり、また涙が溢れ出た。

「健児。貴方に聞いてほしいことがあるの……真珠ちゃんにもね」

「何だい？」

健児は私を見つめ、真珠は私を睨んだ。私はここから関係を始めなければならぬ。

私は言葉を選んだ。

今なら正しい言葉が選べそうな気がする。私は口を開いた。

その時。

二人を追って出てきたタカハラが、何かに気づいて叫んだ。

「健児！」

強い光が射し、エンジン音が響く。

健児が叫ぶ。私の手を離れ、彼の体が遠ざかる。

彼は真珠を突き飛ばした。

それが私の見た彼の最後の姿。

次の瞬間、目の前を鋼鉄の塊が貫いた。

私達目がけて突っ込んできた車はガードレールを跳ね飛ばし、健児の体を引きずったまま三階建てのビルに突っ込んだ。

「……健……児……？」

私は彼の名前を呼んだ。

何度も何度も、言葉が噛み砕かれ、意味を失うまで。私は繰り返した。

呼び続ければ、彼の名前を声に出し続ければ、いつか言葉と現実が合わさる時が来るかもしれない。

だって、あれは健児じゃない。

私は認めない。

私の知っている彼は、あんなバラバラになった骨と肉の塊なんかじゃないからだ。

あれは健児じゃない。

……絶対に、健児なんかじゃ……。

「健児？」

真珠が立っていた。

「何なのこれ？ ……何なのよ？」

彼女はふらついた足取りで私の方に近づいてきた。彼女の視線は暫くの間、宙を漂っていたが、やがて私を捕らえると急激に感情を爆発させた。

「何なのよこれは！？ 一体これはどういうことなのよ！ 説明しなさいよ！」

「わからない……わからない」

私は呟いた。自分は何もわかっていないことを彼女に理解して欲しかった。他の誰かの失敗を自分のせいになされた子供のように、現実に対する無力と無実を認めて欲しかった。

「私にもあれが何なのかわからないの。あれは一体何なのかしら？  
ねえ、貴女も一緒に考えてくれない？」

おそらく私の顔には媚びるような笑みさえ浮かんでいたはずだ。  
だが、真珠は応えなかった。

彼女は見つめた。

それは何もない空間、さっきまで一人の男の形をしていたはずの空間だ。

真珠は大きく目を見開き、空を見つめた。

……不意に、彼女の口元が歪んだ。

それが笑ったのだと気づくまでに、かなりの時間がかかった。

「私よ」

「え？」

「私なのよ」

「……何？」

真珠は首をカクンと曲げて私に微笑みかけた。

「彼が最後に助けようとしたのは私。アンタじゃない」

何かが外れたように大きく開いた目に青い髪がかかった。

「私なんだから」

そして彼女はけたたましく笑い……糸が切れたように地面に座り込んだ。

「……私、最低だ」

眩き、彼女は倒れた。

駆け寄ってきたタカハラが地面にぶつかる直前で抱き止め、地面に横たえる。彼は建物に突っ込んで潰れている車に近づいていった。

「運転手も即死だな。病気が飲酒運転か……」

タカハラは足を振り上げ、車を思いきり蹴りつけた。  
ずるり。

車輪に挟まっていた肉体の一部がずり落ちる。

「……っ」

タカハラは咄嗟に目を背けると、

「……畜生」

もう一度車を蹴りつけた。何かが変わるわけでもないことは彼にもわかっていたはずだ。しかし、彼にできることはそれしかなかった。

真珠は地面に額を押しつけながら起き上がり、クスクスと笑い始めた。

彼女の笑い声は少しずつ大きくなり、不意に止まった。

後に残ったのは百万平方メートルの空虚。

そこには何もなかった。怒り、悲しみ、絶望……それらが臨界点を超えた時、後には何も残らなかった。

「……消えてよ」

生気の抜けた瞳が私を見つめる。

「ここから消えて……二度と私の前に姿を現さないで」

「……………わかった」

私は答えた。

だから、タカハラが戻ってきたとき、私はそこにいなかった。

/

私は歩き続けた。

私を動かしていたのは惰性、そして恐怖だった。

立ち止まりたくない。立ち止まったら、現実が私を捕らえる。

私には『それ』がすぐ後ろから迫ってくるのを感じることができた。

『それ』は少しも慌てない。やがて私が疲れ果て、立ち止まったところを襲えばいいのだから。そして私の心の中に侵入し、たった一つの事実を告げるだろう。



終わりがやってきたのだ、と。

携帯電話が鳴った。

研究室のタヤマからだった。

「あ、花村さんですか？ よかった、やっと捕まった！」

私が用件を訊ねるとタヤマは関を切ったように話し始めた。

「大変なんです。実は今日の七時三十分、計画通りにホムンクルスに小規模な環境変動を与えたのですが、その時に何所かでバグが生じたらしく、『6』の構造の一部に変化が生じました。これは数値的に言うところ……」

私はタヤマの話を呆然と聞いていた。

『6』に生じたバグは、ほんの些細なものに過ぎなかった。しかし、そのバグは完璧な『6』の構造を歪ませ、予定されていた環境変動と合わさって壊滅的な被害をもたらしたのだ。その結果『6』の集合体は崩壊、ホムンクルスの大部分を占めていた『6』の激減により、全体の生態系が大幅に狂ってしまったらしい。

「『6』及びそれと共生していたものは殆ど壊滅。残っているのは『6』の勢力範囲外にいた単純なものと『イジドア』が少し、これもわずかです。これじゃあ初期段階に逆戻りですよ！」

タヤマは計画の存続自体が危ないのではないかと言った。

「これをスポンサーが知ったら……あいつらときたら理解はないし、成果を出せと言っばかりじゃないですか。教授は役に立たないし、花村さんだけが頼りなんですよ」

「終わったのよ。もう手後れだわ」

私は電話を切り、電源を切った。

もうどうでもいい。

全ては終わった。

……終わってしまったのだ。

どのくらい歩いただろうか。

いつの間にか降り始めた雨の中、私の感覚は徐々に失われ始めていた。

冷たさも、肌を打つ水滴の存在もはつきりしない。

思考は一つとして結論に及ばず、いつまでも同じ思考を繰り返すうち、そこに本当に思考があったのかさえわからなくなってくる。

自分の存在さえ……確認することができない。

このまま私は消えてなくなるのだろう。私という存在は塵のように小さくなり、小さくなり、遂には消えてしまうのだろう。

いや、消えてしまうことはできないかもしれない。

私は無限に縮小を続け、それでも完全な無に達することはできないのかもしれない。

終わりは来ないのかもしれない。

そう思った。

小さな歌声が聞こえた。

歌声は雨粒の隙間をぬって流れてきた。何処か聞き覚えのある旋律。私は音楽には疎いし、曲名を思い出すこともできないけれど。

その賛美歌のような旋律に覚えがあった。

その時だった。あの女が現れたのは。

『どんな気分？』

声がした。少し低い、背筋を撫で上げるような声。

顔を上げると、私は隣に一人の女がいることに気がついた。まるで鏡に写したように私と同じ体型、同じ長い髪。雨を気にするようでもなく、鼻歌を歌いながら私の隣を歩いている。

「……誰？」

『さあ？』

女は鼻歌をやめて楽しげに笑った。白いワンピースの裾が歩くごとに翻り、足が地面を離れている時間が長くなっていくような気がする。

「さつきから喋っていたのは貴女なの？」

『あれは貴女自身の声、そして私の声』

「どういうこと？」

『私は貴女であって貴女でないもの。私は貴女で、貴女は私。それと同時に私は貴女ではなく、貴女は私じゃない。わかる？』

「まるでマグベスの魔女ね。訳がわからないわ」

『時の流れは一つではなく、真実は一つとは限らない。意味と事実はそれぞれの立場で形を変え、時間すら正しくは流れない。ある種の世界ではね』

「何が言いたいのか？」

女は可笑しくてたまらなそうな顔で言った。

『難しそうな言葉を使っておくと何か深刻な意味がありそうじゃない？』

「……………」

『そう怒らないで』

女は白いワンピースをはためかせながら私の前に立った。

『周りを見なさい。貴女は今、世界の果てにいる。この世界の終わる所にね』

私達はいつの間にか、他には誰一人としていない場所に立っていた。空には星もなく、取り囲むように聳え立つ建造物には一つとして明かりがついていない。

「ここは……………」

『貴女は今、世界から引き離された状態にいる』

女は言った。

『支えるものがなくなった今、自分自身の重さにさえ耐えることはできない。だから、貴女はここに来た。世界の底にね』

「私は……どうなるの？」

『どうしたい？』

「……もう、どうでもいいわ」

女に反発する気力も失せた。

「ここが世界の終わりだと言っならこのまま消えてしまいたい。ここが私の終わりだとしても私はそれで構わないわ」

『それはできないわ』

背後から風が吹きつけ、女と私の髪を乱した。風の吸い込まれる場所……女の背後には大きな壁のように闇が広がっている。

『貴女は死なない。まだ実験は終わっていないもの。うっん、ようやく始まったばかりなのよ』

「どうして？ 私が生きていたって仕方がないじゃない。これ以上、私がこの世界にいる意味なんてない。そうでしょう？」

『そうじゃない』

女はゆっくりと首を横に振った。

『確かに貴女は幸せに生きることにはできないかもしれない。でも、貴女は生き続けなければならない。どんなに惨めでも生き続けるの。貴女にはそれができるはずよ』

「信じないわ」

私は呟いた。

「そんな話は信じない。私は不完全で欠陥だらけの人間よ。私は人間社会の中のバグに達しないわ。だから、ずっと人を傷つけてきた。私は存在しないほうがいいの。きっと今にもっと多くの人を傷つけるようになるわ」

『わかってないのね』

女は嬉しそうに、そして悲しそうに微笑んだ。

『だからこそ、貴女には生きる意味があるのに……』

女は一步後ろに下がった。女の足が闇に消え、まるで宙に浮いているように見える。

私も彼女を追って闇の中に踏み込んだ。その瞬間、私の足下から

地面が消えた。瞬く間に世界が反転し、深い闇の中に投げ出される。それは何もない空間だった。全てのものが意味を失い、何も見えず、何も聞こえず、触れることすら叶わぬ世界。

私は恐怖した。闇に閉じ込められてしまうことに恐怖した。

その時、誰かが私の手をつかみ、世界へと引き戻した。

夢を見た。

私は薄暗い水辺に横たわっている。流れは浅く、底には水草がまばらに茂り、微かな流れに揺らめいている。足は流れの中にあり、濡れた土は冷たい。

何かが水底に埋まっているのが見える。

銀色の小さな十字架と、セルロイドの人形。

泥に埋もれ、崩れかかっている。

私はこれらを知っている。でも、何処で見たのだろうか？ 私はそれらをいつも当たり前のように見ていた……そんな気がする。

何かが動く音がした。

ピシヤリ、ピシヤリと水の上を歩いてくる。

夢の中だからだろう。私は近づいてくるのが蜘蛛だとわかっていった。

蜘蛛は私のすぐ側まで来ると、動きを止めた。恐怖の為か、私は動くことができない。ただ、すぐ近くに蜘蛛の存在を感じながら横たわっている。

やがて、蜘蛛は長い足を伸ばして私の上に覆い被さってきた……。

次の瞬間。

何かが衝突するような衝撃で、私は夢から引き剥がされた。

何層にも積み重なった意識の雲を突き破り、私は現実世界に戻った。

自分が何処にいるのかわからなかった。蒸気が立ちこめ、頭上からは熱い飛沫が降り注ぐ。混濁する意識を抑え、一面に敷き詰められた淡い黄色のタイルに爪を立てる。

……浴室？

私は顔を上げ、周囲を見渡した。白熱灯に煌々と照らされた、ここは浴室……正確にはシャワー室だ。それもかなり大きい。横長の壁面に幾つものシャワーが取りつけられ、その内の一つが、壁にもたれて座り込んでいる私に向かって湯を投げかけている。

熱い。だが身体は冷え切っている。

凍えた体を摩ろうとして、私は自分の状態が妙なことに気がついた。シャワー室ににいるのに服を着ている。しかも襟首の辺りから引き裂かれてボロボロになっているのだ。下着もつけたままだから犯されたというわけではないだろうが、殆ど裸の状態だ。まるで動物が私の服を脱がそうとして、やり方がわからず途中で諦めたようだ。そもそも、私はどうやってここに来たのだろう。

誰かが運んだのだろうか？

だとしたら、誰が、何の為に？

ここは……何処だ？

その時、扉が開いて誰かが入ってきた。

湯気に隠れて顔はよく見えないが、かなり大きな男だ。声を出そうとしたが、喉が掠れてうまく声にならない。男が私に近づくに連れて、何も着ていないギリシャの彫刻のような上半身があらわになった。

「……だ……れ？」

男が屈んで私の方に手を伸ばしたとき、ようやくまともな声を発することができた。男の手が止まる。私が意識を取り戻していると気がついたらしい。

「ここは、何処？ 私は、どうして……ここにいるの？」

掠れた声を途切れ途切れに吐き出す。影になった男の顔はよく見えず、何の反応も伺うことができない。私はまるで大きな岩の塊と対峙しているような気がした。

不意に男の手が伸び、大きな指が私の腕をつかんだ。

そして、男は私を押し倒して覆い被さってきた。

「……………！」

男は私を組み敷くと、強引に服を脱がし始めた。男の力は信じられないほどに強く、元々破れていた私の服が簡単に裂ける。

圧倒的な力に肉体ごと引き裂かれるのではないかという恐怖が私を襲った。

「やめて……やめてよ！」

私は叫んだ。しかしどんなに叫んだところで、男が私を壊すのを止めるとは思っていなかった。

だから男が驚いたように離れたとき、私は逆に驚いた。

咳き込みながら起き上がると、男はシャワー室の反対側の壁際にうずくまっていた。蒸気に遮られてよくわからないが、頭を抱えて震えているように見えた。

「……どうしたの？」

私は男に近づくと、咳き込みながら訊ねた。

「ゴメン」

男が顔を上げ、呟いた。男の容姿から受ける印象とはかけ離れてか細く、幼いと言ってもいいような声。白熱灯の光に照らし出されたのは何処か異国風の顔立ち。鼻筋が高く、目は驚くほど大きく澄んでいる。

年齢は二十歳前後だろうか。

しかし、その瞳に浮かんだ怯えの色が、彼の印象を更に幼くしていた。

「ここは何処？」

私は破れた衣服を整えながら訊ねた。もともと、服は既に原形を留めておらず、無意味な行動だったけれど。不思議なことに、互いに裸同然の姿でいながら、私は既に目の前の男に警戒を覚えていなかった。

「ここは……俺の家……住んでる」

「普通の家じゃないわね」

私はシャワー室の大きさを見ながら言った。



「アパート……昔は皆、住んでた」

「昔？」

「今は住んでない」

「？」

「……怒ってない？」

「何を？」

私が訊き返すと、彼は上目遣いに私を見つめ、小さく呟いた。

「……さっき、やめて、って叫んだ」

「そうね」

私は頷いた。確かに先程は恐怖を覚えたが、こうして彼を見てみると、怒るところか逆に心配になってくる。それほど彼の表情は頼りなかったし、不安定だった。今、精神的に傷つく可能性があるのは、私よりも彼の方のような気さえした。

「でも、貴方がやめてくれたから今は怒ってない。本当よ」

なるべく柔らかな物腰で、傷つけないよう慎重に、ゆっくりと言葉を並べる。彼は不安げな瞳で私を見ていたが、やがて安心したのか張り詰めていた表情を和らげた。まるで本当に小さな子供のようだ。

「大穴の方に、フラフラ歩いてくのを見たんだ」

男は言った。

「あそこは落ちると死んじゃうから、引き止めたら気を失っちゃって……それで家まで運んだんだ。どうしたらいいのかわからなかったから……とりあえず体を温めようと思って……でも服を上手く脱がせられなかったんだ」

彼はたどたどしく言葉を続けた。

思い出したように破れた衣服を見る私に、また怯えた眼差しを向ける。今度は服を破ってしまったことを怒られると思っているのだから。

「大丈夫。怒ってないわ」

彼は戸惑ったようだったが、また安心した顔をした。

私の体によろやく血が巡り始めた。かじかんだ指にくすぐつたいような感覚が走り、赤みが差した。

彼に掴まれた部分が痛む。よく見ると右手首に小さな切り傷があり、血の気の悪い肌が一直線に裂け、血が滲んでいる。さっきの彼の乱暴でできた傷とは思えない。何処かで何かに引っ掛けてしまったのだろう。

私は傷に唇をつけて舐めた。

……微かに痛む。

もう一度、強く吸ってみると、さっきより強く痛んだ。

そして、口の中に鉄に似た味が広がった。

「ねえ」

私は男に呼び掛けた。

「何？」

彼は大きな目を更に大きく開いて訊ねた。

「ちよつと、こっちに來てくれる？」

「……どうして？」

怯えたような声。

「いいから。來てよ」

私は手招きした。男は戸惑いつつも、四つん這いのまま私の方に近寄ってきた。

「舐めてくれない？」

私は手首の傷を軽く舐めると、男の方に差し出した。

「……でも」

「いいから」

男はゆっくりと顔を動かし、傷口を吸った。自分でした時よりも遙かに強い痛みが走る。私は予想外の痛みに顔をしかめた。

「ゴ、ゴメン」

私の表情に気づいたのか、男が口を離し、泣きそうな声で謝る。

「いいの。ちゃんと痛いのか確かめてみたただけだから」

私はもう一度傷口を舐めた。それから私は、ぼんやりと自分の感

覚に集中した。

「ねえ」

私。

「何？」

男。

「……私、生きてるわ」

私は呟いた。

「生きてるのよ」

「それ、どういうこと？」

「……どういふことなんだろうね」

気がつくと、男が私の顔をじつと見つめていた。先程までの弱気なものとは違う、ある種の感情の光を宿している。男は瞳にその光を宿したまま、私の身体に視線を移した。

どうやら、見かけほど子供というわけでもないらしい。

いや、体の成長と知識、精神のレベルがつり合っていないのだろう。実際、その気になればどうとでもできるだろうに、じつと見ているだけで動こうとはしない。欲求はあっても、具体的に私の体をどうすればいいのかはわからないらしい。

「欲しい？」

訊ねると、男はびっくりと顔を上げて私を見た。

長い沈黙の後、男の首が小さく縦に揺れた。

「やり方は？」

男の首が横に揺れた。

「じゃあ、教えてあげるわ」

男を抱き締めると、男はまるで小さな子供のように私の胸に顔を寄せた。

「何も怖がることはないんだからね」

私はその言葉を、誰よりも自分自身に言い聞かせた。

暖かな雨が降り注いでいた。

すべては夢の中の出来事に思えた。

ヨナ・ホエールで開かれたパーティー。

サオリのこと。

健児と出会ったこと。

そして、その後に起きたこと。

記憶には霞がかかり、現実感を欠いていた。

だが、実際の所、私にはわかっていた。それらは全て現実起きたことであり、私自身が体験した事実だということを。そして、正常な精神でその記憶に触れれば、それだけで私は崩壊してしまうということを。

私は今、深い穴の前に立っている。

願わくは、目前の危機から目を背ける怠惰な精神を。

例えこの穴の存在が、消え去ることはないとしても……。

/

目を覚ますと、私は自分が狭い部屋の中にいることに気がついた。旧式の木造建築で、のっぺりとした壁に囲まれた部屋に粗末な家具が並んでいる。窓は二つ、どちらにも緑色のカーテンが掛かっている。涼しい風と共にカーテンの隙間から光が射し込み、私は朝が訪れたことを知った。

私の隣にはあの男が寝ていた。清潔とは言えない薄い布団から上半身をはみ出させ、呼吸の度に厚い胸板が上下している。窓から射し込んだ光が筋となって左胸から右の鎖骨にかけて伸びている。私は指を伸ばしてその筋を辿り、男に体を寄せた。私達の体は初めからそうしていたかのように、隙間なく合わさり、離れなかった。

光の筋は左胸の端で途切れ、私は手のひらを男の肌に乗せた。男

の肌は固く滑らかで、驚くほどに暖かった。目を閉じて彼の体に顔を寄せると、熱く焼けた土の匂いがした。何処までも続いてゆく陽の光を受けて輝く荒野が見えた。

私は昨夜、この温もりに抱かれながら、シャワー室から運ばれたことを思い出した。

窓から風が吹き込んでカーテンが翻り、輝くような青空が見えた。こんな風に空を見るのは久しぶりだ。昔はよく眺めていたような気がするが、最近は地上のものばかりに目を向けていたような気がする。もう少し、空を見ていたいと思った。だけどここが一体何処なのかも気になる。まさか、世界の果てということはないだろうが。

昨日、誰かに、ここは世界の果てだと言われたような気がする。一体誰に言われたのだろうか？ 記憶がぼんやりとしておぼつかない。これ以上踏み込むと何か嫌なことを思い出してしまうような気がして、私は考えるのをやめにした。

布団の外にクシャクシャになった白いシーツがあった。私はシーツをつかむと身体に巻きつけて布団を抜け出した。眠ったままの男の手が私を求めるように動く。些細なことなのに、私はその仕草を見て、胸が少し痛くなった。

大丈夫、そんなに離れるわけじゃない。

私は男の手に軽く触れて布団の中に戻してから、自分が奇妙なことをしていると思った。

部屋は本当に狭く、ほんの二、三步で私は窓に辿り着いた。カーテンを揺らし、外の空気が流れ込む。私は片手でカーテンをつかむと、ゆっくりと開け放った。

ある意味、外の世界に対する私の想像は当たっていた。何故ならカーテンの向こうに広がっていたのは、私が今まで暮らしていた『世界』ではなかったからだ。アパートの前に広がっていたのは、無人の建造物が立ち並んだ……何と言えはいいのだろうか？ まさに世界の果てのような光景だった。

この部屋は二階にあるらしい。

物音に気づいて振り向くと、男が布団から起き上がった。自分は何も身につけていないことに気がつき、きよろきよろと辺りを見回している。

「ズボンならここよ」

私は足元に転がっていたズボンと下着を拾って男の方に投げた。男は恥ずかしそうな顔でそれらを受け取ると、自らを隠すように急いで履き始めた。その酷く子供っぽい仕草とは裏腹に、覗き見えた彼の下半身は成熟し、とても逞しかった。私はそんな彼の姿を見ながら昨夜の行為を思い出していた。

昨夜、私が彼の優位に立てたのは最初のほんの数分だったと思う。彼は驚異的なスピードで行為を理解し、自分のものにしていった。私は行為を始めてすぐに、自分が坂の上で止まっていた大きな石を動かしてしまったことを理解した。彼の肉体は不安定な精神のコントロールを離れ、本来持つている機能を存分に発揮し、目的に向かって動き始めたのだ。

私も考えることをやめ、流れに身を任せた。

降り注いでいた雨はいつしか大きな濁流となり、私を飲み込んでいった。

だが、一晩明けた後の彼は、元の様子に戻っていた。彼は着替え終わると、私の方に近づいてきた。酷く申し訳なさそうな顔で、怒られるのを怖がっているように見える。

「……ゴメン」

彼はうつむいたまま呟いた。

「何が？」

「なんて言うか……」

そう言ったとき、彼は更に顔をうつむかせた。

「大丈夫、怒ってなんかないわ」

私は彼の頭を撫でて囁いた。

「怒ってなんかない。怒ってなんかないわ」

彼を前にすると、自然と口調が優しくなってくる。

「……本当に？」

「本当に、本当よ」

やっと顔を上げた彼の頬に手を当てて、私は微笑んだ。

「昨日はとっても良かった。貴方って凄いわ」

昨日の行為を思い出したのだろう。彼が戸惑って余計に顔を緊張させる。

「本当に？」

「本当に、本当よ」

私は彼を抱き寄せると、頬にキスをした。途端、彼の体が反応した。昨日あれだけしたのに元気なことだ。私はあまりに彼が窮屈そうなので可哀想になった。

「ズボン、脱いじゃったら？」

「でも」

「別に構わないでしょう？ 誰もいないんだから」

「……うん」

彼はズボンのチャックに手をかけた。彼も窮屈に思っていたらしい。が、ふと手を止めると、妙に真面目な顔で呟いた。

「せっかく履いたのになあ」

「……本当ね」

私は可笑しくなって、相槌を打つと声に出して笑ってしまった。

自分の姿を笑われていると思ったのか、男が恥ずかしそうに顔を背ける。

「貴方、名前は？」

彼はズボンを脱ぐ為に屈みながら答えた。

「……ケンジ」

不思議なことに、私はあまり驚かなかった。



それから私は、ケンジから幾つかの話を聞いた。

ここがニュータウンの建設現場であること。

工事が途中でストップしたこと。

そしてここで、ケンジが一人で暮らしていること。

一人で暮らしている理由については語られなかったが、そこに至るまでの大まかな事情を聞くことはできた。

ケンジはとある下請の建設会社で働いている。彼の会社はニュータウン建設の一部を担当しており、かなりの間、多くの従業員がこのアパートに泊まり込みで働いていたらしい。その後不景気の波を被って工事は中断、彼以外の現場担当者もここを引き払った。しかし、ケンジだけはここを離れなかったらしい。

「前の家は狭かったし、あまりいい所じゃなかったんだ。それにオレは、ここが気に入っていたし……」

ケンジは言葉を濁した。これ以上は聞いてほしくないと言うことだろう。

偉そうに言うことでもないが、ケンジは軽度の障害を抱えているようだった。おそらく彼は、小学校低学年程度の知能レベルしか持ち合わせていない。社会的な技術はないに等しいと言っていいだろう。

実際、彼を見ていると、酷く繊細で傷つきやすい子供を見ているような気になる。もっとも、肉体的には健全に成長しており、見た目は成熟した男性にしか見えないのだが。

ケンジのような……あまり使いたくはない表現だが、いわゆる障害者が、実社会に出て一人で生活しているというのは珍しいことではないかと思う。彼が自分から一人で生きて行くことを決意したとも思えない。おそらくは保護者の無関心、あるいは死亡で、彼は一人でこの社会に放り出されたのだろう。

だが、それが悪いことだとは思わない。彼を重病人のように隔離し、閉じ込めることがいいことだとは思わない。勿論、福祉施設を否定するわけではないが、少なくとも彼は世界から切り離されるべき存在ではない。

彼はこの社会の中で立派に生きてきた。

むしろ、病院に閉じ込められるべきは私の方だ。

「ケンジはこの部屋ですつと生活してきたのね」

私が訊ねると、ケンジは恥ずかしそうに体を縮めた。

「皆は変だって言うけどね」

「洗濯とか食事とか、一人でできるんでしょう？」

「食事は遠くのコンビニで買ってるし、掃除もあんまりしない。あ、でもちゃんと洗濯はしてるよ。洗濯機もあるし」

照れて否定していたケンジは、あまり否定し過ぎると怒られるのではないかと思っただけ、慌てて洗濯の話をした。ケンジにつられて顔を向けると、ベランダに小さな洗濯機が置いてあった。後から聞いた話では、これはケンジの仲間が買った中古品を置いていたものらしい。結局、彼等が洗濯をすることはほとんどなかったらしいが。

ちなみにケンジは自分で言うほど何もしない訳ではなく、数少ない電化製品をちゃんと使用法を覚えて使っていたようだ。

「貴方はずっと生きてきたんでしょう？ 一人で……ちゃんと」

私は訊ねた。

「うん？」

ケンジは質問の意味をよく理解しないまま頷いた。

「それだけで偉いわ。私とは大違いね」

「……そうかな？」

「そうなのよ」

ケンジは不思議そうな顔をしていたが、私が微笑むと嬉しそうにうつむいた。

「アヤナはどこに住んでいるの？」

不意にケンジが訊ねた。

「……私に帰る所はないわ」

私は答えた。少しの間忘れていた痛みが、胸の奥で疼く。そんな私を、ケンジはしげしげと眺めると、小さな……しかし、しっかりとした声で言った。

「それなら……ここにいなよ、アヤナ。ここにいればいい」

「何て言ったの？」

私が訊き返すと、ケンジは怒られたのかと思っただけ、慌てて顔を背けた。

「怒ってないわ、ケンジ。ただ、貴方が何て言ったのかわからなくて」

「アヤナがここにずっといればいいのに……って言ったんだよ」

ケンジは緊張した面持ちで、正直に自分の願望を口にした。

「嫌？」

ケンジが上目遣いで私を見る。

「嫌じゃない。嫌じゃない……嬉しい話だわ。でも」

「じゃあいいだろ？」

しどろもどろになって答える私に、ケンジは一転して積極さを発揮した。

「……でも」

「ねえ！」

「……でも」

「でも？」

ケンジが真剣な表情で私の目を覗き込む。

いつしか、私は笑い出していた。それも、自分でも吃驚するくらいに、幸せそうに。私はケンジの伸ばした腕をつかんだ。

「本当にいいの？」

「うん」

ケンジも本当に嬉しそうに頷いた。

私達はケンジの買ってきたコンビニの弁当を食べた。そして、二人で一緒に眠った。

/

私はケンジを利用していると思う。

彼の心は信じられないほどに美しく、純粹だ。彼という時、私はこれまでずっと抱いていた緊張感や違和感から開放される。だから私は彼と共にいる。

彼という時……彼に抱かれ、求められている時、心がバラバラになることがない。彼の腕に抱かれている時、私は不安を感じない。

私は自分が一つの存在であることを感じる。

だから私はケンジと共にいる。

彼に抱かれている。

私は彼を利用している。

……そう思う。

翌朝、私はケンジが布団を出る物音で目を覚ました。

「どうしたの？」

「仕事」

服を着ながらケンジが答えた。

「どれくらいまで？」

「日が暮れるまで。現場だから」

「……そう」

私は布団に横たわったまま呟いた。

「できるだけ早く帰るよ」

時間がないのか、素っ気なくケンジは言った。余程朝早くから仕事を始めるのか、それとも仕事場が遠く離れているからなのか、周りはまだ夜と言っていていい時間だった。

夜明け前、世界が最も静まり返る時だ。

私は体にシーツを巻きつけて布団から出た。

「仕事、頑張ってきてね」

玄関で靴を履いている後ろ姿に声をかけると、ケンジは吃驚したようにこちらを見て、頷いた。

「うん。……頑張ってくる」

彼は小さく微笑んで少し首を傾げた。私が近づくと、ケンジは私を抱き締めた。大きな手が体を探る。やがてケンジの手は探し物を見つけたように背中ではまり、唇は私にキスをした。

「……いつてくるね」

「いつてらっしゃい」

ケンジは私から離れると、シーツを身に纏った私の姿を見つめて

……照れたように笑って扉から出ていった。

静寂が訪れた。

暗く狭い部屋の中、私一人が取り残される。

私はこれから何をするべきなのだろう？

布団の中に戻り、考える。

いつもだったらもっと遅くに起きて研究室に行くだろう。そしてサオリや他の研究員と会って、カジワラとも会っただろう。私は研究のことが気になった。ホームクルスの事故はどうなっただろう？

これからの研究はどうなるのだろうか？ サオリは私のことを待ってはいないだろうか？

……いや、もう私には全て関係のないことだ。

私はもう一度眠ろうと目を閉じたが、頭の中に火花が飛び散るような嫌な夢に起こされて、その後はよく眠れなかった。

やがて、空が白みを帯び始めた。太陽は厚くたなびく雲を赤みがかった金色に染めながら、暗闇を群青に塗り変えようとしている。私は右手をかざして傷の存在を確かめた。不思議なことに、傷はすっかり癒えていた。跡形もなくなっている……妙な話だ。

半年ほど前に、同じ場所に怪我をしたことがある。実験中に電極芯で手首を引っかけたのだ。確かあの時は随分と長く傷が残ったはず。まるで私の時間が狂って遡り、傷口が開いたかのようなだ。

私の時間は逆流しているのだろうか？ ふと浮かんだ考えはあまりに非科学的で、私は間もなく自身で否定した。

昨日もそうだったが、このアパートにはまるで物音がしなかった。ケンジの話から、彼以外には一階に大家の老人が住んでいるだけだとは知っていたが、今まで住んでいた街の騒がしさに慣れている私には、ここの静けさは却って落ち着かない。

少し外の様子を探ってみようと思い立ち、私は服を着ていないことに思い当たった。昨日からずっとこのシーツを纏ったままだ。服はケンジが破いてしまった。代わりになるものを探したがケンジも衣服は殆ど持っておらず、しかも私に合うサイズのものはない。なので、結局私はそのままの格好で部屋を出ることにした。扉を開けるとすぐそこに木造の階段が見えた。かつては多くの人間が通った

のだろう、曲線を描くまでに擦り減った階段を、静かに降りる。

一階は二階と大差ない構造だったが、部屋の扉が開けっ放しになっている二階とは異なり、各部屋の扉には鍵がかけられていた。端の部屋から微かに物音が聞こえる。どうやらテレビのニュース番組のようだ。淡々とした音の残骸と共に、微かな光の変化が、廊下に面した窓の曇り硝子を通して見えた。

あそこに人が住んでいるのだろうか？ 階段から足を踏み出そうとした時、急に端の部屋の扉が開いた。私が慌てて階段に身を隠すと、一組の老人と老女が出てきて、廊下をゆっくりと歩き出した。二人共足が悪いのか、お互いを支える形で一歩ずつ、ゆっくりと歩いていく。二人の丸まった背中と銀色の髪は、二人があまりに近づき、接している為に、私にはその境目を見つけることができなかった。

私は老人達が外に出て行くのを見つめ、それから二階へと戻った。下に人間がいることがわかっただけでも十分だ。今はこれ以上、関わり合いになる必要はない。

私はシャワーを浴びることにした。夜は暑かったし、身体は私と彼の体液でまみれ、中途半端に乾いている。

シャワー室は二階の一室を工事関係者が改造したものだそうで、タイル張りの壁に数個のシャワーが取りつけられている。脱衣所も含めて仕切りがないのは使用するのが男ばかりだと設計者が思ったからだろうか。敷き詰められたタイルの淡い色使いも相まって、広々としていて開放的だ。

シートを脱ぎ捨て、シャワーの前に立つ。暫く待つと、気温より少し高い温度の湯が頭上から降り注いだ。髪を梳きながら薄く目を開けると、窓から射し込む光を反射して、水滴が煌めいているのが見えた。小さな荒削りのダイヤのように煌めきながら、私の全身を流れていく。

さっき、下ではニュースをやっていた。

私がいなくなったことを、誰かが騒いでいるだろうか？ ……い

や、一日や二日では、それほど騒いだりはしないだろう。家族がいるわけでもなし、そんなことがニュースになるわけがない。世の中にはもっと人の興味を引くことがある。

例えば、自動車事故とか……。

不用意だった。

私はそのことについて無意識のうちに目を背け、考えないようにしていた。だが、私は今……妙な話だが、あれから二日たった今になって、初めて一つの事実を認識した。

認識してしまったのだ。

……あの人が、もうこの世にいないことを。

私はシャワー室の床にしがみつき、声にならない何かを吐き出した。



彼がこの世にいないことは、絶対的な恐怖だった。存在しないことは恐怖だった。話しかけても、もう答えが返ってこないことは恐怖だった。

今までだって、私は彼の居場所を知っていたわけじゃない。だが、彼がこの星の何処かにいることは信じることができた。私が生き、彼も生きる。そうしていれば、いつか会えるかもしれないと思っていた。

事実私達は、本当に再会したのだ。

……だが、今は違う。

彼の存在はこの星にはない。あるのはただの残骸のみだ。

私に話しかけてくれたあの声はない。私を見つめてくれたあの瞳も今は存在しない。

確かに存在したはずのすべてのものはその輪郭を失い、闇の中に消え失せた。

彼はいない。いないのだ。

必死に彼の温もりを思い出そうとした。しかし、私の記憶は何かに蝕まれ、削り取られていく。

それは闇。闇は全てを蝕み、呑み込んでいく。後に残るのは空洞だ。私は自分の体の中にはつきりと闇の存在を確認することができた。

闇は、健児の形をしていた。

記憶の中に確かに存在したものが、今、世界に存在しないこと。床にうずくまり、頭を押さえる。

乱れ散った髪が降り注ぐ水で流れ、全身に張りつく。

私は必死で目を瞑り、耳を閉ざした。

喉の奥を嫌な感覚が這い上がる。灰色の味をした不快な感覚。

吐き出してしまいたい。

でも、吐き出せない。

喉の奥が痛い。泣き叫べば楽になるのかもしれない。

でも、何を叫べばいいのだろう。

私には見当もつかなかった。

数時間後、私は部屋に倒れていた。絶対的な虚無感は薄まったが、私の中には何の気力も残されてはいなかった。こうして戻ってこれただけでも奇跡的だ。

私はシャワー室の床に倒れ、降り注ぐ水飛沫をずっと眺めていた。いつか体が水に溶けて流れていくんじゃないかと思った。そうすれば私の体は下水管を通して川へと流れ、海に辿り着くだろう。魚にでも食べられれば、少しは有効に使われたことになる。私も少しは誰かの為に生きたと言えるだろう。今まで傷つけた多くの人に、ほんの僅かでもお詫びができる。そんなことを考えた。

実際、あのままじっとしていれば、本当に命に関わることになったに違いない。

だが、何かがそれを押し留めた。私はシャワーを止め、部屋に戻った。生き延びてしまったのだ。

あのまま流されてしまえば、どんなにか楽だったろうに。

手を伸ばし、布団を手繰り寄せて潜り込む。

蜘蛛の夢を見た。夢はいつもの何倍もの早さで繰り返され、私は真っ白な光の中、幾度となく地上に叩きつけられて目を覚ました。だが、身体は動かない。

私は再び眠りの中に引きずり込まれ、その度に夢を見た。

何時間が過ぎたのだろう。

辺りはすっかり暗くなっていた。夜空には星一つなく、伸ばした自分の手が本当に存在するのかもわからない。私は闇の中に取り込まれてしまったのかもしれない。

だとしたら、どうして意識はなくなるのだろうか。何故、考えることは止まらないのだろうか。

物心がついた頃から私と共にあり、この頭の中に存在し続けるものはどうしてなくなるのだろうか？ この無意味な計算を続ける膨大なプログラムはいつまで機能し続けるのだろうか。こんなものがあるから悩まなければならぬのだ。

考えるから迷うのだ。考えるから傷つくのだ。考えるから何もできぬのだ。

私はいつの頃からかそう思うようになっていた。

だが、思考が消えてなくなることはなかった。これまでずっと。これからもそうなのだろうか。この絶対的な闇の中で、思考だけは消えることなく在り続けるのだろうか。

私は闇の中に永遠に自分の意識だけが残し、漂っていくことを恐怖した。

……………誰か。

不意に闇の中にぼんやりと光る正方形のものが浮かび上がった。心もとないほどに幽かだけれど、柔らかな暖かな光。それはやがて大きな光の裂け目となり、一気に押し広げられた。

「アヤナ……どうしたの？」

光の中に浮かび上がったケンジの影が驚いたように話しかけてきた。

知らず涙が溢れ出た。

涙が流れて止まらなかった。私は声にならない声を上げてケンジにしがみついた。彼の体温を確かめ、匂いを嗅いだ。抱き締め、彼の体を確認した。

「ど、どうしたの？」

さっきよりも戸惑った声でケンジが訊ねた。しがみつく私の身体を抱えながら中に入り、部屋の電気を点ける。

「抱いてよ。お願い。お願いだから抱いてよ」

私は子供のように彼にしがみつきながら呟いた。

「じゃないと、バラバラになってしまう」

「……うん」

ケンジは不思議そうな顔で私を見つめていたが、床に投げ出された布団の上に私を横たえると、そのまま覆い被さってきた。

私は彼に抱かれた。

私は貪るように彼の体を求め、快楽に溺れた。凍えきつた体を熱湯に浸すような、痛みとも安堵ともとれない激しい快感の中で、私は絶頂を迎え、意識を失った。

目を覚ました時、私は自分の身体の隅々まで血が通っているのを感じた。虚無感が消えることはなかったが、随分と遠いことのように思える。傷ついた剥き晒しの肌を覆うように安堵の海が広がり、私はその波に揺られていた。

水面に漂いながらぼんやりと顔を上げると、こちらもぼんやりとした顔のケンジが微笑んでくれた。

「ありがとう」

「何に？」

「ケンジがここにいてくれること」

「ここはオレの家だよ？」

ケンジはそれから付け加えて言った。

「それにアヤナの家だ」

ケンジの大きな手が私の頬を撫でる。また涙が溢れ出た。

「ありがとう」

「……………何が？」

「何だろうね」

私は涙を拭いた。

「この世界はわからないことが多すぎて嫌になるわ」

「うん。オレもよくわからないことばかりだよ」

ケンジは真顔で頷いた。

「オレって馬鹿だから……………」

「私達は似たもの同士ってわけね」

「……………そんなこと言われたのは初めてだ」

ケンジは驚いた顔で呟き、

「そうだこれ……買ったんだ」

思い出したように立ち上がると、玄関に放り出してあった荷物を持ってきた。私がいきなり飛びついたので、そこで落としてしまったらしい。

「ほら、これ……合ってるかどうか、わからないけど……」

ケンジが袋から取り出したのは、純白の美しいワンピースだった。短い袖と数個のボタンがついた、シンプルなロングのワンピース。天然の素材で縫製されているらしく、独特の暖かみがある。サイズを見てみると、丁度私に合うものだった。

それから驚いたことに、ケンジは袋から下着まで取り出した。

「それと、これ……一応買ってきたんだ。ワンピースが少し高かったから、安いものを買っちゃったんだけど……」

「ケンジが買ってきたの？」

訊ねると、ケンジは一瞬顔を引き攣らせた。

「うん……でも、大丈夫……だったよ」

「何が？」

「……うん」

ケンジは少し嫌そうな顔をした。女性の服、それも下着を買うことは、女慣れした男にとっても恥ずかしいことだ。ましてやそのような経験などあるはずもない彼にとって、この買物はどれほど辛いものだっただろう。

「この服……私の為に買ってきてくれたの？」

「だって、アヤナの服、オレが破いちゃっただろう？ だから、オレが買ってこなくちゃ。オレは何も恥ずかしくなんかないよ。……うん、何も恐くない」

ケンジは勢い良く頷いた。

「ありがとう……」

私はそれ以上、何も言えなかった。

「着てみるね」

パツケージを外し、下着から順に身につけてみる。驚いたことに、ケンジが用意した服はどれもあつらえたように私の体に合った。

「……凄い。ぴったりだ」

私は思わず呟いた。

「でも……どうして私のサイズがわかったの？」

「なんとなく」

ケンジは何事もなさそうに答えた。

「……なんとなく？」

「オレ……なんていうか、あんまりハカリとか使わなくてもわかるんだ」

「本当に？」

「本当だよ」

私が疑っていると思ったのか、それとも私の興味を引いたことが嬉しいのか、ケンジはいつもよりはつきりとした声で話し始めた。

「現場の木材とかでも他の奴がメジャーで計るよりも早くて正確なんだ。親方がうるさいから、一応、メジャーでも計るけどさ。えつと……例えば、アヤナは171から172?ぐらいの身長だよ。朝と夜で少し変わるんだ」

ケンジは私が大学の健康診断で計った通りの数値を言った。

「この部屋のここから、向こうまでは4m30?、天井までは3m15?だよ。ドアの高さは2m……この建物は古いけど、すごく上手な人が作ってるんだ。どの部屋もぴったり長さがあってるからね」  
手を振りながら話していたケンジは、そこで我に返って私を見た。

「……ごめん。迷惑……だった？」

「そんなことない。凄いわ」

私は正直に感想を述べた。自閉症の子供は桁外れの感覚を持つという話を聞いたことがあるが、ケンジの能力はまさにそれだ。絶対音感という言葉があるが、彼のそれは絶対空感とでも言うべきだろうか。極めて高精度な空間把握能力。普通の人間には理解できない感覚だろうが、実際に目の辺りにすれば認めざるを得ない。

「本当に凄い能力だわ」

私が繰り返し返すと、ケンジは恥ずかしそうに頭を掻いた。

「そんなこと……言われたのは初めてだ」

「それは周りの人間が無理解な人達だったのよ」

「……そうかな？」

「そうよ」

「……そうなのかなあ」

ケンジは最後の言葉を本当に嬉しそうに呟いた。

「貴方は本当に素晴らしい人よ」

「そう？」

「間違いないわ」

「アヤナが言う……何か本当っぽいね」

ケンジは微笑んだ。一片の曇りもない笑顔。

胸の奥が微かに痛む。

その痛みを誤魔化すように、私は腕を伸ばして彼を抱き寄せた。

彼は子供のように私の胸に顔を埋めた。

……と、私のお腹が鳴った。

忘れていたが、ほとんど丸一日何も食べていない。流石に体が持たなくなったようだ。少し恥ずかしい。

「お腹……減ったね」

何故か私より狼狽しながらケンジが立ち上がった。

「大家さんから、食べ物を買ったんだ」

ケンジは玄関に放り出されていたもう一つの袋を持ってきた。

「ほら。美味しそうだろ？ でも、どうやって食べようか」

ケンジは買ったものを袋から取り出して見せた。

「あ……魚だ」

私は呟いた。



私達は魚を料理して、二人で食べて一緒に寝た。色々な話をして、怒ったり、笑ったりした。自分でも不思議なくらい普通のことをした。

私はこのまま二人で生活をしていけるのではないかと思った。普通の人間のように生きていけるのではないかと思った。

私の内側の空洞は闇で満たされている。中身を失った肉体は生と死の境界を彷徨い続け、いつ死に転がり落ちるかわからない。

闇が訊ねる。

何故、死ななかったのだ？ ……と。

死ぬべきだった。

実際に、そう思う。

でも私は死ねなかった。

何故かはわからないが死ねなかった。死んだ方が楽だったと思う。しかし私は死ねなかった。

苦しみは募り、痛みは増すばかり。それでも、私は死ねなかった。他者との接触を求め、快楽を貪る。そんなことは一時凌ぎにしかならないとわかっている。

だが、私はそれでも他者を求め、共に生きることを望んだ。

……何故？

「昔からね……ずっとわからないことがあるんだ」

布団の中でケンジが言った。部屋の明かりは消され、周囲には闇が広がっている。

「何？」

「どうして人間は生きてるのかな？」

「……どういうこと？」

「なんていうか……人間は何のために生きているのかな……ってずっと考えてたんだ」

「そうなの」

「うん。皆、変なこと考えてるって言っけどね」

ケンジは私を抱き寄せた。

「でも、気になるんだ。自分が何のために生きてるのかって。自分はどうして生まれてきて、何をしなくちゃいけないのになって。それを考えるとすごく苦しくなって、悲しくなるんだ」

ケンジは一旦言葉を切り、小さく呟いた。

「……やっぱり、オレって変なこと考えてるのかな？」

「そんなことないわ」

私はケンジの手を探り、強く握って答えた。

「変なことじゃないわ。その問題は、ずっと昔から沢山の人が考えて悩んできたことよ。それこそ、人間が文化を持って生き始めた頃からね」

「そうなの？」

「そうなのよ。この国の人だけじゃなくて、ずっと遠くの国の人も考えてきたことなの。普通の人も、天才って言われた人もね」

「へえ……」

ケンジは嬉しそうに笑った。

が、何かに思い当たったらしく、真面目な顔で質問した。

「答えは出たの？」

難しい質問だ。

「……そうね。答えを出せなかった人もいるし、自分なりの答えを出せた人もいる。まだ答えの出ていなかった人に、自分の答えを教えてあげた人もいるわ。そんな人は多くの人に尊敬されて、今でもその人の答えは大事にされてるわ。宗教っていうやつね。勿論、あんまり多くの人には受け入れられなかった答えもあるけどね」

「その答えって、一つ一つ違うの？」

「似てる所も多いけど、違う所も多いわね」

「どうして、答えて色々あるんだろう。……一つじゃなくてさ」

「それは……」

私は口籠り、よく考えてから続けた。

「それは……やっぱり、人間は一人一人、違うからじゃないかな。住んでる国とか文化とかが違うと考え方って変わるしね。寒い所と暑い所じゃ必要なものとか違うわけだし。生きていく上で必要なものも違うからよ」

少し話が抽象的になり過ぎたかもしれない。私は説明を加えた。

「例えば、ケンジと私でも好きなものとかは違うわけだし、考えることにも差が出るわ。もし私とケンジが答えを出しても、その答えは少し違うものになるんじゃないかしら」

「じゃあ、正しい答えっていうのはないの？」

ケンジが不安げに訊ねる。

「……そうでもないわ」

私は答えた。

「今までに色々な人が出てきた答えの中には、とても多くの人にとって正しいと思えるものがあるの。同じものが好きな人達とか、同じ国に住んでいる人に限らずに、本当に多くの人が、これは正しいと思える考え方がある。同じ言葉を使っているとか、同じ肌の色をしているとか……そんなものを越えて理解できる答えってというのが、ほんの少しだけあるの」

「オレもその答えを教えてもらったら幸せになれるかな？」

「多分ね。でも、結局それはケンジが自分で出した答えじゃないから、何処かで少しずれるんじゃないかしら」

「そうかな」

ケンジは暫く黙った後、口を開いた。

「じゃあ、どうすればいいんだろう？」

必要以上に難しいことを話し、ケンジの心を傷つけたかもしれない。私は急いで、だけど出来るだけ丁寧に、続く言葉を探した。

「取りあえず、自分の答えを探してみることじゃないかしら。色々な人の答えを聞いて、自分が納得できる所を自分のものにするの。そしていつか自分の答えができたら、それを色々な人に話すの。ケンジの答えはその人の完璧な答えにはならないけど、その人が自分の答えを探すヒントにはなれると思う。それってとてもいいことじゃないかしら？」

「うん、とてもいいことだと思う」

ケンジの声が明るくなる。私は安心した。

「今は焦らずに、じっくりと考えればいいと思うわ。自分が何をしたいのか。自分は何が嬉しくて、何が悲しいのかってね」

「アヤナの答えは？」

唐突にケンジが訊ねた。

「……まだ、わからないわ。私も答えを探しているの」

「じゃあ、一緒だね」

ケンジは言った。

「いつか、オレの答えがきたらアヤナに教えるよ。それが、アヤナもわかってくれる答えだったらいいな」

「そうね。その時は絶対に教えてね」

私は微笑み、ケンジの胸を軽く叩いた。

ケンジが眠った後、私は考えていた。

自分の答えというものを。

ずっと昔、誰かが言った。人は誰でも自分の答えを見つけなければならぬのだと。

誰が言ったのかは思い出せないが、ケンジとの会話でそれを思い出した。

私は考え続けた。

自分の答えというものを。

こうして私達の共同生活は始まった。私はもう少しの間、生きてみることにする。ケンジを利用し、精神の安定を保ちながら。

私は自分の生活からケンジ以外の他者を排除した。

朝、ケンジが仕事に行くのを見送り、私は活動を開始する。必要なものは二つ。ケンジの買ってくるノートと、HBの鉛筆だけだ。私は机の上に広げたノートに向かい、たった一つのことを考え始める。それについて必要と思われる事実を書き出し、分析、判断し、答えを探る。

取り組むべき問題は数多くある。

私は何故、今まで生きたのか？

何を求め、何を必要としたのか？

何故、他人と関係を持たなければならないのか？

何故、一人で生きて行くことはできないのか？

何故、不完全な関係しか持つことができないのか？

何故、拒絶するのがわかってるのに、他人を求めるのか？

何故、何故、何故、何故……わからないことは余りにも多い。

私は何故、ここまで苦しみながら生きねばならないのだろうか？

いつの間にか時間は経ち、身体も精神も疲労する。

夜が来るのは恐ろしい。

夜の訪れと共に心の闇が蠢き、私を虚無へと連れ去ろうとする。少し待ってはくれないだろうか。

どんな答えが出るかはわからないが、それまでは待っていて欲しい。私にできることは昔も今も、何かを観察し、分析することだけなのだから。

闇が深くなつた頃、ケンジが食べ物と切らしていた雑貨を買って帰ってくる。私は唯一の他者であるケンジを確認し、自分の存在を確認し、心の闇を消去する。

不思議なことに、ケンジの存在は私の心の闇を拭い去ってくれるのだ。

だから、私は今日も生きて行くことができる。

……他人を利用しながら。

「今日ね……現場で嫌なことがあつたんだ」

夕食の後、ケンジは私の隣に寝そべりながら言った。

「どんなこと？」

私は彼の頭を撫で、身体を寄せた。

「あのね」

ケンジは私を見て口を開き、不意に微笑んだ。

「変だな。帰るまで、すつごく怒ってたんだけど……お腹がいつぱいになってアヤナの顔を見たらどうでもよくなっちゃった」

「そうなの？」

「うん。変だね。帰る途中さ、ずっとアヤナに聞いて欲しかったのに……変だよ」

「よくあることよ」

私は微笑んだ。

「悩み事とか、気にしていることって、案外そんなものなのかもね」  
「うん」

ケンジも微笑んだ。

「でも、それはアヤナがいてくれるからだよ？ アヤナがいてくれるから……ありがとうね。アヤナ」

「ありがとう。ケンジ」

私はケンジの額にキスをした。

やがて私達の唇は引き合わされ、二つの影が重なった。

夏の夜風に揺れるカーテンの向こうに、幾多の星が瞬いていた。

この辺りは空気が澄んでいる為か、星が綺麗に見える。  
明日も暑くなりそうだ。

思うに、人間に自尊心は不必要だ。

ほんの僅かな所有物や経験に、後生大事にするほどの価値があるとは思えない。自分の個性だと思っているものの殆どは、所属する共同体から抜き出した知識の集積に過ぎず、あとはその時代に影響された細部の装飾のようなものだ。

本当に独自のものなどありはしない。所詮は時の流れに巻き込まれて消えていくもの、その程度の存在だ。

生命活動の素となる炭水化物、タンパク質、脂質、その他の栄養分。これらが必要な量は限られており、過剰に摂取しても無駄なだけだ。行き過ぎると不健康ですらあるし、逆に高価なだけで栄養分の少ないものをわざわざ買う必要などない。

車や通信機具、コンピュータなども、生活や仕事の上で作業を能率的に進める為に最低限必要なものさえ揃えば、後は躍起になって買うほどのものでもない。社会における地位もまた、その者の実力に付随するものであるべきだ。実力もないままに地位のみを求めるのは間違っている。

いや、実力がないからこそ、高い地位を求めるのかもしれないが。本当に価値あるものとは何か。それは、生物としての人間が必要とするもの。それがなくては生きてはいけないものだ。

携帯電話やパソコンがなくても生きていける。

テレビやシャンプーがなくても死にはしない。

なくても生きていけるのなら、そこに本当の価値はない。確かにそれらは便利だし、その存在や使用者を否定したりはしないが。少なくとも、所有する事のみで人間の価値が上がるとは思えない。

そう思う。

おそらくは、前述した私の意見とは異なる意義を持つ価値も存在



するのだろう。だが、私にはそれが何かはわからない。  
少なくとも、自分のちっぽけな自尊心のみを大事にするのは間違っている。

十数年もすれば意味を失うだろう最先端の知識や、つたない技術、金に任せて手に入れた所有物。

何処に価値があるというのだろうか？

本当の価値は別にある。

いや、あるはずだ。

私は自分自身を尊重する事を否定する。

ちっぽけな自尊心を尊重する事を否定する。

そのみを追い求める人生を否定する。

それによってしか生きていけない人間を否定する。

自分自身を愛したくない。

少なくとも、そのみを愛したくない。

本当に必要なものは別にあるはずだ。

自尊心を持つ事が悪い事だとは言わない。

だが自尊心ゆえに人生が制限されるなら、そんなものはいらない。  
自尊心と引換えに自由が奪われるなら、そんなものは願ひ下げだ。  
生きる事を苦しまねばならないなら尚更のこと。

私達はもっと自由に生きるべきだ。

私はそう思っている。

/

最近になって、ケンジは携帯電話を使い始めた。

私がここに来た頃、彼はアパートに一台備付けの古めかしい黒電話を使っていた。だがそれでは仕事にも不便だろうということで、

私が携帯電話を持つことを提案したのだ。ケンジは電化製品が苦手なので最初は難色を示していたが、実際のところ彼自身もアパートと現場の距離に不便を感じていたらしく、しぶしぶながら使い始めた。

最初の頃は出先で使い方を忘れて、路上の公衆電話を使ったりしていた。何かにつけてアパートに、おそらくはわざと忘れたりして暗に使うのを嫌がったりもしたし、かかってきた電話に出ないこともあった。その内、かかってきた電話にはきちんと対応するようになったが、これは後で電話してきた人に文句を言われるのが嫌だったからのようだ。

どうやらケンジが電化製品を嫌うのは、使いこなせるようになるまでに時間がかかるのは勿論のこと、何よりも他人の目を過剰に気にしてしまうせいらしい。直接聞いたわけではないが、過去、どうやら彼のそばにはいつも、彼がきちんと物を扱えるかどうかを気にかける者がいたようだ。

誰だって苦手な事を練習しているときに気にされるのは嫌なもの。特にケンジはその思いが強く、他人に気にされると本来の実力さえも発揮できないようだった。

私は彼に携帯電話を持たせてからは、なるべく構わないようにした。手順を間違えても騒がず、間違えた一つ手前の状態に戻し、すぐに返す。彼がアパートに携帯電話を忘れていけば、次の日には黙って彼の鞆の中に入れておく。

彼が初めて自分で携帯電話を使ってアパートに電話をかけてきたのは、そんなやり取りが一週間ほど続いた次の日の事だった。その時は私の方が戸惑ってしまい、逆にケンジに文句を言われてしまった。

最近では携帯電話を使うことに抵抗を感じなくなっただけで、逆に私に自分が使っているところをちらりと見せたりする。どうやら、自分が携帯電話を使えるところを見て欲しいらしい。それなのに、私がそれに気づくと、こそこそと物陰に隠れたりする。

そんな時の彼の仕種は、  
たまらなく可笑しかったりする。

現場で揉め事があつた日の翌朝。

目を覚ますと、ケンジは布団の上に取り上がり携帯電話で誰かと話をしていた。私が目を覚ましていることには気がついていないらしく、頷いたり手を振ったりしながら小さな声で会話を続けている。やがて電話を切った彼は、私が起きていることに気がつき、気まずそうな顔をした。

「おはよう、ケンジ。今の電話は何？」

私はケンジが携帯電話と私を気にしているのがわかったので、そのことには気がつかないふりをして、わざと眠そうに電話の内容のことを訊ねた。

「うん……親方から……現場のこと」

ケンジはたどたどしい手つきで携帯電話を枕の下に隠しながら答えた。

「親方さんが、何だつて？」

私は彼の隠蔽工作につき合うことにした。彼の微笑ましくて一生懸命な姿を、もう少し見ていたかったからだ。

「……えっと……昨日、揉めたことが長引きそうだって」

「それで？」

「えっと……今日は来なくていいってさ」

話すことよりも隠蔽工作に力と集中力を傾けながらケンジは答えた。

「今日は休みなんだ？」

私が訊ねると、ケンジはしばらくぼんやりした後、ああそうかと呟いた。どうやら隠蔽工作に夢中で、今までその事に気がついていなかったらしい。

「そっか。今日は休みなんだね」

彼は嬉しそうに布団に潜り込んだ。

「休みだ、休み！」

学校が休みになった小学生のように喜ぶケンジの隣で、私は彼の給料について考えていた。ケンジの仕事は基本的に日当で給料を支払う方式だ。今日の分の給料はどうなるのだろうか。

私はケンジの『親方』という人物について何も知らないが、多少感情的になる時があるとはいえ、ケンジに対してもきちんと給料を支払っているのだから、良識ある人物ではあるようだ。現場のこともよく知っているわけではないが、依頼主と揉めれば一時的に作業を中断するのは至極当然のことだし、そういった前例もあるだろう。取りあえず、次に現場に行く時は周りの人の話を聞いて、今日の分の給料を貰えるのかどうかを確かめるように言わなくてはいいないだろう。そんなことを考えていると、布団の中でケンジがじゃれついてきた。

「今日はゆつくりできるね」

嬉しそうにケンジが言った。

「そうね」

私は苦笑して、思考を中止することにした。

「それにしても、やっぱり持つてると便利よね」

彼の上に覆い被さりながら耳元で囁く。

「何が？」

「……携帯電話」

私は手を伸ばして、ケンジが枕の下に隠した携帯電話を抜き取った。ケンジの身体が緊張したのがわかった。

「私が小さい頃には考えもなかったわ。こんな風に電話が使えるようになるなんてね。最近じゃ皆使い始めて、何処にいても着信音が聞こえるから鬱陶しかったけど……あると便利だってことは認めざるを得ないわね」

私はふて腐れているケンジに微笑んだ。

「テレビのリモコンと同じね。別になくてもやってこれたし、なくなっても深刻な事態が引き起こされるとは思えない。でも、あると

やたらと便利だわ。こうやって人間は簡略化を求め、怠惰になっていくのね」

「使えって言ったのはアヤナじゃないか……」

ケンジは反論した。

「それにアヤナが、よくわからない難しい言葉を使うのも嫌いだ」

「ごめんごめん」

私はふざけるのをやめてケンジにキスをした。

「でも、こうやって布団から出ないで電話ができるっていうのは便利よね。面倒な事に二人の時間を取られなくてすむもの」

「今日はずっと一緒にいられるよ」

「だからこそよ」

私はケンジの瞳を覗き込んだ。

かつてこれほど、誰かの瞳を長く覗き込んだことがあるだろうか。これほど言葉に頼らずに、心を通わせた事があつただろうか？ 少なくとも彼に出会うまで、私はこの世界にそんな方法がある事さえ知らなかった。私達は言葉を使う事なく思いを伝えあうと、深く結び合わさった。

ふと、自分の手に携帯電話があることに気がついた。

少し指先を動かして番号を押せば、大学の研究室に電話をかける事ができる。

私は少し躊躇った後、電話を離し、更に深くケンジの愛撫に溺れた。

「外に行かない？」

朝食の後、ケンジが言った。

「だって、こんなにいい天気なんだからさ」

窓の外には青空が広がり、建設中の赤い鉄筋の上に入道雲が発達している。

「……そうね。たまにはいいかもね」

私は頷いた。

窓から光が射し込み、部屋の輪郭を白く輝かせていた。

夏の明暗には艶かしい所がある。光と闇は液体のように波打ち、揺らめきながら決して混ざりあう事はない。

光は光として存在を続け、闇は闇として存在を続ける。

夏の闇は海原のように広がり流れていく。深くなるにつれて微妙に色を変え、その奥を見通す事はできない。

夏の光は強いものではない。ただ量が多いただけだ。

幾つもの光の粒子が結合してヴェールを作る。光のヴェールは水面を舞う雪のように漂い、積み重なっていく。幾重にも幾重にも積み重なり、あらゆる輪郭を消していく。冬の光が全てのものを鮮明にしていくなに対して、夏の光は全てのものの姿を曖昧にし、溶かしていく。

部屋にある食卓の上にも光のヴェールが舞い降りてきた。光は漆黒の表面を漂い、硝子のグラスに打ち寄せ、碎けた。周囲に打ち返す光が波紋を起こし、渦となる。私が気紛れにグラスを指で弾くと、光の波紋が揺れた。

昼食用の簡単なお弁当を作って、私達は外に出た。

朝から干しておいた白いワンピースは陽光の匂いを漂わせ、暖かな肌触りが心地よかった。何かを身に纏っているのはいい気分だ。自分の体が確かにそこにあるという事が感じられ、肌と擦れあう生地が実感を確かなものにしてくれる。

私は子供っぽい気分になって、バレリーナのように廊下で一回転してみた。

ワンピースの裾が広がり、円を描く。

少しバランスを崩して止まると、勢いのついた裾が体に巻きついた。

……私はおかしなことをしている。

子供っぽい気分と表現したが、それは嘘だ。私は子供時代にこんな気分になったことはない。まして気分浸った行動など人間の奇妙な習性の一つとしか思っていなかったし、そんなことをする必要があるとも思えなかった。

今でも必要性を問われれば何処にもないと答えるだろう。

だが、何となくわかる気がする。理論的に説明することはできないけれど、実感として理解できる。どんなプログラムや経験が組み合わさっているのか、どのような環境要因が働いて引き起こされるのかはわからないが、確かに『何となく長めのスカートで一回転してみたくなる時』は存在するのだ。

ケンジは下に降りて、管理人の老夫婦と話をしていた。

ここに来て一ヶ月、何度か彼等と話す機会があったのだが、私は未だに彼等が何を考えているのかわからない。全く意思の疎通が図れないし、行動パターンが読み取れない。

いや、生活の形態という意味でのパターンならば、わかり過ぎる程にわかっている。彼等は絶えず離れる事なく、常に同じパターン



で生活している。私がわからないのは、如何にして彼等がその生活に至るようになったのか、彼等が何を考えながら同じ行動を反復しているのかだ。

不思議な事に、ケンジは彼等と話すことが出来る。

傍目から見る限り、全く噛み合っていない言葉のやり取りなのだが、ケンジは彼等と意思を疎通し、会話をすることが出来る。彼は老夫婦から夕食を分けてもらったり、そのお返しとして、アパートの壊れた所を修繕したりもしているのだ。

これに限らず、ケンジにわかつていながら私にはわからない事はかなり多いようだ。

ケンジが老夫婦と話している間に外に出ることにした。薄暗い廊下を横切り、玄関の扉の前に立つ。

扉を開けた私の目の中に飛び込んできたのは、凄まじいばかりの光だった。

白く輝く砂利道、黒く影となった建造物。幾重にも積み重なったヴェールは全ての輪郭をばかし、白と黒以外の色を消し去ろうとしていた。むせ返るような熱気と砂煙がなければ、私はその景色を雪景色だと思ったかもしれない。

真夏の太陽は南東の方角から照りつけ、乾燥した砂利道に短い影を作り出している。しばらく歩いてから振り返ると、追いついてきたケンジの向こうに真っ青な空と、灰色のアパートが見えた。

「綺麗な空」

私は向かい風の中、乱れる髪を押さえながら空を見上げた。ケンジから借りた麦藁帽子がなだらかな半円を描き、青の絵の具を塗りとくったような空を切り取っている。

「とても深い色……鮮やか過ぎて、暗く見えるくらい」

「変な言い方」

「そうね」

私はケンジの姿を見つめた。白のＴシャツと青いジーンズ、そして頭には私と同じ麦藁帽子を被っている。日焼けした肌が白いシャ

ツと対照的で、顔にかかった影は彫の深い顔立ちを際立たせている。小麦色の肌に白いシャツと麦藁帽子、白く輝く砂利道と夏の青空。まるで、一枚の絵のような光景。

私はこの時間を切り取って、永遠に残しておきたいと思った。今ならわかる。どうして人間は絵や写真という形で多くの瞬間を切り取り続けたのか。そして、ファウスト博士が何故、悪魔との賭けに負けたのかも。

「アヤナ……どうしたの？ ぼんやりして」

「別に何でもないわ。風景に見とれてただけ」

ケンジは私の答えに周囲を見渡し、変なの、と呟いた。彼にとってはこの風景は見慣れたものでしかないのだろう。

「なんかさあ……アヤナ、最近変だよ？ なんかぼーっとして」

「そうかな？」

「アヤナはさ、オレより頭がいいんだから、オレみたいにぼーっとしてちゃダメだよ」

「そう？」

「そうだよ。そうじゃないと病院に入れられちゃうよ？」

「……うん」

「気をつけなきゃ」

「うん」

ケンジは真剣な顔で言った。

「確かに最近、私の頭は変になったかもね」

私は目を伏せて呟いた。

「ほんの些細なことでもとても嬉しくなったり、吃驚したり……今までとはまるで違う。このままどんどん感覚がおかしくなっちゃうのかしらね」

「よくない。よくない。そんなの病院に入れられちゃうよ」

ケンジは慌てたように声を上げ、彼が昔に出会ったという、余りに多くのものが見えすぎたり、聞こえ過ぎたりしてしまった人達のことを話してくれた。彼が昔の話を自分からするのは初めてだ。

「だから、よくない。皆、病院で死んじゃうから」

「大丈夫よ、ケンジ。私は病院に行かないし、死んだりもしないわ」

「本当？」

「本当よ」

確かに時々、自分でもよくわからない感情に胸が張り裂けそうになる。でも、ケンジと話したり体に触れたりするだけで、その不安は治まってしまう。

だから、私は大丈夫だ。

私達は建築途中のマンションが立ち並ぶ住宅予定地を歩いた。完成すれば最新の設備を誇ったであろう建造物は、与えられた目的を果たすこともできずに立ち尽くしている。

歩きながら、私は妙な違和感を覚えていた。建設途中で放棄され、誰もいないせいかもしれないが……仮にこれらのマンションが完成していたとしても、果たして人間が住めただろうか？

最新の設備と環境デザイン。それは何処かチグハグで、不格好に見えた。

「アヤナ。気をつけた方がいいよ」

不意にケンジが私の腕をつかんで引き寄せた。

足元に目をやると、いつの間にかアスファルトで舗装された道路は消え、目の前に大きな地割れが広がっていた。

それは大地に穿たれた完全な闇。

世界に突如として出現した空白。

その巨大な裂け目を見た瞬間、思考が寸断されたような気がした。

「工事の途中にできたんだけどね。ものすごく深い地面の……裂け目って言うのかな？」

ケンジはからかうように付け加えた。

「そう言えば、アヤナは前にもここに落ちかけたね」

地割れは小規模な広場に存在した。小さな広場を中央で分断するように広がり、最も幅広い部分で5〜6m程の幅がある。地面にほぼ垂直に断面が伸び、昼間だというのに底が全く見えない。

一月前、私はここに落ちかけた。帰宅途中だったケンジは、私がフラフラと道を歩いているのを見かけたそうだ。ケンジの言葉を借りると『ぜんぜん、周りを見てなくて』『一人でブツブツ喋ってた』

らしい。不信に思ったケンジがついていくと、私がこの裂け目に引きずり込まれるように落ちかけたので、慌てて助けた……ということだ。

彼の行為には感謝する。

正直な話、あの時の自分の精神状態には恐怖さえ覚える。

あの時のことについては後になって少しずつ記憶が戻ってきた。だが、あの女が現れたことは本当に起きたことだとは思っていない。死に直面した人間は自分の分身を見るという話があるが、似たようなものなのかもしれない。しかし、一つだけはっきりとわかることがある。

私はあの時、本当に死の間近に迫っていたということだ。

そして今でも、死から遠ざかったとは思っていない。

死は絶えず物陰に潜み、隙あらば私を闇の淵へと引きずり込もうとする。

私には目の前の断裂が、本当に地の底まで続いているように思えた。

「ねえ、この裂け目……埋めてしまわないの？」

「あ……うん。工事の時に出土とか中に捨ててたな。……でも変なんだよ」

「何が？」

ケンジは私の緊張には気づかぬまま話し始めた。

それは初めてこの裂け目が現れた時のことだった。

「最初にはさ、本当に小さかったんだ。工事の途中で誰かが見つけたんだけどね。なんだろうって思ってたら、いきなり崩れて今の……半分の半分くらいの大きさになったんだ。でね、これは危ないぞってことになって柵を作って置いておいたら、次の日にはもっと大きくなって柵が落っこちてたんだ。それから変なんだ、色々と土とかゴミとか捨ててるのに、全然埋まらないんだ。トラックが何台も土を捨てたこともあったんだよ？ でも、ますます大きくなっ

たみたいだね。それで、皆がどうしようって相談してるうちに工事が中止になったんだ。久しぶりに見ると、また大きくなってるように見えるなあ」

ケンジは興味深げに裂け目の中を覗き込んだ。

「気をつけて！」

私は彼の腕を掴み叫んだ。

「大丈夫だよ、アヤナ。それよりアヤナの方が怖がってるんじゃない？」

ケンジがからかうような目で私を見る。

「そうね……正直、恐いわ」

私は彼の腕に掴まりながら呟いた。ケンジの目が優しくなり、遅い腕が私を支える。

「大丈夫だよ。二人もいるんだから落ちないよ」

ケンジは自分の言葉が少しおかしいのに気がついた。

「えっと、そうじゃなくて……二人でいるんだから大丈夫だよ……かな？」

「……そうね」

私は何とか微笑みを作った。

「こっちから回ろう。それなら大丈夫だよ」

ケンジは私の手を取って歩き始めた。それから何気なく足元の小石を拾うと、裂け目の中に投げ入れた。

「音は……しないね」

私は出来る限り裂け目の方を見ないようにしてケンジと共に進み始めた。

しかし私には、果てしない暗闇の中を何処までも落ちてゆく小さな小石の存在が、はっきりと感じられた。

マンションの立ち並ぶ街角を曲がった途端、急に視界が開けて緑が現れた。

そこは先程よりも大きな広場で、石畳で舗装された空間の中央には人工の池が設けられている。噴水は動力を断たれ、湛えられた水は時折吹く風に揺れるばかり。しかしそれらは、その場を支配する違和感の前ではほんの些細なものに過ぎなかった。

敷き詰められた石畳は池を越えた辺りで完全に途切れ、その先の地面は雑草の生い茂る砂地に姿を変える。広場の周囲を取り巻く建造物も同様に、石畳が途切れる辺りで消え失せていた。

そう、この広場は池を越えた辺りから、全くの荒野なのだ。

「吃驚した？」

嬉しそうな声でケンジが言った。

「これは……一体、どういうわけ？」

正直、私は戸惑っていた。

「えっとね、ここから先は別の会社がすることになってたんだ。で、その会社が遅れたんだよ。……わかる？」

ケンジの話を要約すると次のようになる。

このニュータウンの開発には幾つもの建設会社が関わっていたらしく、この広場がその分担区域の境界線だったのだそうだ。ケンジの働く下請け会社を含む建設会社らは予定通りに計画に着手したが、一社だけ、なかなか工事を始めなかったらしい。共同開発社と連絡を取らないままに作業を開始する辺り、いかにもこの国の企業らしいが……おそらくその会社は、この計画は頓挫すると見抜いていたのではないかと思う。工事が遅れているふりをしながら様子を伺い、そして実際に開発は中止になった。

「森が動かぬ限り、そなたは王でいられるだろう」

私はマグベスの魔女のように呟いた。

荒野の向こう側には手がつけられていない森がある。この無機的な景色の中、森は存在感に満ちていた。雑草や灌木の先兵を野に放ち、今まさに失われた領域を取り戻そうと進軍を始めたばかりだ。

天頂に差し掛かった太陽は南に広がる荒野の上にあり、名も知れぬ雑草や灌木の葉を美しく輝かせている。木々は黒々と覆い茂り、アスファルトで固められた細い水路が、列を成す敗残兵のように荒野を森へ向かって流れていた。

「ここは暑いね」

池のそばまで歩いてきた私は靴を脱ぎ、水面に揺らめく光の網目に足を滑り込ませた。一瞬、身の引き締まるような冷たさに襲われたが、しばらく我慢すると外気に触れない部分がほのかな暖かさに包まれた。

「ケンジも来ない？」

ワンピースの裾を持ち上げながら池の中を歩く。ケンジは頷くと慌てて靴を脱ぎ始めた。そんなに急がなくてもいいのに。苦笑し、ふと水面に視線を向ける。そこには、もう一人の私の姿があった。思ったより髪が伸びた。少し痩せただろうか。肌は不健康に白い。

外見的な変化は少ないが、少し前までインテリ顔をして研究所にいた女には見えない。随分と変わったものだ。そう思うと急に笑みが込み上げてきた。同時に、水面の女も口元に笑みを浮かべた。

その笑みは、悪夢の中で見たあの女の笑みにそっくりだった。

バシャバシャと水音がして、水面が乱れた。

次の瞬間、何か大きなものがぶつかってきて、私は水中に倒れ込んだ。

学生時代は水泳の時間は貧血だと口実をつけてよく休んでいた。水の中は嫌いだ。起き上がって咳き込み、顔にかかった髪を払うと、同じくびしょ濡れになったケンジが申し訳なさそうな顔をしていた。短い髪から雫が垂れ、うなだれた子犬のような瞳にかかる。

「ゴメン……アヤナ……驚かそうと思ったたら滑っちゃって……」



ケンジは体を起こして座り込むと、上目遣いに私を見て、怒る？と訊ねた。

「怒ってるわよ」

わざと不機嫌そうな声で呟く。実際には彼の顔を見ているだけで笑い出しそうだった。

「ゴメン、アヤナ……」

「許さないわ」

私はケンジを手招きした。彼がびくびくしながら私に近づく。

「許さないわよ？」

手で水をすくって思いきりケンジにかける。彼は初めきよとんとしていたが、事態を把握すると笑いながら私に水をかけ返し始めた。濡れた衣服は池の外に放り出され、夏の陽射しを浴びて乾くのを待っている。池の中の私達は、昼下がりの青空の下、一つになっていた。照りつける太陽の熱と、ゆっくりと伝わってくる彼の体温。私は自分の内側に彼を感じ、自分を抱き締める確かな存在として彼を感じた。身体中の接触部分を通して、彼のすべてが私の中に流れ込んでくる。

「ケンジ……」

彼の肌に身を寄せながら、何度もその名を繰り返す。

彼の体温と感触だけが私の全てだ。

「アヤナは時々、違う人の名前を呼ぶね」

私を愛する動きを止めて、ケンジが呟いた。

「……え？」

私の肩を強く抱いて、ケンジはもう一度言った。

「アヤナは……時々、オレと一緒にいるときに別の人の名前を呼ぶね。オレと同じ名前だけど、別の人だ」

太陽が強く照りつけているはずなのに、急激に体温が下がっている。

「な、何のこと……？」

「嘘をついてもダメだよ。アヤナは頭いいけど、嘘をつくのはヘタだね。すぐに表情が変わる」

「そ、そんなこと、ないわ」

更に体が冷たくなるのを感じた。結びついた肉体は完全に切り離され、抛り所を失った身体は前のめりに倒れて水底に両手をつく。

そんな私をもう一度抱き締めて、ケンジは囁いた。

「わかるんだよ。なんとなく……ね」

「ケンジ、私は」

「わかるんだ、なんとなく。言葉にするのは苦手だからうまくできないけど、アヤナが感じてることとか……すっごく苦しんでることとか……どうして僕のところに来たのかとか、どうして僕なのかと暮らしてくれてるかかってこともさ」

「……わかるのね」

「うん」

「わかってたんだ」

「うん」

ケンジは微笑んだ。

「今までアヤナみたいに僕のこと、気にしてくれた人はいなかったしね。どうしてかなって思うじゃない？」

ケンジは小さく肩をすくめた。それはいつもの子供っぽい仕草で

はなく、とても大人びた……多くの辛い悲しみを背負ってきた者のそれに見えた。

私は理解した。何故、私がこれほどまでにケンジに惹かれるのかを。彼といるときだけは他の人間から受けるような違和感を覚えないう理由を。それは彼が自分と同じ、傷ついた人間だから。私と同じく人間の社会に馴染むことができない者だからなのだ。

「貴方との生活は本当に楽しかった。こんなに楽しくて嬉しかったのは生まれて初めてだって思うくらいに。私は貴方を必要に思っている。でも私は」

「アヤナはどうしてここに來たの？」

私の言葉を遮り、ケンジが訊ねる。

「……とても大切な人がいたの。その人は私の心の中で、とても大きな場所を占めてたわ」

「失ったんだね」

ケンジは静かな声で呟いた。

「そう」

片手で水をすくう。

「彼はとても多くの人に愛されていた。沢山の人に、多くのものを与えられる人だった。彼がいた証はその人達のものよ。私が持っているのはほんのわずかな思い出だけ。でも、それさえも段々と消えていくわ」

手のひらの水は光を受けて、輝きながら消えていった。

「彼の姿や彼の声、手の温もり……それらは確かに私の中に在って、私が苦しいときには支えてくれたの。でも今は、それが本当に在ったものなのかわからない。あの時、私と彼が同じ場所に存在したという事実にすら確信が持てないわ」

「オレも昔、大切な人がいなくなつたよ。だから、アヤナの気持ちがかかるよ。……まあ、アヤナと僕とはさ、別の人間だからカンペキってわけにはいかないけどさ」

ケンジは私の手を握った。

「オレさ……アヤナと違って馬鹿だし、何もよくわからないけどさ。こう思うよ。オレは確かに自分がここにいて。それでオレはアヤナの手を握ってる。オレは確かにアヤナがここにいてと思う。手も握れるし、話もできる。頭が悪いから時々、アヤナの言ってることとかわからないけど、それでもアヤナと話したり、一緒に寝たりすることはできる。だから、オレはアヤナが確かにいると思う。ってことは、アヤナはやっぱりここにいるんだよ」

ケンジは真剣な表情で語りかけてきた。

「昔……大好きだった人がいなくなっちゃったんだ。その時、オレもすごく哀しかった。どうしていいのかわからなくなって、なんか自分が本当にいるのかわからなくなっちゃったんだ。オレ、馬鹿だから、自分がいるのかどうかもわからなくなっちゃったんだって思ったよ……それからずっとそんな感じがしてたんだ。自分がどこにいるのかわからない感じがしてた。みんなはオレが本当に馬鹿になったって言ったし、本当にわからなくなっちゃったんだ」

ケンジは今にも泣き出しそうな瞳で私を見つめた。

「でも、アヤナと会えて、今まで暮らして……すごく楽しかった。あの人がいた頃と同じくらいに楽しかった。アヤナといるときは本当に自分がいるってわかるんだ。あの人がいたときと同じくらいにわかるんだ。だから」

ケンジは言った。

「だから、アヤナは自分がいないなんて言わないでよ。アヤナがいなくていいことは、オレもいないってことになっちゃうよ。だから、そんな哀しいこと言わないでよ。アヤナは今、ここにいてよ。オレにはわかるんだ」

ケンジは私の手を自分の頬に寄せ、そのままじっと動かなかった。

ただ……彼の目から流れる暖かな涙だけは、私の手を伝って流れ続けた。

その時、私の胸を満たした感情が何だったのかは表現しがたい。

私は彼を抱き締めていた。それは相手の存在を腕の中に抱き留める為のもの。私は自分自身の快楽を求めなかった。例え、ケンジの体が燃えさかる炎の塊でも、凍てつく氷の刃でも構わなかっただろう。私がその時目的としたのは、ケンジを抱き締めること。炎よりも激しく、氷よりも硬く、それでいて酷く脆い彼の存在を抱き締めることだった。

「大丈夫。大丈夫よ、ケンジ。私はここにいる。私はここにいるわ。ケンジ、貴方が望むなら、望んでくれるなら、私はずっと貴方の側にいるわ」

「本当に？」

腕の中でケンジが呟いた。

「本当よ」

私はしっかりとケンジを抱き締めた。

奇妙な話だ。本当に誰かが必要としているのは私の方なのに。

ケンジがいないと生きていけないのは私の方なのに。

私は今までにない強さでケンジを抱き締めた。

ケンジは私の胸に唇を寄せた。軽い痛みを伴って彼が私の胸を吸う。

痛み。それは私がここに存在する証拠。私が誰かと繋がっている確かな証拠だ。

太陽は天頂を少し過ぎた所にあつた。夏の空の遥かな高みから、太陽は私達の世界を見下ろしている。構うことはない。私はここにいる。嘲笑うなら嘲笑うがいい。私はここにいる。今も地上に縛りつけられ、這いつくばり、つまらない感情に囚われ、苦しんでいる。空へと舞い上がる翼もなく、全てから自由になれず、流されることもできない。だが、私はここにいる。

私は生きている。

私達は帰路についた。

広場からアパートまではかなりの距離があると思っていたが、実際にはケンジが遠回りをしていただけだったらしい。来たときは別の道を通って三回ほど交差点を曲がると、私達はアパートに続く坂道に出ることができた。こんなに近かったの、と呟くと、ケンジの私の手を握り締める力がほんの少しだけ強くなった。

私はその指先から、抗議と照れ隠しの意志を感じ取り、不粹なことを言うのをやめた。

私達の結びつきはかつてないほどに強くなっている。そばにいて手を握っているだけで、こんなにも多くのことがわかる。彼の鼓動や筋肉の動き、唇から漏れる呼吸の音、風にそよぐ髪の毛の動き、彼が何を感じ、何を伝えようとしているのか……。

薄い粘膜を擦り合わせ、汗みどろになって得られる安心感。これまで多くの者と交わり得てきた誰かと直に繋がっている感覚は、その場限りのものだった。だけど今、私達は確かに繋がっている。それはどんな快感よりも深く、穏やかなものだった。

誰かと心を通わせることは、昔の私にとって恐怖以外の何物でもなかったはずだ。心の中のことを曝け出すことは、一番弱いところを傷つけられること。そう思っていた。私は誰も信用せず、誰も愛さなかった。そして何より自分自身が嫌いだった。

あの頃から私はどのくらい変わったのだろうか？ 過去と現在とでそれほど大きな違いがあるとも思えないが、理解したことはある。それは自分が取るに足りない存在だということ……この身体も知識も隠し通してきた感情も、何も特別なものではないということ。

私もごく一般の、ありふれた人間の女だということだ。

かつて祖母との別れを経て手に入れた、私は化け物だという概念は既にある。私が人間であるならば、これまで疑問に思っていたす

べてのことを割り切ることができる。くだらないと思っていた人間の営みを行うことができる。人間の生活や文化にどれだけの価値があるかはわからない。それは後の世の人間が、絶対的な第三者の評価によってしか定めることはできないだろう。

しかし、意味はある。人間が人間と共に生きていくということには意味がある。どんなに馬鹿らしく思えても続けることには意味がある。

何故なら、人間に幸せを与えることができるのは人間だけなのだから。

人間が人間としての幸福を得ることができるのは、人間社会の中だけなのだから。

「くだらない」

私は呟いた。

「何が？」

ケンジが訊ねた。

「ううん。全てには意味があるんだなって言ったのよ」

私はケンジの腕にもたれかかった。

「変なの」

ケンジは軽く私の体を支えた。

私達の前にはなだらかな坂道が続いている。剥き出しの砂利で覆われ、太陽の光を一杯に浴びて輝いている。私達は坂道を歩いていく。

アパートに向かって。

私達の家に向かって。

/

夕陽の残照が消え失せ、暗い海のように闇が押し寄せた。私達の部屋には明かりがつき、いつもの生活が営まれた。

私は軽くかけ声をかけて手首を返した。黄色い卵がフライパンの

上で翻り、赤いケチャップライスを含む。今日のオムライスは上出来だ。今までに作った中では一番だろう。私は満足した。ただ、昨日も今日もオムライスを食べるというのは、栄養学的にどうなのだろう？ 野菜は多く入っているが、もう一品、何か作るべきではないだろうか。そんなことを考えていると、部屋の中にノイズの混じった音楽が流れた。

「ラジオ、直ったのね」

一週間程前、ケンジは壊れたラジオを拾ってきた。理由は特にないようだ。彼は時々唐突な行動を取る。拾ってきた時はしばらくじくり回していたが、それから部屋の間転がっていた。それが今、テーブルの上で、途切れ途切れに音を出している。

「うん……触ってたら、なんか直った」

自分でも戸惑ったようにケンジが呟いた。キョトンとした顔で私を見ている。

「いいことじゃない」

やがて周波が完全に一致したのか、ラジオは途切れることなく音楽を流し始めた。

「ここまで電波は流れているのね」

食事の途中、久しぶりに聴く音楽に耳を傾けながら私は呟いた。

「そりゃそうだよ。駅についたらコンビニだってあるもの」

ケンジがオムライスを平らげながら答えた。

「そんなにかからないよ。一度、アヤナも行けばいいのに。便利だよ？」

考えてみれば、ここはベッドタウンの一つとして作られた場所なのだ。テレビもつくし、携帯電話だって繋がる。電気もガスも水道も通っている。階下の管理人夫婦だって、週に一度は駅の辺りまで買い出しに行っているのだ。

「アヤナはここを無人島みたいに思ってるんじゃない？ ほら、海賊船長がいるような所」

ケンジは自分で直したラジオにも興味を示したようではなく、オ



ムライスを食べることに集中していた。

ここは無入島ではない。以前に暮らしていた街からも決して遠くはない場所なのだ。そして、私がここに来てから一ヶ月しか経っていない。私はまだ、今まで属していた人間社会との繋がりが完全に断たれたわけではないことに気がついた。

「ここに来る前に仕事をしていたの」

私は食事の手を止めて呟いた。

「……どんな仕事？」

「大学で色んなことを調べたりする仕事よ」

「ああ、アヤナってそんな感じだよね」

驚いたようでもなくケンジは言った。

「アヤナ、頭がいいから絶対に科学者だって思ってた。ロボットとか、車とか作るの？」

「そういう方面じゃないんだけどね」

「ふーん」

その時点で、私の話は彼の知識の範囲を越えたらしい。ケンジはそれ以上詳しいことは聞かなかった。

「それでね。私はその仕事が好きだったの。自分の実力を発揮できる仕事だったわ」

言ってから、私は自分がどれほど研究を続けることで精神を安定させ、喜びを得ていたかを思い出した。

「だったら……続けなきゃ」

ケンジは何気なくそう言った。

「好きなんだったら、戻って続けなくちゃ。それとも、何か戻れない理由でもあるの？」

「理由はないわ。私が勝手にいなくなっただけ。もう、皆は私のこと許してくれないかもしれない」

「それはわからないよ。会って話さなきゃ。そうしないと許してくれることだって許してくれないし、もしかしたら許してくれるかもしれないよ？」

「……そうは思わないわ」

「どうして？」

「きっと私が弱いからよ」

私は自嘲気味に呟いた。

「そんなことないよ。そう思ってるのはアヤナだけだよ」

ケンジの口調はいつになく強く、真摯な瞳がまっすぐに私を射る。その時、ラジオから流れる曲が変わり、ケンジの注意が逸れた。

南方の民謡に似た旋律を奏でる美しい曲。ケンジは目を閉じて耳を傾け、そのまま聞き入っていた。

「ケンジ？」

声をかけると、ケンジは忘れていたかのように私を見た。

「……ごめん。昔、聞いた曲に似てたんだ」

ほとんど囁くような声で、ケンジは言った。

そして彼は、急にこんなことを言い始めた。

「ねえ。ずっと前、オレがアヤナに聞いたことがあっただろ？ ほんら、自分が何のために生きているのかわからない……って」

「そう言えば、そんなことがあったわね」

「オレ……それからずっと考えてたんだ。自分が何の為に生まれてきて、何の為に生きているのかってね。で、オレは思うんだ」

「どう思うの？」

「多分、生きてることに理由とかはないってね」

ケンジは何事もないようにそう言った。

「世界にはさ、色んな人がいるよ。お金をいっぱい持ちたい人とか、難しい学校に行きたい人とかさ。他の人を自分の好きなようにしたい人ってのもいっぱいいるね。威張って、怒ってさあ、色々と命令して自分の好きなようにしたいって人がね。……親方とかもそんな人なんだよ。その割には変なところで相手のことを気にして、いまいちうまくいってないみたいだけどね。それから、好きな人を探している人、仕事を探している人、今が楽しければそれでいいやつて人もいるよね。みんな色々なものを欲しがってる……だから、それを一つの理由で言うのは無理だと思うんだ。……まあ、みんなは何かを探すために生きてるんだって言うことはできるかもしれないけど

ね。でも、そんな理由に意味があるって言えないと思うな」

「それは……人が生きるのは無意味だってこと？」

「違うよ」

ケンジは両手を振って否定した。

「意味がないって言ったのは、それがまったく大切なことじゃないって言うてるんじゃないんだ。お金をいっぱい持ちたいっていうのはその人にとっては大切なことだし、お金があると色んなことができるから、それはオレにもわかるんだ。ただ、オレはそんなにお金なんか持ちたくないけどね。オレが言うてるのはさ、お金を持ちたいとか、みんなに命令したいってことは……なんて言うか人間の世界の中でしか通用しないんじゃないかってことだよ」

ケンジは更に続けた。

「お金とかってさ、動物にとっては何の意味もないじゃない。偉いか偉くないかってことも関係ないよね。群れのボスとかはいるけど、人間が欲しがら偉さってそういうのとは別みたいだし。それはみんな、人間の社会の中でしか通用しないことなんだよ。……多分、人間の世界には目に見えないけど、そういう空間があるんだよ。人と人が一緒にいると……なんて言うか、ゲームのルールみたいなものができるんだ。人間はそれを使って一緒に暮らしてるんだ。そのルールは大きな海みたいに、人間の世界全部に広がってるんだよ」

「ケンジが言っているのは、コミュニケーションの海……みたいなことなの？」

「その言葉はよくわからないけど、多分、そんな感じだよ。人間はその海に生きてるんだ。それで……人間は何の為に生きるのかってことだけさ、オレはやっぱり幸せになる為に生きてるんだと思うな。でも、その幸せっていうのは、その海の範囲の中でしか見つけられないと思うんだ」

「……どう言うこと？」

「例えば……」

ケンジはしばらく考えた後、話し始めた。

「例えば……オレがオムライスを食べたくなるとするじゃない。多分、牛とかの動物にこのことを話しても……勿論、話せるとしたらだよ？ 多分、牛はその気持ちをわかってくれないと思うんだ。きっと、そこらへんの草を食べばいいじゃないって思うだろうね。世の中にはさ、信じられないけどオムライスが嫌いな人もいるから、その人もオレの気持ちはわかってくれないよね。でも、オレはお店に行って作ってもらったり、アヤナに作ってもらったりすると、とっても嬉しいんだ。他の人にはわかってもらえないかもしれないけど、オレはとっても嬉しいんだ。商店街とかコンビニに行って、欲しいものがある時って嬉しいよね。誰かは知らないけど皆の為に物を作って、用意してくれている人がいるって嬉しいよ。この世界に誰かオレとは別の人がいて……その人がいるからこそ、オレは好きなものが食べられるんだなって思うと、すぐその人に感謝したい気分になるんだ。オレはその人に幸せにしてもらっているんだなってね。……だから、オレも仕事を頑張るよ。自分のしたことが、誰かの幸せになるように、オレが家とかビルを造って、それが誰かの幸せになるんだったらすごくいいと思うよ。たとえ誰かが、オレのしていることには何の意味もないって思ってもね」

「そうね。その通りだわ」

私は呆然と呟いた。論理の展開は無茶苦茶だし、使っている言葉の意味も正確ではないけれど、だけどケンジの出した答えは、私の心に深く響いた。

「素晴らしい……とても素晴らしい答えだと思うわ」

ケンジは私の目を真っ直ぐに覗き込んで言った。

「だから、オレ……アヤナがここから出て行っても構わないよ」と。

「……何を言ってるの？ ケンジ」

私は呆然と呟いた。

「私が貴方の所から出ていくはずがないでしょう？」

「そうじゃないよ」

「じゃあ、私に出て行って欲しいの？」

「そうじゃない。そうじゃないんだ」

ケンジは静かに言った。

「オレはアヤナが好きだよ。ずっと大好きだ。……でも、オレと一緒にいてアヤナが好きなことができないって言うならオレは我慢するよ。アヤナみたいにオレに優しくしてくれた人はいないよ。一緒にいてくれたのはアヤナが初めてだ……だから、オレもアヤナの為に何かしたいんだ」

「そんなことを……考えてたのね」

私は可笑しくなった。ずっと自分よりも子供だと思っていたケンジに、そんなことを言われるなんて……今まで何処かで保護者ぶっていた自分が可笑しかった。

そして更におかしなことに、私の目からは涙が出て止まらなかった。

本当におかしな話だ。

「どうして泣いてるの？」

「どうしてかしら。自分でもわからないわ」

私はしばらくの間、泣き続けた。ここに来てからどれほどの涙を流しただろう。自分にこんなに涙が残っているとは思わなかった。もう、流し尽くしたと思っていたのに。

昔読んだ絵本の中に、自分の流した涙の海で溺れてしまう少女の話があった。読んだ時にはいかにも子供騙しのお伽話だと思ったものだ。しかし今、私の流した涙は私を包み込み、潤し、大きな流れ

となって私を海へと導いた。

コミュニケーションの海へと。

やがて涙が止まったとき、私の胸にはほんの小さな勇気が宿っていた。

「ケンジ……私はここから出ていかないわ」

私は呟いた。

「ここにいとると本当に安心することができる。自分の弱さを認めて無理をしないで生きていくことができる。当たり前の一の人間として生きていくことができるわ。私はここから出ていっても生きていくことはできないと思う。これは客観的な事実よ。私は結局、一人では生きていけない人間なの」

ケンジが悲しげな顔をする。私は頬を拭い、微笑んだ。

「でも、もう少し勇気を持ってみてでもいいかもね。貴方の言う、コミュニケーションの海と繋がる勇気をね」

「アヤナ」

ケンジが安堵の溜息を洩らす。これじゃあ本当に保護者失格だ。

「明日にでも……大学の方に電話をかけてみるわ。生きてるってことだけでも伝えなきゃね。復学させてもらえるかどうかはわからないけど……一応は伝えてみる」

私はそばに落ちていたケンジの携帯電話を拾い、フォルダーに指をかけた。

「通信技術の発達に感謝しなきゃね。何処にいても他の人と繋がることのできるんだから。そうね、私もケンジみたいにここから大学に通えばいいんだ。そうすれば貴方と離れなくてもいいじゃない？」

「無理だよ、アヤナは朝起きるのが遅過ぎるから間に合わないよ」

失礼だがもつともなことをケンジが言った。

「大丈夫よ。機材さえ揃えてしまえば、最近は家にいながらも仕事ができるんだから。別に毎日都会に行かなくてもいいのよ。これこそ情報化社会ってものだわ」

私は笑った。

「ケンジ。お願いだから私と別れるなんて悲しいことを言わないで。確かに私は貴方以外の人間との関係を修復しなくちゃいけない。でも、だからって貴方との関係をなくしたくはないの。貴方との関係は、私の中で一番大切なものだから……だから私は貴方と別れたくない。ケンジは人間の幸福は人間同士の関係の中にしかないって言ったわよね。だったら私の幸福は貴方との関係の中にしか存在しないわ。そうでしょう？」

私は冗談めかして話を続けることができなくなった。

いつしか私の涙は、再び流れ、頬を濡らしていた。

「私を一人にしないで。私は貴方と一緒に生きていきたいの」  
私は言った。

一人の女として。

「アヤナ」

ケンジが私の名を呼ぶ。

顔を上げると、涙で揺らめく水面の向こうに彼の姿が見えた。

「オレはどこにも行かないよ。アヤナがそう言うんだったらオレはアヤナと暮らす。じゃなくて、暮らしたい」

ケンジは照れ臭そうに笑った。

「やっぱり、オレも無理だよ。アヤナと離れて暮らすのはさ。ちょっとかっこいいこと言っちゃったけど……本当に出ていっちゃったかどうかと思うたよ。……なんか、かっこ悪いね」

そう言って微笑むケンジの顔は、いつものように無邪気なものでなく、何処か影を帯びた……しかし、綺麗な顔だった。

私はこの人となら、この星で生きていける。そう確信した。

私達は愛し合った。

長い時間をかけて一つになり、深い深い快感を得た。

私は疑問に思う。

これまでに行ってきたセックスで、私は本当に快感を得ていたの



だろうか。傷の痛みを忘れる為に、更に大きな傷をつけさせていたのではないかとさえ思う。

私は確かに彼と繋がっているのを感じた。そして更に大きなものと繋がっているのを感じた。それは大きな流れのようなものであり、私達の内にあり、外にもある。

それは否応なしに私達を飲み込んでいく大いなる流れだ。

私はケンジと共にその流れに身を委ねた。

そして、新たな流れが私の中に芽生えることを望んだ。

目を覚ますと、ケンジが布団から出ていることに気がついた。おぼつかない手つきで服を着ている。

「……どうかしたの？」

私が訊ねると、ケンジはこちらを向いて、少し出かけてくると言った。

何処へ？ と訊ねると、コンビニまでとケンジは答えた。

別にこんな時間に行かなくてもいいのに、と言うと、ケンジは少し欲しいものがあるんだと答えた。

以前の私なら不安に思っただろう。しかしこの時の私は安心感で満たされ、少しくらいのケンジの不在には何の疑問も抱かなかった。今まで生きてきた中で、これほど私の心が満たされていたことはなかっただろう。物心ついたときから片時も私のそばを離れなかった不安は、そこにはなかった。

「いつてらっしゃい。あんまり遅くならないでね」

私は布団から起き上がると、玄関に立ったケンジに声をかけた。

ケンジはドアに手をかけて止まり、振り返った。

「いつてくるね」

廊下の明かりに彼のシルエットが浮かび上がり、そして消えた。

私は思う。

この時、私は不安に思うべきだった、と。

私はずっと、孤独への不安がなくなることが望んでいた。他人を拒絶しながらも、安心で満たされることを望んでいた。

……だが、私は思う。

この時、私の心に不安があれば、どんなに良かったらうと。

ケンジは帰ってこなかった。

あれからどれくらい時が流れたのだろうか？

数ヶ月が過ぎたような気もするし、もしかしたら数日かもしれない。

もし数日だったら、ケンジは死んだわけじゃない、と考えた。何かの用事で帰れないだけで、今にひょっこり帰ってくる。そうに違いない。

それから、これは昨日も考えたな、と思った。

私の体は酷い状態だった。数日だか数ヶ月だか、何も食べていないのだから。しかし空腹は感じなかった。ただ無気力だけが全身を満たしていた。

何度が夢を見た。

あの蜘蛛の夢だ。久し振りだったので少し忘れていた。

私はもたれかかった柱に頭を軽く打ちつける。

そうしないと眠ってしまう。

頭を軽く振った瞬間、目の前の景色が変わった。

そこは寒く真つ白な部屋。

嫌な音がして扉が開き、蜘蛛が入ってくる。

私はベッドに腰掛けている。動くことができない。

自分の悲鳴で目が覚めた。

途端、何かがべとりと手に粘りついた。

何かの液体が私の下半身を紅く染めている。

……そして蜘蛛がいた。

私の足元、左前……今、足をかけた。

悲鳴、

悲鳴、

夢だ。

夢だ。

……でも、何が夢なんだ？

私は近くにあった物を手当たり次第に投げつけた。

彼の箸と彼の皿。

これで彼は食事を摂ったのだ。

ラジオと机。

彼が直したラジオ。

どうしてくれるんだ？ また壊れたら。

しかし、蜘蛛は何を投げてでも向かってくる。

私は外に逃げ出した。

体が思うように動かない。

足は震えている。

でも逃げなければ。

何処へ？

何処へ、何処へ？

何処へ、何処へ、何処へ？

扉を叩き割るようにして外に飛び出した。

階段を降りて一階へ。

壁や手すりに身体中を打ちつけて。

外に出る。

夏の陽射し、

いや違う夏はもう終わりだ。

冬がくる。

冬がくる。

寒い冬だ。

雪も降る。

……寒い冬だ。

嫌だ、

嫌だ。

冷たいのは大っ嫌いだ！

私は砂利を舐めながら、坂道を転げ落ちた。

/

私は高校三年生の教室にいた。

アサギと多くの時を過ごし、それでも消えない不安感から目を逸らしていた日々。大学時代のように研究もなく、無意味な受験勉強に時間だけが流れていった場所。

私は……この場所に立ち返ることを避けていたように思う。

「ねえ、アヤナ」

声がした。振り向くと、窓際に一人の少女がいた。短い髪にラフな服装。私と従姉妹のエリカが通っていた高校は私服だった。

「何？ ……えっと」

夢の中でよくあるように、私は自分の立場と役割を薄らと自覚していた。

ただ、名前が出てこない。よく知っていたはずの名前なのに。

「ごめんなさい、貴女の名前が出てこないわ。どうしてかしら？」

「勉強のしすぎよ、アヤナ」

少女が笑う。窓からの光が逆光になって顔がよく見えない。

「私の名前はチймニ。貴女の元クラスメイト。そうでしょ？」

「そうだったわ。……どうかしてた」

私はこめかみを押さえながら呟いた。

チймニというのは彼女のニックネームだ。本名は篠宮忍、去年まで私と同じ進学組の生徒だった。その由来は、背が高くて身体にメリハリがないから……まるで煙突みたいだね、と彼女自身が教え

てくれた。実際、彼女は少しも女性的な体つきをしておらず、そのスマートな長身は彼女の好む黒地の服装によって更に強調されている。顔つきは大人びており、特に目から鼻にかけてのラインは、この国の人間にはないエキゾチックな印象を与えた。

彼女は私と同じ進学組に在籍してはいたが、あまり勤勉な生徒とは言えなかった。祖父に高名な画家を持つ彼女は勉学よりも芸術活動に関心を寄せ、その頃から才能の片鱗を見せていた。私も含めて積極的にクラブ活動に参加しようとしなない他のクラスメイトとは異なり、自分から進んで美術部に入り……学校側からその自由気ままな生活態度が咎められると、学校生活のほとんどを部室で過ごすようになった。

あいつは美術部に登校しているな、とはかつての担任教師の言葉だ。

それでも彼女は平均以上の成績を保ち、留年は免れていた。しかし学校側との衝突が尽きることはなく、三年生に進級したと同時に選択科目の中に美術がなくなったことを理由に彼女は進学組を離れ、一般のクラスに移った。その途端、学校側からの干渉がなくなったのは言うまでもないだろう。まあ、そんな学校だったのだ。

当時、私と彼女の間には、クラスメイトという以外の接点も共通点もなかったように思う。三年生になってからはそれすらもなくなった。だが不思議なことに、彼女は私の高校生活の中で唯一親しくなった相手だった。毎日少しずつだが会話をしたし、同じクラスにいた頃は誰よりも私の隣にいる時間が長かった。三年生になってからも、放課後になるとよく私の所に来ていた。

この時もそうだった。

彼女は私にとって唯一の、友人……と言ってもおかしくない人間だったのかもしれない。

「そろそろ受験対策で忙しそうね」

チム二は教室の中を見回して言った。

「みんな高校に入った頃からしているわ。そうじゃなかったのは貴女くらいよ」

「それもそうね」

私に目を向けて可笑しそうに笑う。

チム二は不思議な女性だった。感情的なようできて非常に客観的、誰にでも心を開いているようでさっぱり本心がつかめない。

私はその不可解さに興味を持ち、彼女のすべてに客観的で突き放しているような態度のおかげで全くストレスを感じることなく付き合うことができた。だが、彼女のつかみ所のなさは多くの生徒の反感を買う原因になったし、彼女は彼女で他人に合わせる気は全くなかった。多くの生徒は最大限多くの他人に自分を合わせようとしていたが、彼女は自分についてこられる人間とだけいられればいいと思っていたようだ。

実際、彼女が他人に合わせることは難しかっただろう。人間にはそれぞれ器というものがある。彼女はそれが非常に大きい人間だった。象が鼠の真似をすることほど馬鹿げた話もないだろう。

「それにしても、アヤナが理系の大学に行くとは思わなかったわ」

「私に文学や歴史が研究できると思う？」

「まあね、貴女の現国の勉強法は教科書の解釈の丸覚えだもんね。

でも教科書の解釈なんて本当に文学を理解しているとは言えないわ」

「だから私は理系に行くの。わかった？」

「そうやって話を短くまとめるのはやめなよ。会話ができないじゃない」

チム二が苦笑する。本当に彼女は不思議な人間だと思う。普通の人間ならここまで突き放したような口調で話をしたら気を悪くす

るものだ。

ちなみに彼女は私とは対照的に長々と自分の考えを書き殴る癖があり、国語の試験はいつも赤点に近かった。これは彼女の文学への豊富な知識と興味の裏返しで、彼女にとって国語は美術以外で唯一本気になれる教科だったからだ。

そんな彼女が、かつて一度だけ極めて簡潔な解答をしたことがある。梶井基次郎の『檸檬』に対する感想だ。

『自意識過剰！ ソープランドに行け！』

これで彼女は初めて赤点を取った。

「でもさあ、理系って言っても色々あるよね。アヤナは何処に行くの？」

「詳しくは決めてないわ。家の方は医学部に行ったら喜ぶんじやない？」

実際、私は人体を解剖できる医学部に少し興味を持っていた。人間の観察者としてこれほど相応しい分野もないだろう。

「ダメよ、ダメ！ 医学部なんて古臭いわ」

「古臭い？」

「そうよ。あそこはかのギリシャから続く西洋合理主義の根城なんだから」

「私は別に哲学を学びに大学に行くんじゃないわ」

私は彼女の突飛な発想に辟易した。いつものことながら、こんな時は正直どうして彼女と会話をしなければならないのかと疑問に思ったりもする。私の思いを知ってか知らずか、彼女は妙に真剣な口調で話し続けた。

「哲学ってのは大切なのよ？ それこそいかに人間が発展し、進むかを示すものなんだから！ だから哲学はあらゆる分野の学問に及ぶし、すべての学問は哲学を内包しているのよ。ちなみに医学部の哲学はこうよ。すべての生物を分解し、その生命維持システムの全



貌を把握せよ。そしてそのシステムがどうすれば効率良く機能するかを調べ、どうすれば長持ちするか考える！」

彼女は言った。

「西洋人はこれを大昔からやってきたから、合理主義と資本主義を生み出したの。医学と資本主義は似ているわ。どちらも人の精神のことを考えないって点と、好き勝手に人間を痛めつけてもいいって考えてる点でね」

「私も人のことを考えないわ」

「ああもう、またそうやって人の話の腰を折る！」

彼女の話には独特の方向性がある。論理の展開自体は実に簡潔で的外れでもないのだが、奇妙なものを論拠として引っ張り出してくるのだ。

生物の説明に物理の法則を用い、音楽を味覚で表現する。その組合せが彼女の中でどのように成り立っているのかは疑問だ。

「だからね、私が言いたいのは医学に新しい哲学を創り出せる力はないってことよ。多分そう遠くない未来、医学は色々なことができるようになるわ。ロボの頭を人間の体にくっつけたり、硝子の心臓を体に埋め込んだりね。でもそれは今までの哲学の延長線上でしかない。どうにかして人間の体を長持ちさせようって考えからは抜け出せない」

「じゃあ、どの学部がいいの？ その、貴女の言う新しい哲学を創り出せるのは？」

チム二はニツと笑った。

「私が考えるには生物学ね。これは今、急速に発達している学問だからね。物理もスケールが大きくていいけど、あれはもう普通の人間が理解できる範囲を超えてるわ。それに物理ってのは、例えるなら世界っていうチェス板の構造を調べる学問よ。私はその上で行われるゲームの中身の方に興味があるの。アヤナもそう思わない？」

私は答えなかった。

「生物の行動の仕組みは？ 何故、そうなっているの？ それには

どんな意味があるの？ これは哲学の最重要問題と同じことよ。シンプルだけど奥が深いわ。それにどんなに難しくても、一般人の理解の範囲内にギリギリ踏み止まっていられる。それはゲームのルールに近いからね」

彼女は続けた。

「そして同じ生物として、生物学の哲学は簡単に人間に当てはめることができる。これはかなり大きな利点よ。もっとも、簡単すぎて誤解する人も多いでしょうけどね」

彼女は芝居がかった身ぶりで両腕を広げた。

「今、必要なのは全く新しい論理と哲学よ。ものが溢れて生きる方向が見えなくなった時代にこそ必要な哲学……別に無理して生きていかなくても関係ない時代だからこそ必要な哲学よ。我々は何処から来たのか？ 何を為すべきか？ そして何処に行くのか？」

「そして、生きるとは何か？ これこそ全ての人間が追い求めるべき問題なのよ」

「私に哲学は必要ないわ」

その頃の私は目の前の問題に対処することに精一杯で、彼女の話には対処できていなかった。実際の話、彼女の視線は私より遥かに遠くのものを見ていたのだろう。目の前の問題に気を配っているだけでは生きていけない時代がやってくる。彼女はそのことに気づいていた。

それは個人個人が自分自身の生き方を見つめ直さねばならなくなる時であり、新たな道を自分で決めなければならない時だ。その時は哲学こそ人間に必要なものとなるだろう。後に好景気が終わり、この国全体が再発達の必要性に直面した時、私は彼女の言葉を思い出してそう思った。

だがこの時、私は家と学校に支配される時間はまだまだ続くと考えていた。

チーム二は私が関心を持たないので戦略を変えた。彼女はいかにも面白そうなことを思いついた顔で私に話しかけてきた。

「それじゃあ、アヤナに面白い問題を出してあげる」

「問題？」

「そう、問題。アヤナっていつも何か考えてるでしょ？ だから暇潰しの問題よ」

彼女はニヤニヤ笑いながら言った。

「ただし、解けるのには大分時間がかかるかもね」

「私に無駄な時間はないわ。そろそろ予備校に行かないと」

私は大学進学が決まった頃から予備校に通っていた。

「ああ、問題を聞くだけだから時間はかからないわ」

「いいわ。聞くだけよ？」

「うん、それでいい」

チーム二は満足そうに微笑むと話し始めた。

それは実際には少し長く、妙な話だった。

「私の知り合いに男がいるのね。まあ私達と同じくらいの年の人間だと思つてよ。背は中くらい、顔はまあまあ……結構可愛い顔をしてるわ」

「……それは問題と関係があるの？」

「まあまあ、最後まで聞きなさいよ。ここまではただの前振り！話の枕よ」

チム二は思わせ振りに人差し指を立てた。

「この前、私はその男と街中ではったり会つたの。時は二週間前、土砂降りの日の夕方よ」

チム二の話をまとめるところだった。繁華街をぶらぶらと歩いていたチム二は、偶然その男と会つたらしい。男は自転車に乗って傘をさしていたが、奇妙なことに身体の半分以上が濡れだつたそうだった。

「勿論、私は変に思つたわ。そいつ結構ぼんやりしてるんだけど、流石にそこまではバカじゃないと思つたしね。で、私は聞いたわけよ。どうしてそんなに濡れなのってね。そしてら、そいつ何て言つたと思う？ 傘のない人がいたから自分の傘に入れてあげたんだった。でも、変だと思つてしょ？ 普通、傘に人を入れたくらいでそこまでは濡れないわよね」

「大きい人だつたんじゃないの？」

「まあ、それに近いわ。違うのは身体が大きかつたんじゃなくて、車椅子に乗つた人だつたってことかな？」

その男が傘を差しながら自転車に乗っていると、車椅子に乗った人が覆いも何もない橋の上を、何も雨避けになるものを持たずに移動しているのを見かけたらしい。それでその男は自分の持つていた傘を車椅子の人に差し出したというのだ。

「最初は自分も半分、傘に入ってたらしいんだけどね。ほら、やつ

てみるとわかるけど、自転車押しながら傘を差すのって難しいし、お互いにうまく入れないよね。車椅子とは高さも違うしさ。それで最後にはその人に傘を渡して、しかもずっと横について歩いてたらしいわ。その人とは橋を渡りきったところの商店街で……アーケードあるじゃない、あそこで別れたらしいから、距離的にはそんなにないんだけどね。でも、ずぶ濡れになっちゃったってわけ」

チム二は首を傾げながら言った。

「それにしても……どうしてそんなことしたのかしらね？」

「自己満足じゃない？ 人助けして目立ちたかったのよ」

私はいつの間にか彼女の話に聞き入ってしまったことが腹立たしくて、そう答えた。それに実際にそうとは思えなかった。

しかしおかしなことに、チム二は私の答えを聞いて笑い出した。「やっぱり貴女に話して良かったわ、この話！」

「……どうして？」

「だって、同じこと言ったんだもの、そいつ。私がどうしてそんなことしたのって聞いたら、自己満足だって。こんなことは偽善に過ぎないってね」

「じゃあそれでいいじゃない」

私は少し腹を立てた。ただ、少し疑問も湧いた。

「でも妙な話なのよ。自分じゃ自己満足だとか何とか言ってるくせに、やたらとその人のことを気にしているの。あの後、どうしてるだろ？ とか、体が濡れてたけど大丈夫かな？ とかさ。あのまま傘をあげれば良かったかな、なんてぶつぶつ言ってるのよ？ それでも用事があつて急いでたから仕方ないよな、なんて言ってるのが可愛いとこなんだけどね」

「馬鹿らしい」

私は吐き捨てるように呟いた。

「それはただ単にその男が矛盾の多い分裂した精神構造を持っているだけじゃないの？ そんな些細なことまで考えるなんて時間と労力の無駄よ」

「そうね、そうかもしれない。そいつはとても不自由な人間よ。車椅子の人は肉体的に制限がかかっていたけど、そいつは精神的に多くの制限がかかっているの。何処か貴女と似てるわ」

「何処が？」

「何処だろうね」

チム二は一瞬、寂しそうな目をした。時折彼女はこのような顔をする。いつもの底抜けに明るい表情の奥から、もう一つの顔が覗くことがある。

「ねえ、アヤナ。考えるってことはやっぱり必要よ。それは厄介なことでも何の得にもならないかもしれないけど、人間には考えるってことが必要なのよ。今度のことでも考えるべきことはあるわ。例えば……どうして、その男は自己満足と思いながらも他人を助けたのか。これは些細なことだけど奥の深い問題よ」

「何が言いたいなの？」

訊ねると、チム二はいつもの調子を取り戻した。

「だから、人生には哲学が必要だってことよ！ 人間は自然を離れ、退化して多くのものを失ったわ。だからこそ哲学が必要なの。自分の頭で考えるってことが必要なのよ」

チム二との話はそこで終わった。私は予備校に行き、チム二は帰宅した。

この日の会話は彼女と私の間で為された幾つもの会話の一つに過ぎない。彼女の話は多くの人には理解できないものだったし、その一部は私にも理解できないものだった。

その後の進路調査で、私は生物学科を志望した。チム二に言われたからではない。医者は他人と接する機会が多く面倒だと思ったのだ。

私は比較的新しい私立大学に合格した。そして当時はまだ無名の助教教授だったカジワラと出会い、人工生命の話聞かされることになる。似たような研究がアメリカで既に行われており、カジワラは

これに影響を受けて新たなプランを思いついたのだ。私は彼の研究を助けるといふ形で、プランの具体的な形を決めていくことになる。それは私が生まれて始めて行った、一から何かを組み立てる作業であり、初めて見つけた目的だった。多くの人の助力とアイデア、そして幸運の結果、プランは成功し……私は一人の研究者としての人生を歩むことになった。

このことが私に与えた影響は大きい。私の自己は成長し、アサギから吸収した知識と技術を応用して、通常の対人関係にも積極性を出すことができるようになった。

そこに至るきっかけを与えたのは、チーム二の問いかけであつたのかもしれない。

チーム二はギリギリの単位数で高校を卒業した後、美術の専門学校に進学した。やがて専門学校を中退して単身海外に渡り、気鋭の新人アーティストとして華々しいデビューを飾った。

やはり、彼女はこの国に収まる大きさの人間ではなかったのだろう。おそらく彼女は天才と呼ばれる者の一人に違いない。普通の人間には見えないものを見透かし、聞こえないものを聞いた。彼女が私に問いかけたことは、彼女自身が抱いていた疑問であつたのかもしれない。そして彼女は、私の中にも自分と同じ疑問があることを見抜いた。

私自身も気づいていない疑問がいずれ表面化し、私を捕らえるのを予測して、あの質問を投げかけた……そんな気さえする。

もつとも、彼女が何処まで自覚的だったのかはわからない。ただ多くのもの感じ取り、行動に移してしまえることが、彼女の天性であつたように思う。

そう。

彼女は今……。

夢はいつしか覚めるもの。

私は再び二十五歳の世界へと投げ出された。

雨が降っていた。素足の裏に濡れたアスファルトの感触がある。硝子の破片でも踏みつけたのか、酷く切っているようだ痛みは感じなかった。前髪の先端から雫が落ちる。気温は下がり霧が出てきている。視界が悪い。

ふと足元がぐらついた。小石が落ちる音がする。霞がかかった意識を足元に向け、私は凍りついた。そこには裂け目が広がっていた。

断裂は限りなく垂直に大地を抉っていた。霧のせいもあるだろうが、以前と同様底まで見通すことはできず、ただ澱んだ闇が顔を覗かせている。

対岸は霧に覆われて全く見えず、白い闇が何処までも広がっている印象を与えた。

引き返さなければ、と私は思った。

このままでは転落してしまう。

だが、私の足は動かなかった。視線を逸らすことさえできない。私は魅入られたように裂け目に潜む闇を見つめ続けた。

……このまま落ちてしまえば楽かもしれない。

そんな考えが当たり前のように浮かび上がった。

死んでしまえばすべてが楽になる。

そう考えた。

最初から無理があったのだ。私はこの世界で生きていくべき人間ではなかった。チムニは言った、人間は動物から退化したと。おそらくはそうだろう。人間は人間となることで自然界から追放された。過剰に発達した神経伝達回路から生じた文化という名の錯覚は、



人間自らを破滅の道に追いやろうとしている。何が進化なものか。猿でも知っている自然のバランスを崩し、単細胞生物並に繁殖を繰り返すだけじゃないか。

私はその人間の中でも極めつけの欠陥種だ。人間の社会に溶け込むこともできず、人間から身を離すこともできない。常に何かを求め、何も得ることはない。

私は人間の欠陥種だ。

死を選べ。

そうすれば人間という種も少しはましになるというものではないだろうか？

欠陥種など不要だ。

大人しく死を選べ。

私はぼんやりと闇を見つめた。死という名の闇を。

闇はさつきよりも穏やかに見えた。

暗黒の上を白い霧が漂っていく。

それはとても美しい光景。

何かを心底美しいと思ったのは初めてかもしれない。

今まで繋がっていなかった回路が繋がリ、感覚が研ぎ澄まされたかのようだ。

私は嬉しかった。

これで最後なのだ。これくらいの愉しみが残されていてもいいだろう。

私の心は一片の澱みもなく澄みきり、奇妙なことに朗らかな気分さえ感じていた。こんなに何もかもから解放されたような気分になったのは初めてだ。何だか幸せ過ぎて恐い気がする。

妙な話だ。幸せを感じれば、そのことが気に触るなんて。

これで最後なのだ。

もう何も悩むことなどない。

私は自分を受け入れてくれるものを感じた。

壁のように聳え立つ巨大な闇の中に温もりを感じた。

この温もりには覚えがある。ずっと昔、この温もりが私を包んでくれていた。

私はこれまでずっと、この温もりを追い求めていたのかもしれない。

私はこの温もりを知っている。

全てはこの底にあるのだ。

お父さん…… もう少し待っていてね。

傍らで長い髪が揺れた。視線を向けなくとも誰がいるのかわかった。

「また貴女なの」

『つれないわね』

女が言った。

「こんな所にまで出てこないで」

「仕方ないわ。私は貴女と一緒に闇を眺めてきたんだから。今まで  
も、これからもね」

「これからはないわ」

『そう？』

女が微笑んだのが感じ取れた。

「何故、貴女は私を止めるの？ 私が生きていて何の意味があるの？  
私が生きることには何の価値があると言っの？」

『意味なんかないわ』

女が言った。

『貴女の大切な人が言っていたように、人生に意味なんかない。た  
だ、それでも生きなければならぬだけよ』

「どうして？」

『……もう、わかっているはずよ』

不意に女の存在が消えた。私は辺りを見回し、女が何処に消えたのかと探した。

その時、私の目に空が映った。当たり前前の光景。世界。……私が生きてきた世界。雲の隙間から一筋の陽光が射し込み、雨に濡れた坂道を輝かせた。

私は気づいた。

この世界は綺麗だと。

もしかすると、繋がった回路がまだ機能しているのかもしれない。私は生まれて初めて出会うような気持ちで世界を眺めた。それは平凡な光景なのかもしれない。だが、全てが輝いて見えた。

二、三步先に携帯電話が落ちていた。どうしてこんなところに落ちているのだろうか？

そうか、蜘蛛に投げつけようとして手に持ったままここまで来たんだ。

携帯電話。

あれがあれば、研究室に電話をかけることができる。

私はもう一度だけ人間の世界と繋がりたいと望んだ。

許されるかはわからない。それでももう一度、誰かと話したかった。

私は震える足を引きずって屈み、携帯電話に手を伸ばした。

闇が動いた。

私が手を伸ばした瞬間、背後で闇が動いた。振り向いた私が見たものは、襲い来る闇の姿だった。闇は蜘蛛のように長い手を伸ばし、私を捕らえた。

足元の大地が崩れ、私は落ちてゆく。

永遠に続く、底無しの闇へと。

私は恐怖した。

このまま世界から切り離され、閉じ込められることを恐怖した。

救いを求めた。

そして、心の底から深く、誰かと繋がることを望んだ。

見えない手が私の体を包み込み、闇の淵から引き上げる。

首筋に触れる暖かな感触。

……私は彼を知っている。

E  
N  
D

## レポート - 1

雲の隙間から太陽が姿を現し、ブラインドを白く輝かせた。

ブラインドの隙間から射し込んだ光が机上を縞模様にもたらす。小島佐織はコンピュータのモニタから目を離し、携帯電話に視線を向けた。

花村綾菜が姿を消してから半年が経つ。正確には、新塚健児の事故が起きた夜から200日が過ぎようとしている。彼女が姿を消してから様々な出来事が起きた。それはサオリ自身に関する出来事であり、サオリの所属する研究室の問題であり、そして花村綾菜に関することでもあった。

まず、ホムンクルスの復旧に関する問題が研究室を襲った。予測外のバグによりホムンクルスが壊滅的なダメージを受け、数値的な人工生命達はほぼ絶滅した。更に規模を縮小し続けるホムンクルスに対して、これ以上の計画の続行を疑問視する声が上がったが、サオリやタヤマ……研究に携わる者はまだ判断はできないと主張した。仮想的な環境とは言え、環境の激変後に新たな生物相が形成される可能性があるからだ。

夜空に新しい星が出現する瞬間さえ待ち続けられる科学者に比べて、指導者や出資者はせっかちだ。大学はスポンサーの立会いのもとで研究室を査察し、研究の存続を決定するまでの期日を一ヶ月に設定した。

それからの一ヶ月はまさに大混乱だった。研究室のメンバーのみならず、何故かタカハラやオカダ達まで一緒になって研究を存続させようとした。その為には新たな生物相の発見が必要不可欠だったが、時間は絶対的に不足していた。教授のカジワラも走り回っていたが、彼に限っては保身の為に動いていたようだ。

ほぼ不眠不眠でホムンクルスの探索が進められた。査察は少し延期された。タカハラ達がちょっとした働きかけをしたからだ。もっ

とも、彼らの友人だという大企業の社長を介して為されたその『妨害工作』という名の働きかけは相手に気づかれていないし、詳細な説明は控えた方が賢明だろう。特にタヤマが自作のパソコンを用いて行ったことなど、それだけで一本の小説が書けそうなほどのものだ。

今でもタヤマは酒の席で、ある踊りを交えながらその時のことを話す。それは何とも滑稽な『パソコン』と『踊り』にまつわる話なのだが、公開すると彼の研究者人生が断たれてしまうことは間違いないので誰も口にすることはできない。

小説と言えば、タカハラが連れてきた小説家は奇妙な男だった。タカハラで紹介で研究室の取材に来たこの男は、後に研究室の騒動やその他の問題に不思議な縁で関わっていくことになる。

査察の当日、彼は研究棟の一室に集まった大学関係者とスポンサーを前に『世間話』と称して話を始め、二時間もその場に足留めしてしまった。その過程は一緒にいたサオリもうまく説明することができない。まるで魔法にでもかけられたかのように、いつの間にか二時間が経ってしまったのだ。

現実とは妙なものだ。その二時間が過ぎた直後に、それまで発見できなかった新種の生命……後に『7』と名づけられるものが発見されたのだから。

『7』は僅かに残った『6』と『イジドア』の結合体だ。正確には『6』の構造体の中に『イジドア』の情報体が入った形をしている。これによって『7』は常に情報変異を繰り返すと同時に、かつての『6』にこそ及ばないものの規模の大きな集団を形成することができるのだ。この生物進化の過程を模倣するような発見により、研究は手の平を返すように存続することになった。

これが直ちに進化の謎を解き明かす発見だとはサオリは考えていない。ホムンクルスはあくまでシミュレーターだ。絵に描かれた風景がどんなに精密でも現実の風景とは異なるように、小説に書かれ

た世界がどんなにリアルでも現実の世界とは異なるように、ホムンクルスは実際の生物進化の過程を再現したりはしないだろう。だが、多くの人が描かれた風景から自然の美しさを知るように、記された人生に共感し教訓として心に刻むように、世界をシミュレートすることには意義がある。

人が複雑な世界の全てを理解することは不可能だ。だからこそ要素のみを抽出し、分析を加え、試験しなければならない。気象の変化、経済の動き、化学反応、生物活動、人の心理や恋愛感情。科学と芸術は互いに分野を異にしながらも、星の数程の要素を分析してきた。限られた細部は世界そのものではないかもしれない。しかし、細部にさえ世界は宿っているのだ。

科学者と芸術家は共に世界を切り崩し、その真実を知ろうとしてきた。例えばその道のりが果てしないものだとしても、人はわからないことを知りたいと、思い続けてきたのだ。

ホムンクルスの一件が解決した後、サオリはもう一つの『わからないこと』を調べ始めた。それは彼女の生涯において最大の謎……花村綾菜の謎だった。

彼女がいなくなつてから、サオリは自分が彼女について何も知らないことに気づいた。地方の小さな町の出身とは聞いていたが、家族の話は聞いたことがなかった。身なりから裕福な家の出だろうとは思っていたが、それも想像の域を出なかった。彼女は滅多に自分について話をすることがなかった。

サオリが彼女の生い立ちを知りたいと考えたのは、それが彼女の居場所を探す手がかりになるかもしれないと思ったからだ。だが新たに動き始めた研究の計画に追われ、サオリ自身にそれを調べる時間的余裕は作れそうもなかった。

彼女は他人と距離を置いて生きていたし、他人に合わせるような人間でもなかったが、不思議と反感を買うことも少なかった。姿を消した時も心配する声こそ上がったが、研究の肝心な時にいなくな

ったことを責める声は殆どなかった。だが、大学の研究室は共通する目的を持つ者の集まる場であって家族ではない。参加する人間の行動は干渉されるが、いなくなれば集合からは切り離される。一個人として心配する者はあっても居場所を探そうとまではしない。警察も真剣に取りあつてはくれなかった。

代行者は意外なところから現れた。例の小説家が話を聞いて調査に乗り出したのだ。仕事柄、彼は物事を調べることに慣れていたし、彼自身の興味もあった。そして何より、驚いたことに彼とアヤナは同じ高校の同級生だったのだ。もっとも、これは彼に花村綾菜の名を告げたときに判明したことであり、彼自身も驚いていたようだが、同級生と言つても二人が会話を交わしたことはなく、ただ共通の友人を持っていた程度だったらしい。

ただ、彼自身は彼女のことをただの同級生とは思っていないかったようだ。それは今回の件に協力を申し出たことや、彼女のことを話す時の彼の表情からも読み取れた。

一度、高校時代の彼女はどんな人だったのかと訊ねたことがある。綺麗な人だった、と彼は答えた。自分の世界を持っていて、近寄りがたい存在だったと。それから小さく笑った彼の姿に、サオリは片想いの相手に結局ずっと声をかけられなかった自身の高校時代を思い出した。

好きな女性に話しかけられない割にと言うと失礼かもしれないが、探偵としての彼は優秀だった。サオリはわずか数週間でアヤナの生い立ちについて知ることができた。

しかしその内容は、実に奇妙なものだった。

彼が調査結果をサオリに報告する際、彼自身の手で事実関係を確認し終えて尚、

「これは本当の話ですからね？」  
と断ったほどに。



## レポート - 2

花村綾菜の父親は小さな教会の牧師であつた。彼は娘が生まれる数年前に彼女の母親と知り合い結婚した。彼の生い立ちは全くわかっていない。本当に牧師の資格を持っていたのかも疑わしい。ただわかつているのは、彼がいつの間にかある港町の小さな教会の牧師になったということだけだ。彼の牧師としての仕事振りは悪いものではなかったらしく、教会に通う信者の数も少なくなかったようだ。娘を生み落として間もなく妻が亡くなるという不幸はあつたが、それ以外は特に大きな出来事もなく、平穏な日々が続く。

アヤナが五歳の頃に教会が全焼し、父親が死亡するまでは。

その後、アヤナは資産家であつた母方の親戚に引き取られ、その家で大学進学までの日々を過ごすことになる。

ここから話は妙な方向に進む。それはアヤナの父親にまつわる話だ。

アヤナの父親はプロテスタント教会の牧師として聖職に従事する以外に、全く別の形で宗教活動に携わっていたらしい。

二十年以上昔に広まった宗教団体……『殉教』と称して信者が集団自殺を図つたことで有名な狂信的団体がある。入信直後に消息を断つた若者の家族からの訴えで警察が捜索に乗り出し、教団と衝突した結果、数名の警官と信者が死亡する事件が起きた。警官の捜査を阻止する為に信者が警官を刺し殺し、自らの命をも断つたのだ。

警察は教団を激しく弾圧、ついに教団は空中分解した。いや、教団の幹部までが『殉教』してしまつたので教団自体が機能しなくなつたというのが正しい見解だろう。その後も残された信者が教団に殉じて自殺する事件が相次いだ。しかし目の前で死なれていく警察官や信者の家族はともかく、社会的影響は少なかったので、一時的

に騒ぎにはなつたもののいつしか忘れ去られていった。

当時まだ生まれていなかったサオリが知らなかったのも無理のない話だ。

この教団とアヤナには意外な関係がある。教団は複数の幹部によつて運営されていた。彼らは一人を除いて全員が『殉教』している。その最後の一人……最後まで姿を現さず、正体のつかめなかった人物こそがアヤナの父親だというのだ。

勿論証拠があるわけではない。教団のトップに立ち、自らを死に導く教義を広めた人物の存在こそ確認されていたものの、その正体は警察もつかめなかった。ただ、彼が教団の崩壊後も生き延びていたことは確かなようだ。

小説家はこの話をとある定年を迎えた元刑事から聞いた。彼は当時の教団捜査班の一員であり、ずっとアヤナの父親を追っていたそうだ。だがその行方はようとして知れず、ようやく居場所を突き止めた直後、彼は火事で死亡した。

その元刑事は教会の焼け跡の側に一人で住み、定年後の生活を送っている。小説家は元刑事から譲り受けた、教会の跡地から発見された物を見せてくれた。それは小さなセルロイドの人形や、銀の十字架、綾菜の父親が使っていたと思われるノートだった。

話は一旦、その後のアヤナに飛ぶ。

アヤナは父親を失った後、親戚に引き取られている。彼女は幼い頃の記憶を殆ど持っていないらしい。あの子から昔の話を聞いたことはなかったからね、とは彼女と同居していた従姉妹の言葉だ。アヤナの父親について何か知っているかと訊ねてみたが、何も知らないようだった。

彼女は高校までアヤナと同じ学校に通い、仲も良かったようだが、アヤナの詳しい生い立ちについては何も知らなかった。彼女の親が話さなかったのだろう。彼等もアヤナの父にまつわる噂など存在自体知らなかったようだ。

ともかく、アヤナは問題も起こさずに大学に進学し、この地を離れている。

『まあ、昔からあの子は大人しかったし、問題起こしたこともなかったよ。私と違ってさ。本当に頭が良くて真面目な子だったね』

『あの子を叱ったことはほとんどありませんでしたね。小さい頃は、少し変な所はありましたけれど……』

『いやあ、引き取った時はどうなるかと思いましたが、あの子が立派な学者になってくれて安心しております』

順に従姉妹の女性、引き取った叔母、叔父のコメントだ。小説家はタカハラの雑誌の取材という名目で訊ねたので友好的なコメントが多いのは当然としても、誰に聞いてもアヤナが問題を起こしたというような話はなかった。

花村綾菜は自制的な人間だ。問題となるような目立つ行動を起こすとは思えない。大学に入ってから男性遍歴は派手だったが、それも大学生活とは切り離していたし、花村綾菜という人間は驚く程に自分をコントロールしていた。

しかしだ。

幼い頃に親戚に引き取られた……両親を失い、記憶もないような少女が全く問題を起こさないものなのだろうか？

疑問は他にもある。

アヤナを引き取った親戚一家は、彼女のことを完全に他人と考えているようだった。従姉妹は姉妹だと思っていないし、叔父夫婦は子供だと思っていない。仮にも十年以上共に暮らしてきたのだ、信頼であれ拒絶であれ、普通は何らかの親密な関係が存在するものではないだろうか？

だが彼等は、アヤナのことを偶然同じ建物に住んでいた隣人のような口調で語った。連絡も取り合っていないらしく、アヤナが失踪したことも知らなかった。

彼女はここには帰ってこないでしょうね、と小説家は言った。

家族と言え、実の父親とアヤナの関係も奇妙だ。

アヤナの父のノートに書かれていたのは実の娘の観察記録だった。幼い子供の記録をつける親など幾らでもいる。しかし彼のそれはただの記録ではなかった。動物の成長記録でもここまでは書かないだろうと思われる程に詳細に……冷静に記された『観察』記録。そこには当然あるべき親としての愛情は微塵も含まれていなかった。

その一切の私情を省いた文章の隙間から這い上がってくるのは、獲物が太るのを待っている狼のような視線。ヘンゼルとグレーテルに出てくる魔女はヘンゼルを牢屋に閉じ込め食事を与え、太るのを待っていた……そんなことを思い出させた。

アヤナの父親が統率していたらしい教団には幾つかの容疑がかけられている。その中には幼女誘拐も含まれている。これは信者の娘が何人も『殉教』と同時に姿を消したことから浮上した容疑で、はっきりとした事実関係はわかっていない。

かつて教団に妻と幼い娘を奪われた元刑事は、そうは思っていないようだが。

何なのだろう、この話は？

小説家から話を聞かされた後、サオリの疑問は却って大きくなっていた。とても真実とは思えない。アヤナの生い立ちも、父親の話も、教団の話も、まるで何処かの小説のようだ。最初、サオリは小説家がでっちあげた作り話ではないかと思った。だが小説家はサオリ以上に混乱し、参っているようだった。

## レポート - 3

サオリは昔の新聞から切り抜かれた教団の写真を眺めた。それは警察の強制捜査を受ける直前に行われた新聞社からの取材による記事で、教団の幹部が取材に応じた唯一の記録だ。そこでは他愛もない教義が語られていた。

現実への不満。理想郷の意義。そして、それが死後の世界にしかないこと……過去に腐るほど存在した厭世的な主張、言い換えれば御大層な現実逃避だ。わからないのは、何故この主張に多くの人間が惹きつけられ、自らを死へと向かわせたのかだ。時代背景を考慮しても不可解さは残る。

サオリはそこから暗い力の流れのようなものを感じ取った。明確な言葉で表現することはできない。だがその写真は、人を闇へと押しやる暗い力のようなものを連想させた。

教団のシンボルマークである黒い蜘蛛のレリーフの前に、虚ろな目をした信者達が立っている。新聞に掲載される写真独特の荒い粒子のせいもあって、彼らは現実の人間には思えなかった。

僕はアヤナさんについて何を知っていたんでしょうね？ と小説家は言った。当時、彼女に関しては色々な噂が絶えなかったそうだ。「家族とは血が繋がっていなくて虐待されて庭に住んでいるとか、金持ちの男の愛人だとか、別人のような格好をして遠くの街で遊んでいるのを見たとか、物凄い金額の遺産を相続しているとか……まあ、綺麗で無口な子にはとかく妙な噂がつきまとうものですけど、彼女は特別それが多くて。でも、正面切って訊ねる奴はいないんですよ。みんな遠くから見てる感じで……僕もその一人だったんですけどね」

私は彼女について何を知っているのだろうか？

自分が知っているのは、研究室で計画の指揮を取る彼女の姿。そして、二人きりの時に優しく抱き締めてくれたこと。彼女の腕の中

にいるとき、サオリは彼女に甘え、安心することができた。

だが。

彼女が時折覗かせた、全てに絶望したような表情。自分自身にさえ価値を見い出すことを諦めたような割り切った考え方……それらは何処からきたものだったのか。あの自らを摩り減らすような男性遍歴も、何かに追い立てられてのものだったのか？

サオリはアヤナの側にいた。彼女の中の暗闇にも気づいていたはずだ。だが、サオリはそのことには気づかないふりをしていた。自分のことで精一杯だった。甘えるばかりで、相手のことなど考えていなかった。そして確かに側にいた存在が消えた時、知らなかったものの大きさに驚かされた。

彼女が何を考え、何を見つめていたのか。故郷へと赴き、生い立ちを調べれば、真実に近づけると思っていた。だが現実はその逆だ。調べれば調べるほどに奇妙な事実が現れて理解を妨げる。

例えば、新塚健児のこと。

アヤナが姿を消した夜、新塚健児が交通事故で死亡している。サオリは新塚健児とアヤナの間に何らかの経緯があったと推察した。彼の事故現場に居合わせた直後にアヤナは姿を消しているし、タカハラの話からも彼とアヤナとの間に何らかの繋がりがあったと思われる。タカハラは新塚健児自身の口から、彼が一時期アヤナの故郷に滞在していたことを聞いていた。

この事実を知らされた時、これこそが花村綾菜失踪の謎を解く鍵になると思ったものだ。だが意外なことに、彼とアヤナとの繋がりは何一つ見つからなかった。

確かに親戚の者は彼の名を知っていたし、彼等の家に彼が訪れたこともあったようだ。しかし、

『ああ、確かに来たことがあったわね。でも一回だけだし、それつきり会ったことないわよ？ ほとんど話をした記憶もないわ』

と従姉妹の女性は言った。幾つかの事実を繋ぎ合わせてみると、確かに彼女の言葉は真実のようだった。アヤナの叔父と新塚健児の父親は仕事上の付き合いがあり、その関係で一度だけアヤナの住んでいた家を訪れた、ただそれだけのようだ。とてもアヤナと彼との間に繋がりがあるとは思えない。彼の死によってアヤナが姿を消さなければならぬ理由が何一つ見当たらないのだ。

二人が再会した当時の様子から察するに、大学進学後に別の場所で再会していたとは思えない。だが十年近くの時の流れを越えてまで、アヤナを動揺させるような出来事が過去にあったとも考えにくい。勿論、いくらでも勝手な憶測は可能だが、そんなあやふやなものを根拠にしたいくはない。

失踪の原因を彼女の過去に求めていたサオリは、そこで大きな壁にぶつかった。もしかすると全く別の要因が関わってくるのかもしれない。もし、それが事故や犯罪に関わるものならば、それはもう警察の領分だ。いくら口がうまくとも、小説家の手に負える範囲ではない。

だが、それでもサオリは何処かに引つ掛かるものがあつた。アヤナの失踪は彼女自身に原因があるように思えてならないのだ。それは研究者としての勘。渾沌とした世界の中に一筋の光明を見い出すことができる探究者としての感覚。サオリは自分にそれがあることを信じたかった。

新塚健児に関する資料として、小説家は彼の撮った写真集を幾つか持つてきた。小説家は元々新塚健児のファンだったらしく、彼の作品には詳しかった。

アヤナのことを考えるとき、サオリは時折それらを眺める。

彼は撮影技術を専門学校で学んだような職業写真家とは違い、現場のアシスタントをこなしながら実践技術を培ってきたタイプだったので、アイドルのグラビア撮影から風景写真まで、かなり手広く仕事をこなしていた。アーティストとしてのエゴを表に出すことも

なく、仕事や対象に合わせた画面作りをしていた。だが根底に流れる感覚は全てにおいて共通していた。儚気な、それでいて凜とした視線。それは控えめだが決して揺らぐことのない、芸術家としての姿勢に思えた。

サオリはロック以外の芸術には疎いが、才能ある人間だったのだな、と思う。

新塚健児は多くの人間に愛された人間だったようだ。普段飄々としているタカハラやオカダも、彼のことになる表情を曇らせる。それは彼の死を悼む為、彼の死によって精神を崩壊させてしまった一人の少女を悼む為だ。

真珠という少女の写真集がサオリの手元にある。髪を鮮やかな青に染めた人形のような少女。そのあどけない表情と扇情的な身体のアンバランスさの魅力は、新塚健児の控えめな構図によって逆に一層引き出されている。その美しさは同性であるサオリにも恐いほどにわかった。いや、むしろ女性であるからこそわかる美しさを引き出せる新塚健児のセンスにこそ目を見張るものがあつた。

その少女……新塚健児の婚約者だった少女は今、病院にいる。彼女の精神は恋人の死の瞬間を目撃する衝撃に耐えられなかった。アヤナと新塚健児との関係を知る唯一の人間と思われるが、今の彼女は完全に心を閉ざしており話をすることは不可能だ。

真実へと至る道もまた、そこから先は闇に閉ざされている。



## レポート - 4

サオリは新塚健児の最後の写真集が好きだ。

それは彼が仕事の為に撮った作品ではなく、本当に個人的な作品集としてまとめたもの。何処にでもある風景、花や空の写真。特に目を惹くものが写っているわけではないし、派手な構図もない。見えるのは、世界の中心から少し離れた場所に立ち、寂し気な瞳で世界を眺めている一人の男の姿だけだ。

この写真集には、小説家の処女作にあたる小説の表紙に使われた写真も含まれている。何でもその写真を気に入った小説家がタカハラを通して頼み込み、製版の際に使わせてもらったのだそうだ。

逆光に照らされて輝く、何処までも続く道。

新塚健児の好んだモチーフだという。

その写真を眺めながら、サオリは考える。

人は何を知り、何を知ることができないのだろう、と。

失踪した美人学生。

その秘められた生い立ち。

人を自殺へと導く宗教団体。

その幹部でありながら自らは生き延びた男。

一つ一つの要素を調べ上げるのは可能だ。それらはいつか結びつき、一つの形を作り上げるかもしれない。それが真実に近づくということなのかもしれない。

だが、それはサオリから見た真実に過ぎない。

アヤナにとつての真実は何処にあるのだろうか。彼女を取り巻く問題の構造は解明できるかもしれない、だがそれは本当に彼女の問題なのか？

他人から見れば問題に見えることが、その人にとつても問題であるとは限らない。他人の目には些細に映ることも、本人にとっては

深刻な事態であるかもしれない。

私は貴方ではなく、貴方は私ではない。

人は他人のことを完全に理解することはできない。

近づくことは出来ても真実が重なることはない。

人の心は一つの世界のようなものかもしれない。

時の流れは一つではなく、真実はその世界によって姿を変える。

サオリにはサオリの世界があり、オカダにはオカダの世界があり、タカハラにはタカハラの世界がある。

小説家には小説家の世界があり……アヤナにはアヤナの世界がある。

「私達は何を知ることができるんでしょうね。真実に辿り着けないならば、何を書く意味があるのでしょうか？」

最後にそう言い残し、小説家は立ち去った。彼もサオリと同じく真実を知ることの壁にぶつかったようだ。

彼はこのことを小説に書くだろうか。材料は長編小説が書ける程に揃っているはずだ。推理小説にしてみようのもいい。それともサスペンスものに仕上げるべきだろうか。あまりに現実離れしていて安っぽいものになってしまうかもしれない。だが彼は何らかの形でこれを文章にするだろう。同じ真実を求める者として。サオリはそう思った。

科学者が実験を繰り返し、その結果を組み合わせ世界の形を確かめるように、小説家は自らの中に物語を作り、世界の形を確かめる。その作業はまた、サオリ達がホムンクルスを通じて生物の進化過程を突き止めようとするにも似ているだろう。どちらも真実には至らない。だが実験を通し、文章を通し、物語を創り出すことによつて、次の一步を踏み出すことができるはずだ。

それはまだ見ぬ誰かと出会う為に、宇宙へとロケットを飛ばすことに近い。真実を求めることは、わかり合えぬ誰かに手を差し伸べることだ。

いつまでもわかり合えないかもしれない。手が届くことはないのかもしれない。

それでも、手を伸ばし続けるのだ。

サオリとオカダは数日前に婚約した。まだ早いかもしれないけど、と言ってオカダは銀の指輪を差し出した。オカダは海外に渡りミュージシャン修行をしていた時期があり、その時に知り合ったブルースミュージシャンにこれを貰ったそうだ。元々は対になったシルバリングで、そのミュージシャンはピアスにしてつけていたらしい。今はサオリの左手の薬指に輝いている。オカダは職業柄、指に物をつけられないので、肌身離さず持っているギターの弦にくくりつけている。

今、オカダは長年の夢であるクラブの経営に向けてスタジオミュージシャンの仕事をこなしている。サオリは彼が夢を実現させることを願っているが、バンド活動が休止中なのは少し残念だと思っている。

オカダは少し頼りない割に心配性だが、誠実にサオリのことを愛してくれている。サオリも精一杯彼の気持ちに応えるつもりだ。彼と出会う以前にタカハラと関係を持ったことについては、タカハラ自身と話し合っているし、サオリもあれば社会勉強のようなものだったと思っている。オカダは生涯のパートナーだと思う。そのパートナーと出会う前に多少なりとも多様な経験を積めたことは、決してマイナスにはならないはずだ。

タカハラはサオリを気遣ってか、最近研究室に顔を出さない。だが口にこそ出さないが、彼もアヤナの帰りを待っているようだ。サオリも待ち続けている。

……どうして？

それは自分自身にすらわからないことだ。

アヤナの父親が残したノートに記されている一文がある。小説家

の話によればフランスの作家の言葉を引用したもので、神の存在を失った時代の人間に対する言葉。

牧師が引用するには相応しくない言葉だ。

「幻想と光を奪われた宇宙で

人は孤独な異邦人となる

彼の追放は終わることはない

何故なら彼は失われた故郷の記憶や

約束の土地の希望さえも剥奪されているのだから

「……それでも、私はあの人を知っている」

サオリは小さく呟いた。

A m e n .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2244g/>

---

レポート

2010年10月8日11時55分発行